昭和56年度秋田城跡発掘調査概報

秋　田　城　跡

秋田市教育委員会
秋田城跡発掘調査事務所

秋 田 城 跡 正 誤 表

S.56

ページ	行	誤	正
2	28	X＝－2,407m，Y＝193,7801m	X＝－2.407m，Y＝193.7801m
4	4	SX561カマド状遺構	SX561Aカマド状遺構
	4	SX562カマド状遺構	SX561Bカマド状遺構
	6	X＝126,7483m，Y＝133,4109m	X＝126.7483m，Y＝133.4109m
		H＝48,685m	H＝48.685m
	11	SI564竪穴状遺構	SI563竪穴状遺構
5	4	平，丸瓦，格子目瓦	平・丸瓦，格子目瓦
7	表 III	縄目叩 r r ℓ ℓ ＞L ＞R	縄目叩 L｛r r R｛ℓ ℓ
	表 IV	模骨 痕 縄目叩 r r ℓ ℓ ＞L ＞R	模骨状痕跡 縄目叩 L｛r r R｛ℓ ℓ
8	10	板の 型	板の范型
第23図		D	O
第24図		東西ベルト（10Eライン）	東西ベルト（OEライン）
34	第43図		須恵器蓋 4（2－283）
35	第44図		鐙 瓦 10（2－251）
40	第49図		須恵器甕 2－327
41	6	・色砂層出土遺物	褐色砂出土遺物
41	第50図	2（2－307）A 11（2－320）	2（2－307） 11（2－322）
51	表XIV	縄目叩 r r ℓ ℓ ＞L ＞R	縄目叩 L｛r r R｛ℓ ℓ
51	表XIV	模骨 痕	模骨状痕跡
	表XIV	・ ←	⑥ ←
63	20	X＝332,242m，Y＝－80,963m	X＝332.242m，Y＝－80.963m
		H＝37,299m	H＝37.299m

序　　文

史跡秋田城跡の発掘調査は，昭和47年に秋田城跡発掘調査事務所を開設し，以来継続して調査を進めてまいりましたが，早いもので10年の歳月が経過しました。この間，急増する現状変更許可申請等に伴う事前緊急調査を行いながらも，基本的には秋田城跡解明のために努力してまいりました。特に今年度は，秋田城の内城地域と推定されている地区の調査に着手できましたことは大きな喜びでありました。

今年度の調査結果としましては，第32次調査で築地，溝状遺構，櫓状建物跡を発見し，これまで推定の域を出なかった北外郭線屈折部が明らかになりました。また，内城解明の足掛かりともなる第33次調査では一本柱列による区画遺構，鍛冶工房跡，建物跡などを検出し，さらに50年度から継続調査を進めてきました鵜ノ木中央地区の第34次調査では，すでに検出されている沼地の西域を明確にしたほか井戸跡なども発見されました。

このように多大な調査成果を上げることができましたことは，常日頃ご指導ご援助をいただいております文化庁はじめ，宮城県東北歴史資料館，同多賀城跡調査研究所，秋田県，並びに多くの地元の方々のご協力の賜ものと深く感謝申し上げると共に，今後の調査につきましてもさらにご指導，ごべんたつを切にお願い申し上げるしだいであります。

本報告書は，今年度調査の概要をまとめたものでありますが東北古代史研究の一資料として活用していただくと共に，秋田城跡の保護対策の一助となればまことに幸いであります。

昭和57年３月

秋田市教育委員会

教育長職務代行者　次長　池　田　　正

目　　次

Ⅰ　調査の計画……1
Ⅱ　第32次発掘調査……2
　1）調査経過……2
　2）検出遺構と出土遺物……4
　3）まとめ……16
Ⅲ　第33次発掘調査……17
　1）調査経過……17
　2）検出遺構と出土遺物……19
　3）各層位出土遺物……38
　4）墨書土器と転用硯……42
　5）第33次調査出土瓦……57
　6）まとめ……60
Ⅳ　第34次発掘調査……62
　1）調査経過……62
　2）検出遺構と出土遺物……65
　3）まとめ……75

例　　言

◦本概報の図面・遺物整理・原稿執筆・編集には，秋田城跡発掘調査事務所の各職員があたった。

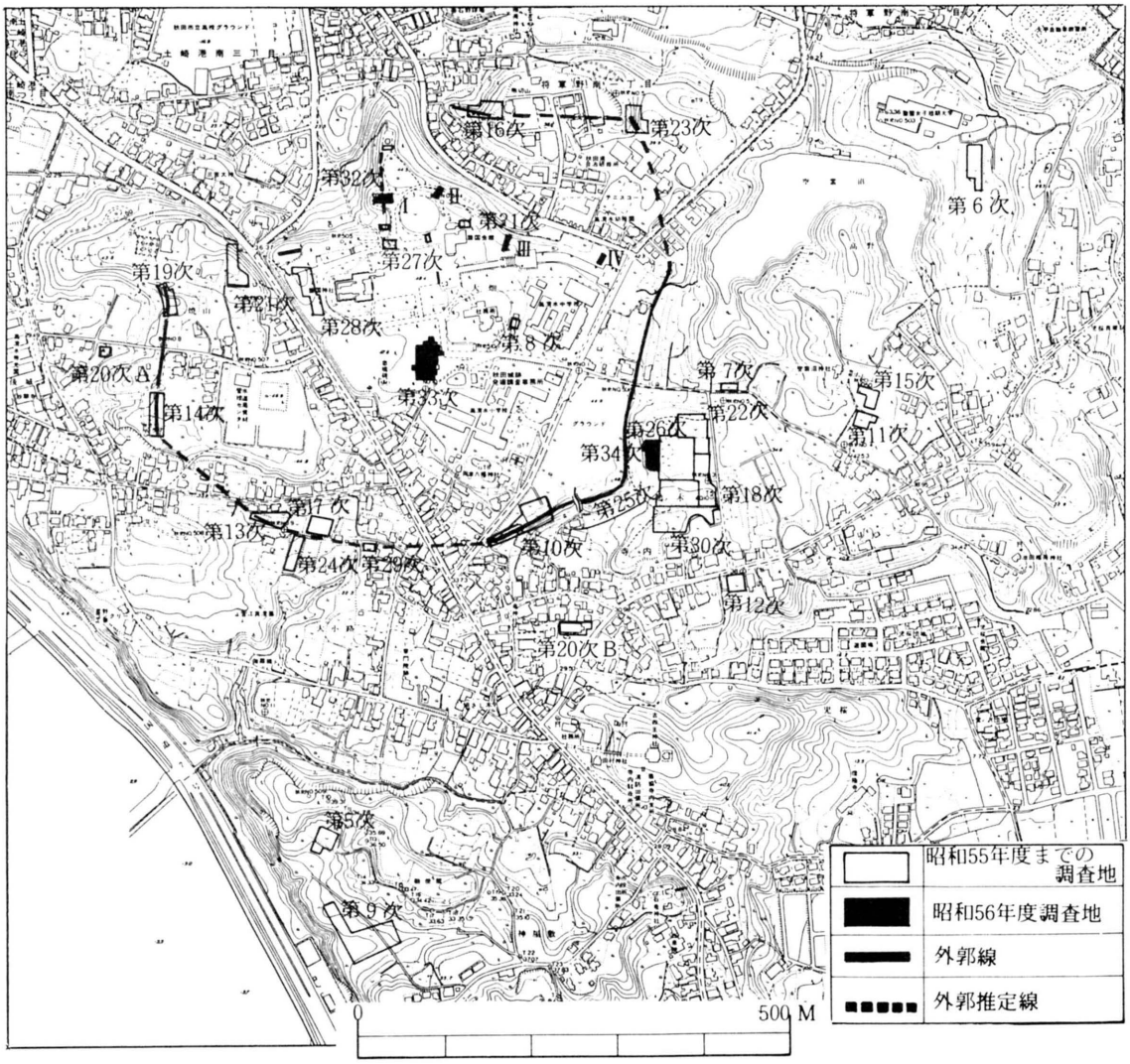
◦各次数の担当は下記のとおりである。

第32次　石郷岡誠一

第33次　小松正夫，西谷隆，西鳥羽礼子

第34次　日野久

◦第33次調査出土の墨書土器については，その一部の判読と赤外線テレビカメラによる写真撮影を，宮城県東北歴史資料館の平川南氏にお願いした。



第１図　秋田城跡地形図および調査地域図

Ⅰ 調 査 の 計 画

昭和56年度の発掘調査は，50年度以来調査を継続してきた鵜ノ木地区と北外郭線のうち明確さを欠いていた北西屈折部の確認調査，それに秋田城における最大の課題でもあった正庁地域究明のための神社境内広場の計三ケ所を設定した。

発掘事業費は，総事業費1,500万円のうち国庫補助額50%（750万円），県費負担額25%（375万円），市負担額25%（375万円）である。調査計画は次のように立案した（表Ⅰ）。

表Ⅰ　発掘調査計画

調査次数	調査地区	発掘面積㎡(坪)	調査実施期間
第32次	護国神社境内北部	331㎡(100)	4月5日～5月15日
第33次	〃　〃　広場	955㎡(289)	5月16日～8月12日
第34次	鵜ノ木中央地区西側	1,024㎡(310)	8月13日～10月31日

第32次調査は，昨年度第31次検出の築地遺構追求も大きな課題であったので想定線上に4ケ所のトレンチを設定して実施した。その結果，第1トレンチとした外郭想定線上に築地痕跡，また築地崩壊後の溝状遺構と櫓状建物が検出され北外郭線が明確なものとなった。しかし他の三ケ所のトレンチでは，築地遺構は検出されず，第31次検出の築地追求の目的は達成されなかった。

第33次調査は神社境内広場を，これまでの国営調査の結果を元に，また地形的条件から内城域と考えその東辺地域という仮定で実施した。調査の結果，下層東側からは重複する南北棟の建物跡，また上層からは，一本柱列による区画遺構の西南の一画とそれに囲まれた形で鍛冶工房跡，建物跡，住居跡等が多数検出された。これらのことから内城地区の使用については，時期によって大きな相違のあることが判明した。

第34次調査は，50年以来調査してきた鵜ノ木地区の西北にあたり，この調査をもって中央平担部については終了することになる。調査の主たる目的は第25・26次調査で検出されていた沼地の西限を追求することにあった。

調査の結果は井戸跡，土壙跡等の検出とともに沼地の西域を明確にすることができた。また高清水丘陵全体を覆っている飛砂が，調査区の西壁付近を東限とすることが判明するなど大きな成果があった。昭和56年度の発掘調査実施状況は次のとおりである。

表2　発掘調査実施状況

調査次数	調査地区	発掘面積㎡(坪)	調査実施期間
第32次	護国神社境内北部	299㎡(90)	4月7日～5月21日
第33次	〃　〃　広場	1,162㎡(352)	5月22日～9月25日
第34次	鵜ノ木中央地区西側	864㎡(261)	9月26日～12月12日

なお第33次調査では9月19日現地説明会を開催し，一般市民への文化財に対する普及に務めた。

Ⅱ 第32次発掘調査

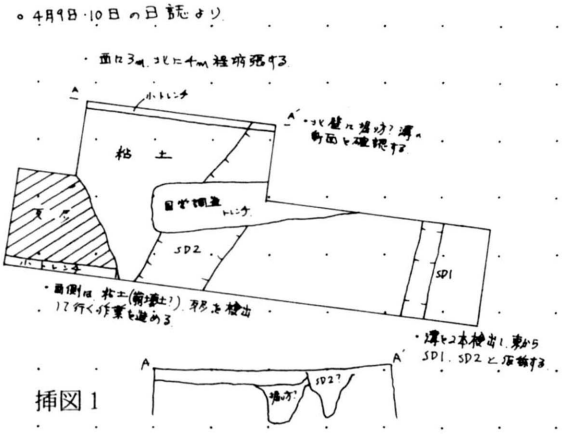
1）調 査 経 過

第32次調査は秋田市寺内字大畑の護国神社境内北部に第１から第４までの４本のトレンチを設定して４月７日から５月21日まで実施し，その発掘調査面積は299 ㎡（約90坪）である。

調査地周辺は，昭和54年度に第27次調査を実施しているが築地遺構は発見できなかった。しかしこの地域は東西に走る築地が北に折れ，舌状部に向って延びることが想定されているところである。また，55年度の第31次調査では築地遺構を検出している。そこで今次調査では，北辺外郭築地屈折部の検出と，さらに第31次調査検出の築地遺構の追跡調査という両者を主目的に実施された。

調査の結果，第１トレンチでは北辺外郭屈折部ＳＦ552築地跡，ＳＢ553Ａ・Ｂ建物跡，ＳＤ554～556溝跡，ＳＡ557柱列が検出された。第２～４トレンチでは，第31次調査発見の築地遺構の延長部分は確認できず，わずかに第２トレンチで粘土の高まりＳＸ558が検出された。他にＳＩ559，ＳＸ561・562などが発見されている。

第１トレンチ

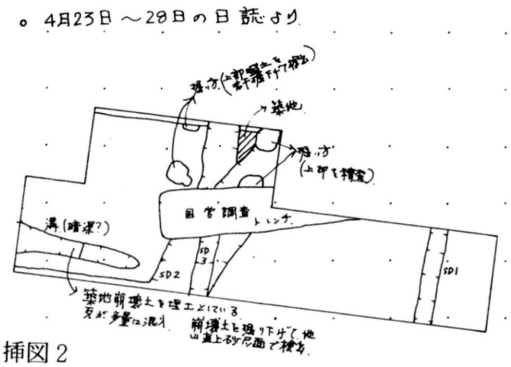


挿図１

第１トレンチは，第27次調査地の北方，舌状部のつけ根部分に地形を考慮して任意に５ｍ×25ｍのトレンチを設定する。ここは，昭和34年～37年までの国営発掘でトレンチによる調査が実施されている。

４月７日から表土除去作業を開始し，８日までに国営調査トレンチ，西側で瓦の混入する粘土面を追跡した結果，多量に瓦が混入しており，粘土面は崩壊土，崩壊瓦と思われる。東側砂層面でＳＡ557柱列を検出する。10日～12日は，国営調査トレンチを完掘後に断面でＳＢ553Ａ建物跡東南部掘り方，ＳＤ555溝を確認する。さらに，崩壊土を掘り下げて瓦層を現して行く。13日，瓦層を精査中に格子目瓦が混入していることが判明する。北壁沿いに小トレンチを設け掘り下げた結果ＳＤ554・555溝に切られたＳＦ552築地を断面で確認する。14日には，ＳＤ555溝を掘り下げ，南部でＳＤ554溝，北東部でＳＢ553Ａ建物跡の掘り方を検出する。さらにＳＦ552築地を平面的に追跡した結果，小範囲ではあるが遺存していることが判明した。16日には，全景写真撮影を行う。17日に遣り方設定のため№10測量原点からトラバースして原点を移動し，基準点をＸ＝－2,407 m，Ｙ＝ 193,7801 m，Ｈ＝ 47.99 mに設定した。22日まで１回目の平面実測を行う。23日～５月１日は，崩壊土瓦層を除去した地山層面で，崩壊土を埋土にもつＳＤ557溝を検出し，西半分を完掘後に断面図，写真撮影を行う。北部では粘土面を徐々に掘り下げＳＢ553Ａ建物跡の西南掘り

方を検出する。２日～６日には，ＳＢ553Ａ建物跡，ＳＡ557柱列の断ち割りを実施する。ＳＢ553Ａ建物跡の西南掘り方に重複する古い掘り方の存在が確認され，Ｂ建物跡とする。８日から15日まで各遺構，北・東壁の土層断面図，写真撮影を行い５月16日に第１トレンチの調査を終了する。



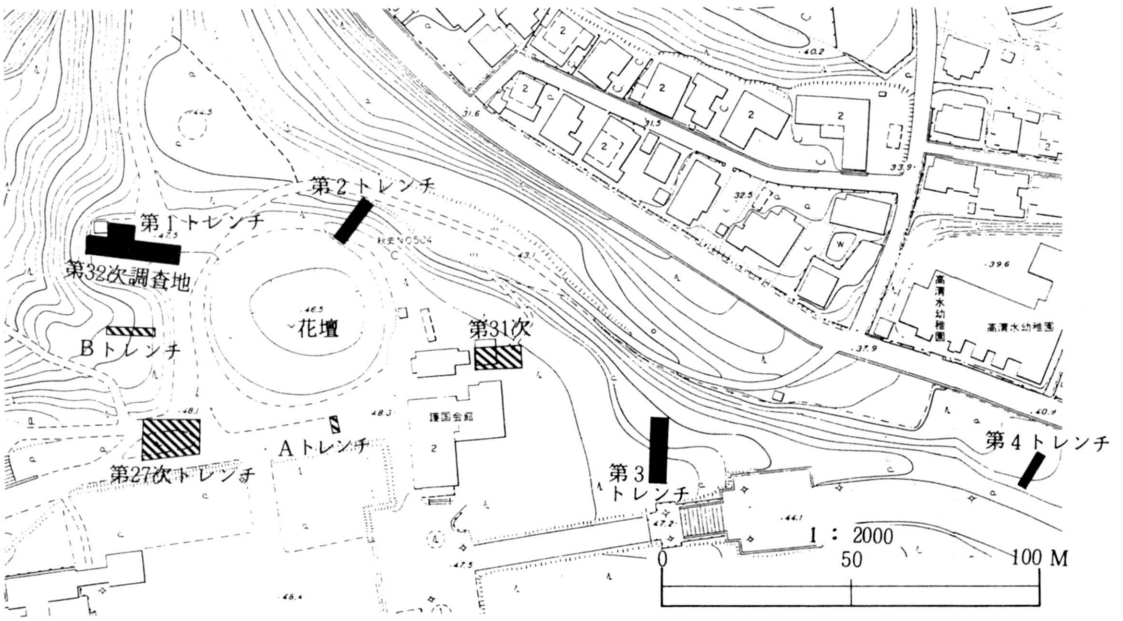
挿図２

第２トレンチ

第２トレンチは，第１トレンチの東方約50ｍの地点である。ここは神社花壇の北部に当り，土手状の高まりが延びており，これに直交するように３ｍ×13ｍのトレンチを設定した。４月14・15日に表土除去作業を行う。表土は厚い部分で約１ｍの新しい盛土で覆われ，その下部に約３０㎝の旧表土がある。16日には中央部でＳＸ550粘土の高まりを検出する。粘土は固く，築地の可能性も考えられたが大部分壊されており詳細は不明である。18日，炭化物層下の褐色砂面で円形の落ち込みＳＫ560を検出する。また北側に延びるＳＩ559竪穴状遺構を確認，床面まで掘り下げる。21日～30日は東・北壁の写真撮影，土層断面図作成後に平板で平面実測を行う。また第１トレンチ測量基準点から原点移動し，Ｘ＝ 57.727 ｍ，Ｙ＝ 208.205 ｍ，Ｈ＝ 43.442 ｍに基準点を設定した。５月１日に埋め戻し，調査を終了する。

第３トレンチ

第３トレンチは，昨年度第31次調査地の東南約60ｍの地点である。ここは第31次調査で検出した



第２図　第32次調査周辺地形図

築地の延長部と想定される地域で，土手状の高まりから北方に３ｍ×16ｍのトレンチを設定した。４月18日～24日まで表土除去作業を実施する。南側土手状の高まりは厚さ約1.5ｍの新しい盛土で覆われ，下部には旧表土が堆積していることが判明する。５月６日～11日は，焼土炭化物層面でＳＸ561カマド状遺構，さらに下層でＳＸ562カマド状遺構を検出するがいずれも攪乱が激しい。13日には地山砂層を現す。南壁際でピットを検出する。14日～17日には平面図，土層断面図を作成し，その後全景写真撮影を実施する。測量基準点は№10から原点を移動してＸ＝ 126,7483 ｍ，Ｙ＝ 133,4109 ｍ，Ｈ＝ 48,685 ｍに設定した。５月21日に埋め戻して終了する。

第４トレンチ

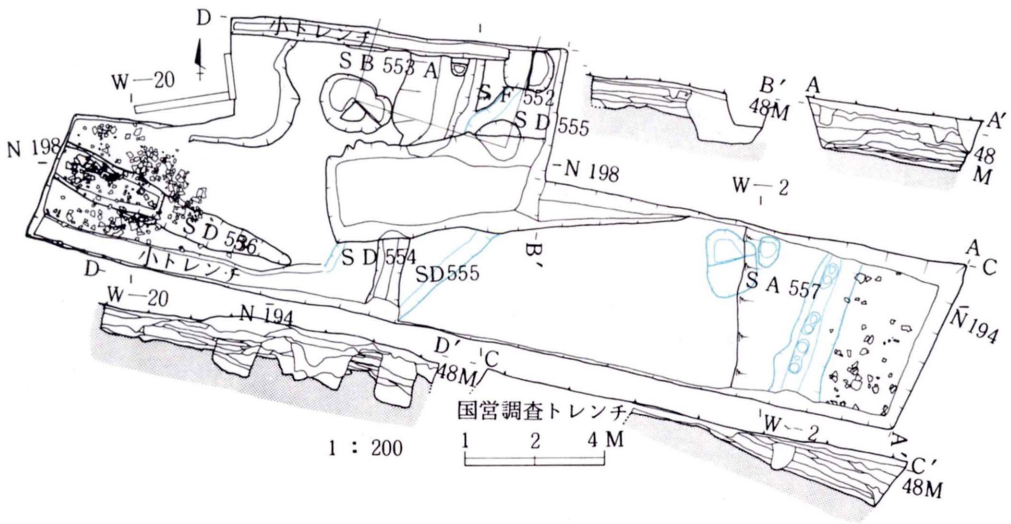
第３トレンチの東方約60ｍの地点に2.5ｍ×10ｍのトレンチを設定した。南側の土手状の高まりは新しい盛土で約2.8ｍの厚さで堆積している。北側は，表土，赤褐色土を除去すると地山ローム層に至る。５月16日までにＳＩ564竪穴状遺構を検出する。18，19日に平板による平面実測，さらに断面図，写真撮影を行う。測量基準点は№10から原点移動し，Ｘ＝ 240.2026 ｍ，Ｙ＝ 146.0894 ｍ　Ｈ＝ 42.589 ｍに設定した。20，21日に埋め戻して調査を終了する。

２）検出遺構と出土遺物

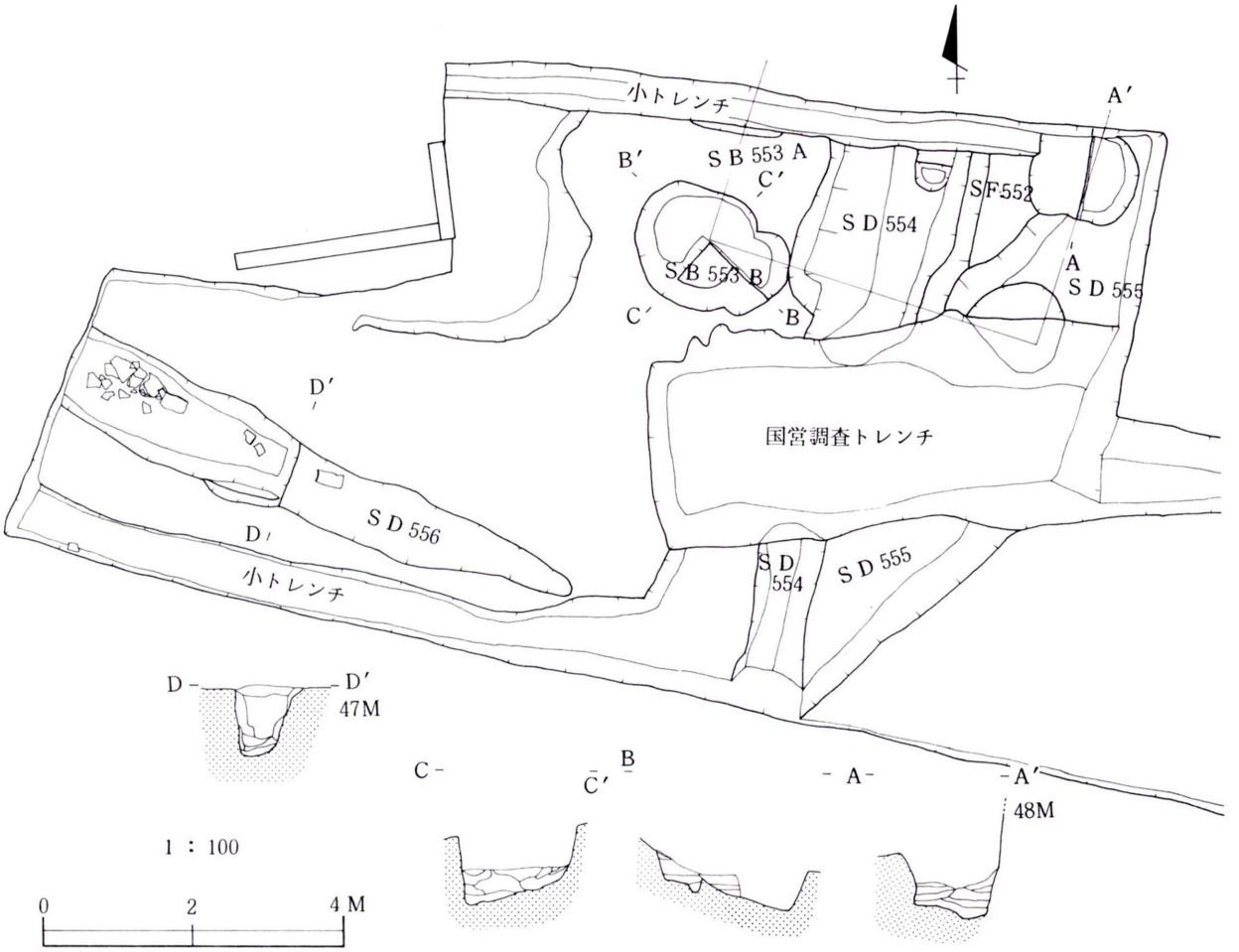
第１トレンチ

ＳＦ552築地（第３，４図，図版２）

ＳＦ552築地は，トレンチ中央部北側で検出された。東側がＳＢ553Ａ建物，ＳＤ555溝，西側はＳＤ554溝によって切られている。南側については，築地検出面が表土からあまり深くないことや，地山砂が南に向って高くなっていることなどから攪乱によって削平されていると思われる。築地本体は，幅約１ｍ，高さ約８０㎝，長さ約1.5ｍ程で現存している。構築方法は，地山砂層上に直接黒色土混りの粘土，赤褐色・褐色粘土を積み上げて版築しているが，版築の状態はこれまで検



第３図　第32次調査第１トレンチ検出遺構図



第4図　第1トレンチ西側検出遺構図

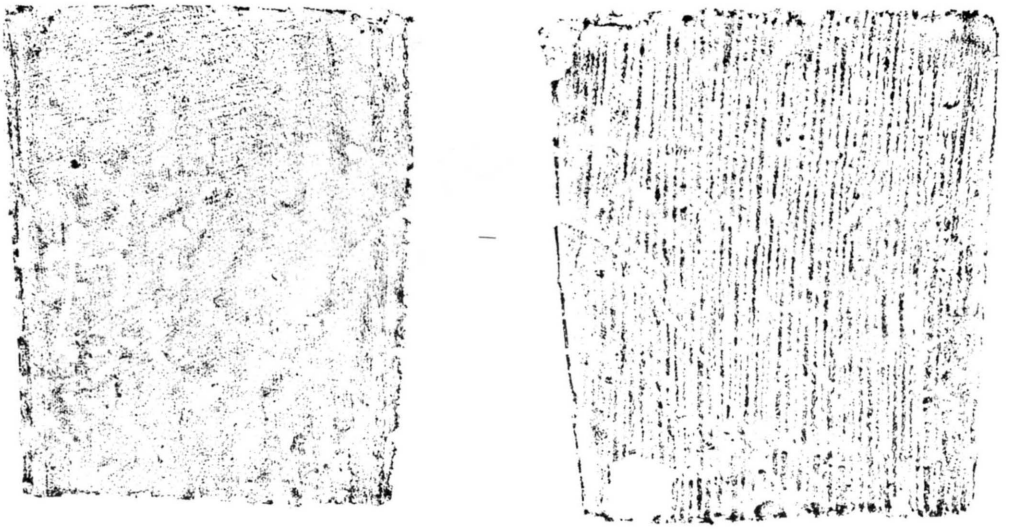
出されている築地に比較すると良好ではない。寄柱は両側面ともＳＢ553建物，溝に切られており不明である。

ＳＦ552築地崩壊土出土瓦

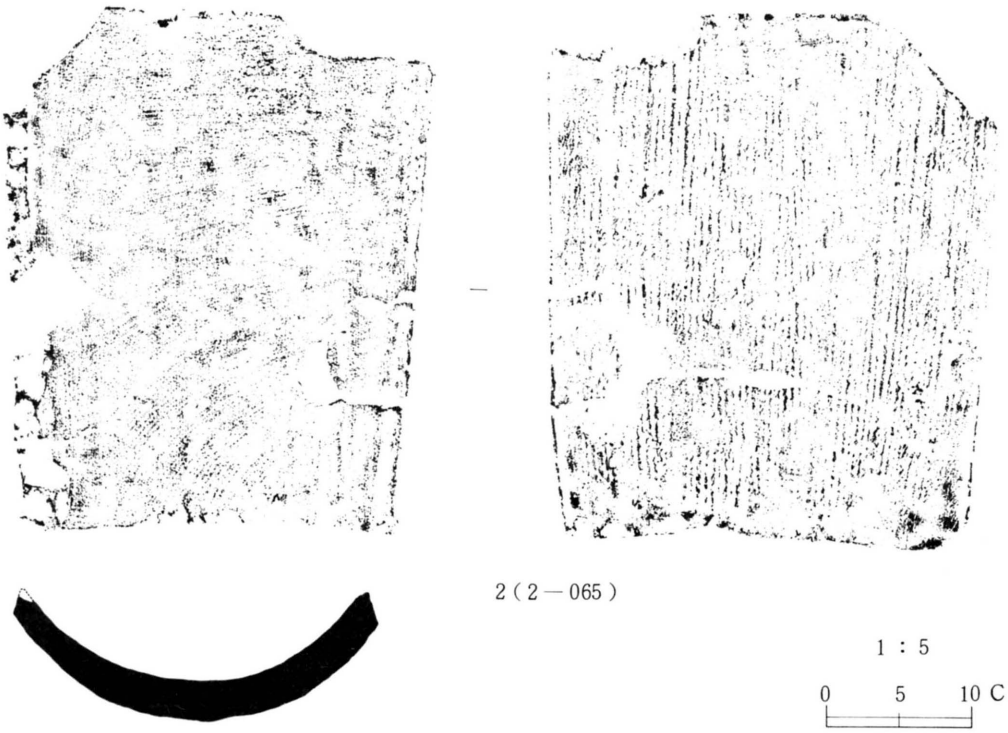
築地崩壊土から多量の平，丸瓦，格子目瓦が出土した。ここでは出土した瓦中，側縁，広・狭端部が残存しているものについて観察を行った。

平瓦（第5図，図版24）

復元したものも含めて，側縁，広・狭端部の残存しているもの83点について表Ⅲのように項目別に観察を行った。凸面はすべて縄目の叩きがあり，ヘラ消しはみられない。また縄文の原体はすべてＬ$\left\{\begin{matrix}r\\r\end{matrix}\right.$である。凹面は一枚作りの特徴と思われる布目端がみられるもの26点，桶巻作りの特徴と思われる全面に布目のみられるものが1点，模骨状痕跡のみられるものが9点程認められるが上端から下端まで通るものは少ない。また糸切り痕跡のみられる瓦が48点あり，糸の入る方向をみるとＡ→Ｄ10点，Ｄ→Ａ11点，Ａ→Ｂ・Ｄの中点に向うもの11点である。数は少ないが，ＡＣ，ＢＣの中点からやや斜めに入るものもみられる。面取り技法については，圧倒的に側縁が④に，広狭端部



1（2－064）



2（2－065）

1：5

0　5　10 CM

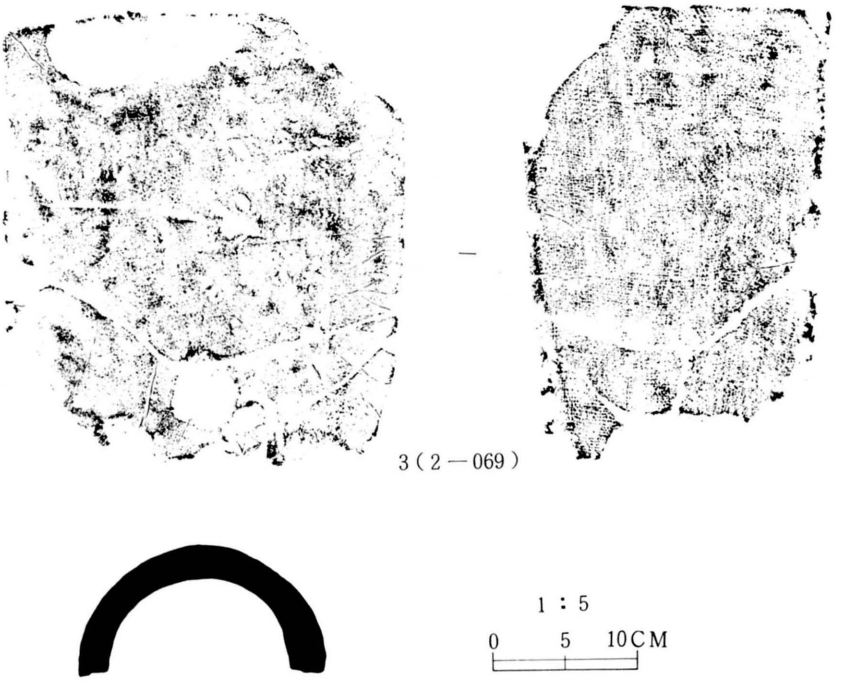
第5図　ＳＦ 552 築地崩壊土出土瓦

表Ⅲ　ＳＦ 552 築地崩壊土出土縄目平瓦

凸面		凹面		端部		端部	
縄目叩 r r＞L	83	布目 全面	1	凸面	側端盛り上り 57	広・狭端部	
縄目叩 ℓ ℓ＞R	0	布目 布端	26		側端まで叩き 26	①	0
縄目→スリ消	0	粘土合せ目	0	側縁面取り	① 0	②	0
スリ消	0	模骨状痕跡	10		② 10	③	81
		部分的スリ消	0		③ 4	④	2
		糸切り	48		④ 69		
		糸切りの方向			⑤ 0		
焼成							
軟質（黒・灰白色）	58						
硬質	25						

表Ⅳ　第１トレンチ東側出土縄目平瓦

凸面		凹面		端部		端部	
縄目叩 r r＞L	31	布目 全面	1	凸面	側端盛り上り 22		
縄目叩 ℓ ℓ＞R	0	布目 布端	15		側端まで叩き 9	①	0
縄目→スリ消	0	粘土合せ目	0	側縁面取り	① 0	②	0
スリ消	0	模骨痕	3		② 7	③	30
		部分的スリ消	0		③ 0	④	1
		糸切り	11		④ 24		
		糸切りの方向			⑤ 0		
焼成							
軟質（黒・灰白色）	19						
硬質	12						



第6図　ＳＦ552築地崩壊土出土瓦

が③に集中する。焼成は，黒色，灰白色を呈する軟質のものが58点，硬質のものが25点である。

丸瓦（第6図，図版24）

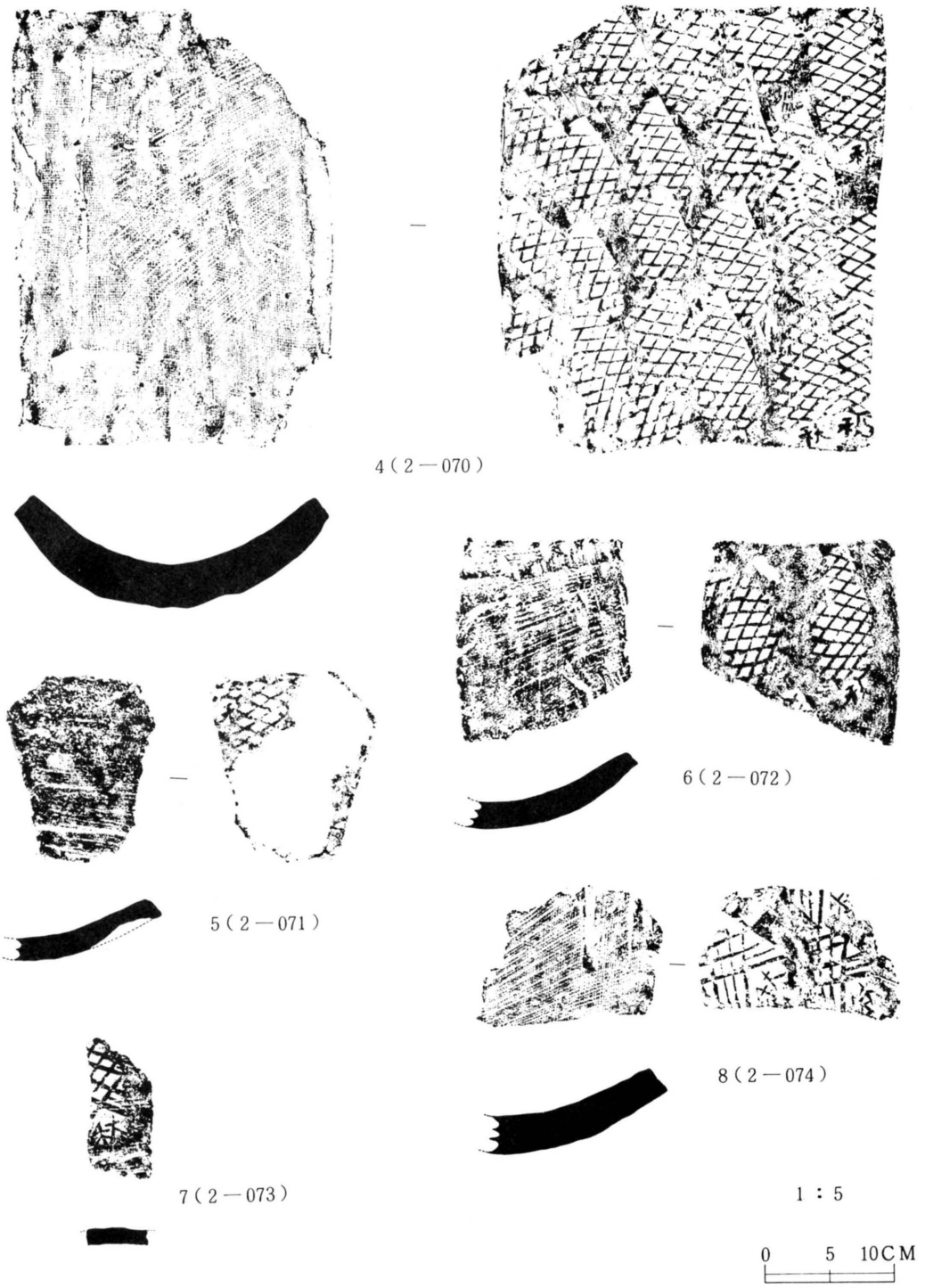
小破片が多数出土した。色調は黒色，赤褐色，灰白色が多く焼成はきわめて軟質である。凸面は縄目叩きの後にナデによって整形され，縄目の消されているものがほとんどである。側縁には分割線を有している。また中には明瞭に紐巻き痕跡のみられるものもある。

格子目瓦（第7，8図，図版25，26）

総破片数90点が出土した。内訳は，平瓦83点，丸瓦3点，不明4点である。いずれも焼成は軟質で赤褐色を呈している。砂を振りかける技法はみられない。平瓦についてみると，これまではみられなかった格子目の細かいものが出土している。また,「秋」の刻印が認められる瓦が5点出土しているがこれまで確認されている「秋」の字体とは異なる「秋」が新たに出土しており叩き板の　型が異なるものである。格子目瓦の丸瓦はこれまでの調査では検出されていないが今回新たに出土した。きわめてうすく厚さは約1.2㎝である。側面の面取り技法などは欠損しており不明である。凸面は格子目の細かい叩きが施されている。凹面には布目がみられ，紐巻き痕跡が認められる。

ＳＢ553Ａ・Ｂ建物跡（第3，4図，図版2，3）

ＳＦ552築地を切って構築された東西1間（心心で4.3ｍ）×南北1間以上（心心で2.1ｍ＋○……）の掘立柱建物跡で北で東に約17度振れている。掘り方規模はほぼ円形を呈し，径約1.5ｍ，深さ約80㎝を計る。埋土は赤褐色・褐色粘土，白色・赤褐色砂などである。柱痕跡は平面である



第7図　S.F 552 築地崩壊土出土瓦

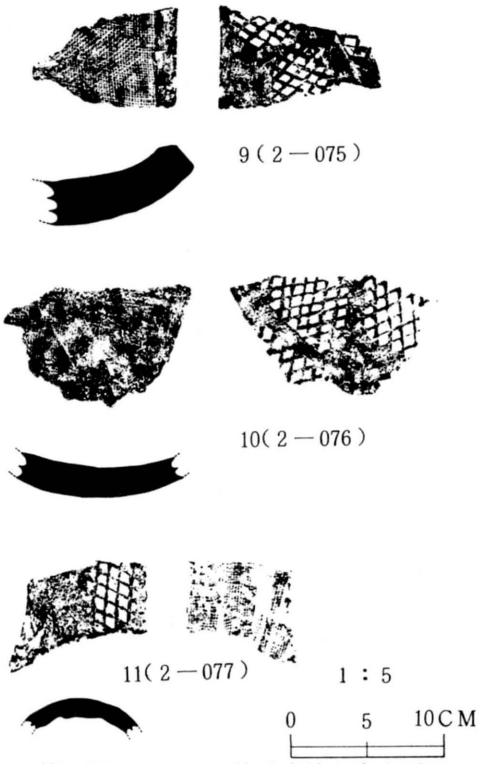
程度掘り下げても確認できず，断面を切っても検出できなかった。埋土には瓦片が混入している。本建物跡は国営調査トレンチ，ＳＤ555溝によって一部切られている。

Ｂ建物跡

Ａ建物跡の南西部掘り方の下部から新たに掘り方１個を検出し，Ｂ建物跡とする。掘り方はほぼ円形を呈し，径約1.2ｍ，深さ約40㎝を計る。他の掘り方の検出に務めたが確認できなかった。

ＳＤ554溝跡（第３，４図，図版２）

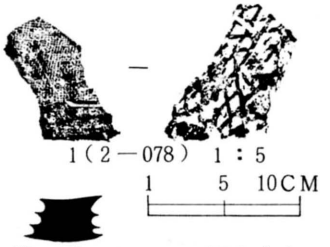
ＳＦ552築地，崩壊土を切って北北東に走る溝である。長さ約7.2ｍ，幅約2.2ｍ，深さ約90㎝を計る。南側はＳＤ555溝に切られているため幅，深さとも狭く浅い。埋土は上層が小粒の黄色粘土ブロックを含む赤褐色粘土，その下層に砂と赤・黒・黄色の粘土ブロックを含む層があり，最下層は少量の粘土ブロックを含む白色砂である。南側は黄褐色砂が主体である。溝内を精査したが特に柱列などは確認できなかった。



第８図　ＳＦ552築地崩壊土出土瓦

ＳＤ554出土遺物（第９図，図版26）

埋土から「秋」の刻印が認められる格子目瓦の小破片が出土した。焼成は軟質である。



第９図　ＳＤ554埋土出土

ＳＤ555溝跡（第３，４図，図版２）

ＳＤ555溝は長さ約9.2ｍ，幅約３ｍ，深さ約30㎝～50㎝の北東方向に走る溝である。埋土は褐色，赤褐色の砂である。ＳＦ552，ＳＢ553Ａ，ＳＤ554を切っており，最も新しい溝である。

ＳＤ556溝跡（第３，４図，図版３，４）

トレンチ西側の地山砂層面で検出した長さ7.2ｍ以上，最大幅約1.2ｍの西に延びる溝である。深さは約90㎝程で，埋土は，暗褐色，黄褐色の崩壊粘土であり，大きめの瓦片が多く混入している。

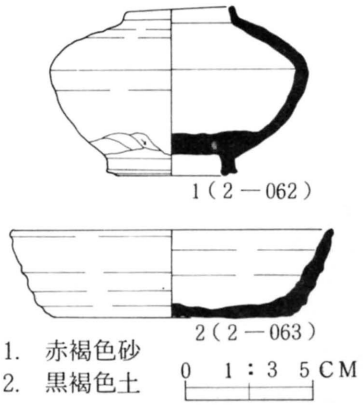
ＳＡ557柱列

表土下20㎝の黄白色砂層面で検出した。長さ約4.2ｍ，幅約1.2ｍ，深さ約80㎝の布掘りを行い，底部に長さ約0.7ｍ～1.1ｍ，幅約30㎝の掘り方を掘り込んでいる。柱痕跡は，1個の掘り方に径約20㎝～25㎝を計るものを２本たてるという組み合せで検出されている。深さは約20㎝と浅く本来は埋土上面で確認できると思われるが，埋土内の精査では検出できなかった。柱間は一

定でない。埋土から赤褐色土器坏の破片数点が出土している。

第1トレンチ出土遺物

須恵器：1，2ともトレンチ東側から出土した。1は赤褐色砂出土の回転ヘラ切りの小型壺である。体部下端には手持ちのケズリ調整が施されている。頸部から胴部の一部に自然釉がみられる。2は黒褐色土出土の回転ヘラ切り無調整の坏である。口縁部には重ね焼き痕跡が認められる。焼成は良好である。



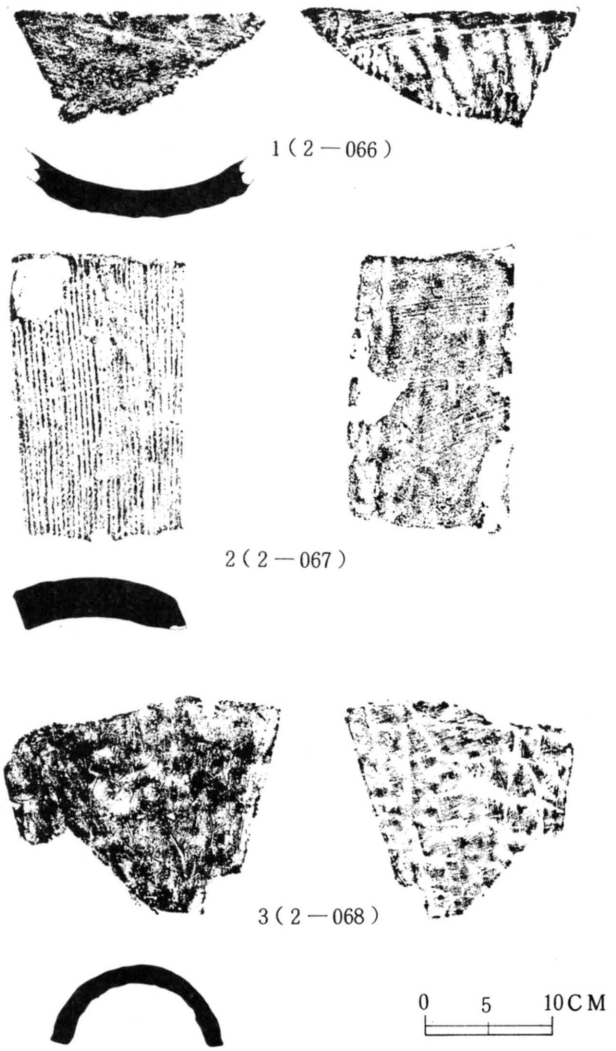
第10図　第1トレンチ東側出土遺物

瓦（第11図，表Ⅳ，図版26）

トレンチ東側の黄褐色砂層から平瓦，丸瓦，のし瓦などが出土した。

平瓦：多数出土した破片から広・狭端部，側面の残存するもの31点について観察した。凸面の縄目叩きの縄文原体はすべてL{r/r}である。また凸面に糸切り痕が残っているものが3点ほど認められる。凹面の布目は，布目端のみられるもの15点，全面に布目がみられるもの1点である。模骨状痕跡が認められるものが3点あるが上端から下端まで通らない。明瞭に糸切り痕のみられるものが11点あり，A→D，D→Aと糸の入るものが多く，瓦の長軸に対してほぼ直交する形で入るものも4点ほどみられる。側縁，端部の面取り技法は側縁が④，端部が③に集中する。

丸瓦：焼成の軟質な黒色，赤褐色，灰白色を呈する小破片が出土している。3は凹面に明瞭に紐巻き痕跡がみられる。分割後側縁部に面取りを施してから焼成してい



第11図　第1トレンチ東側出土瓦

る。焼成は軟質で色調は赤褐色を呈するが二次加熱等を受けたものではない。このような丸瓦は少なく，焼成，厚さがうすいことなどから格子目瓦に伴う丸瓦の可能性もある。

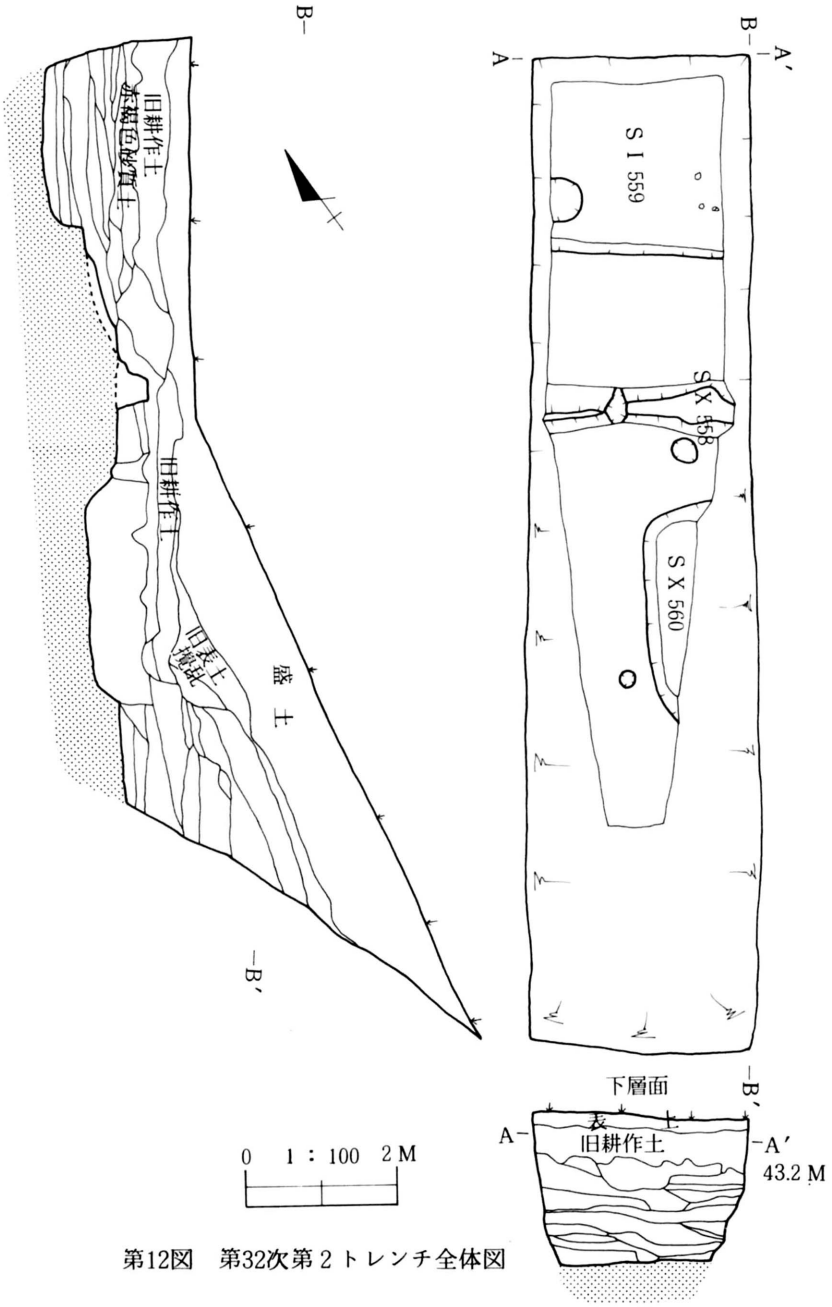
のし瓦：完形品１点，破片１点の計２点が出土した。焼成は軟質である。側縁は一面が弧に対してやや外に開くように面取りがなされ，一面は弧に対してほぼ直角，あるいはやや内面に切り込まれ，分割線がみられる。

第２トレンチ

ＳＸ558粘土積土遺構

（第12図，図版４，５）

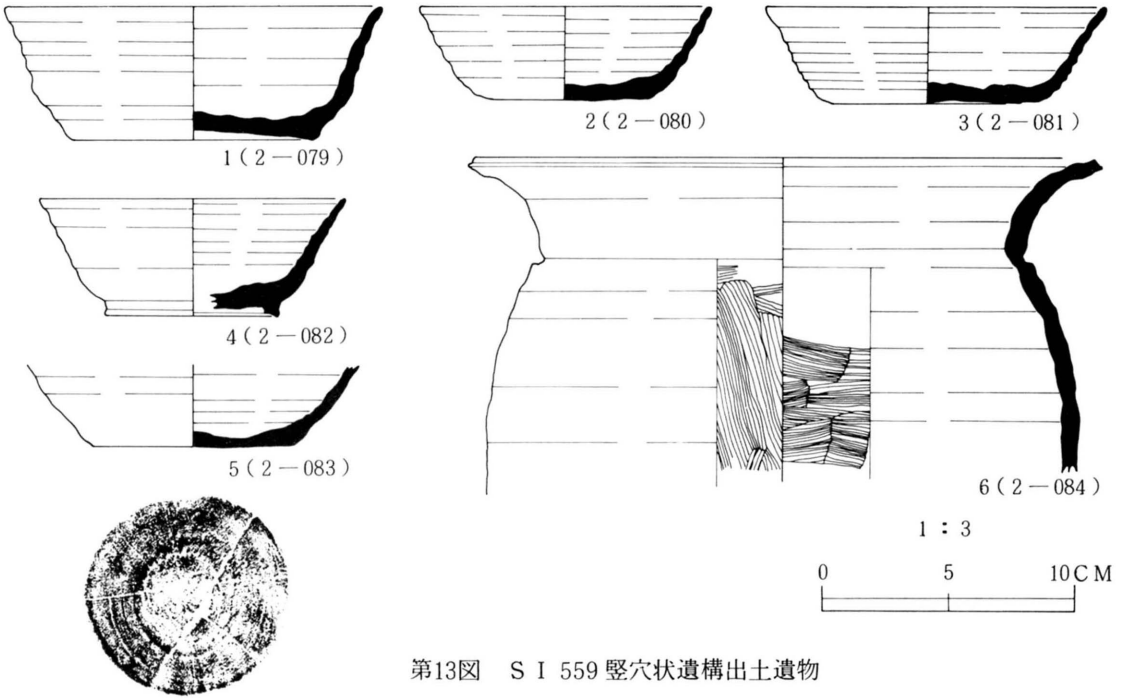
東南に延びる長さ約2.5ｍ，幅約0.5ｍの黄褐色をなす粘土状の高まりである。大部分は攪乱によって壊されており詳細は不明であるが，地山砂に直接積まれていることや，東に堆積している炭化物層がこの高まりで止まっているなどから推定すると築地の可能性も考えられる。ただ検出範囲では版築は認められなかった。ちなみに，第31次調査検出の築地を北西に延長するとこの部分にのびてくる可能性がある。



第12図　第32次第２トレンチ全体図

ＳＩ559竪穴状遺構（第12図，図版４）

南壁の一部を検出した。壁の遺存状態はきわめて良好で，ほぼ垂直に立ち上がり壁高は約0.3ｍを計る。埋土は，炭化物層，赤褐色砂，汚れた砂層が堆積している。床面は地山砂層である。埋土から須恵器坏，土師器甕，瓦片などが出土している。



第13図　ＳＩ 559 竪穴状遺構出土遺物

ＳＩ 559 出土遺物（第13図・図版27）

土師器：５は内黒坏である。体部下端から底部全体に回転ケズリ調整を行っている。底部にはヘラか釘と思われる工具による刻線がある。内黒ははぜている。６は甕の破片である。頸部から「く」の字状に外反し，口縁部は内反する。外面に縦方向のカキ目，内面には横方向にカキ目を施している。

須恵器：２，３は回転ヘラ切り無調整の坏である。２は周縁にナデがみられる。４は回転ヘラ切りの台付坏である。周縁部にはナデがみられる。

赤褐色土器：１は回転糸切り無調整の坏である。内面赤橙色，外面茶褐色を呈し，焼成はきわめて良好である。

ＳＫ 560 土壙（第12図・図版４）

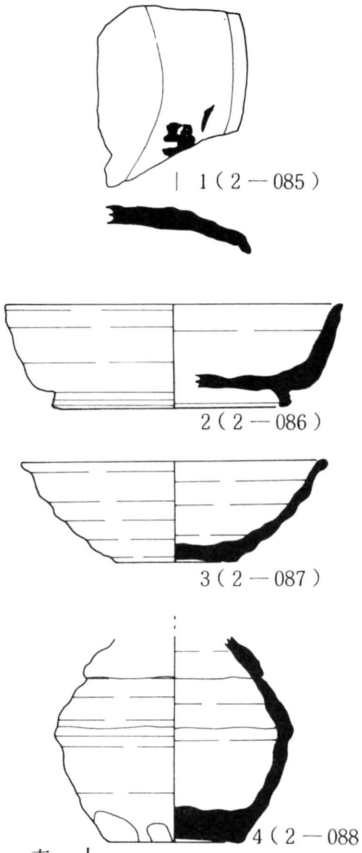
ＳＫ560 土壙は，東壁際で北西部を検出した。径約 3.1 m，深さは約 70cm を計る。埋土は暗褐色砂質土で炭化物が多量に混入している。

第２トレンチ出土遺物

土師器：４は赤褐色砂層から出土した小型壺である。回転糸切りで，体部下端に部分的に手持ちのケズリ調整がみられる。また巻き上げ（輪積）痕跡が明瞭に認められる。

須恵器：１は表土出土の蓋の破片である。肩部に墨書がみられるが判読不能である。２は炭化物層上の粘質土から出土した台付坏である。

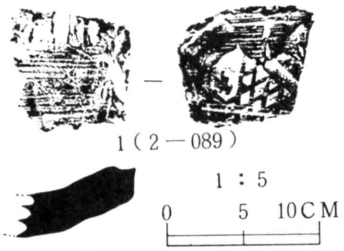
赤褐色土器：３は黄色砂層から出土した坏で，全体に磨滅が著しい。回転糸切り無調整である。



1. 表　土
2. 粘 質 土
3. 黄色砂層
4. 赤褐色砂層

0　1：3　5CM

第14図　第2トレンチ各層出土遺物



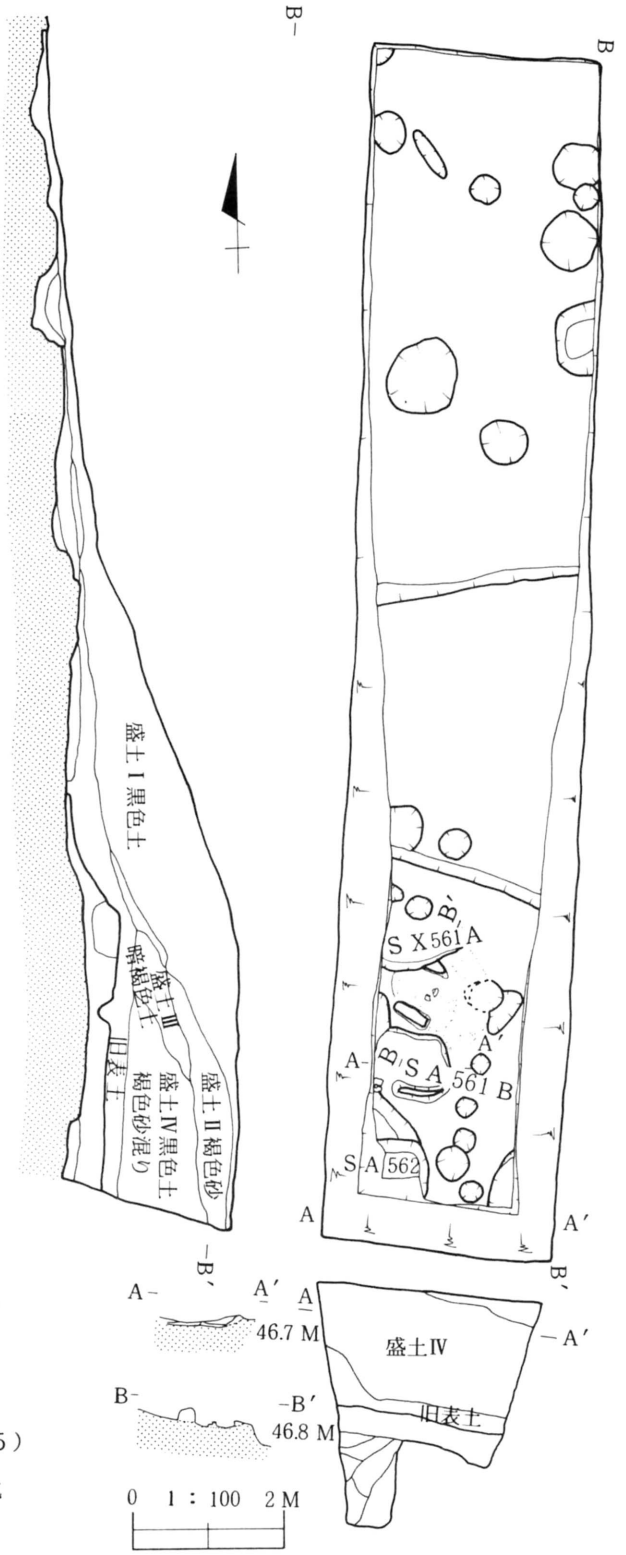
第15図　第2トレンチ出土格子目瓦
白橙色を呈する。

格子目瓦：トレンチ赤褐色砂から出土した。「秋」刻印が認められる。

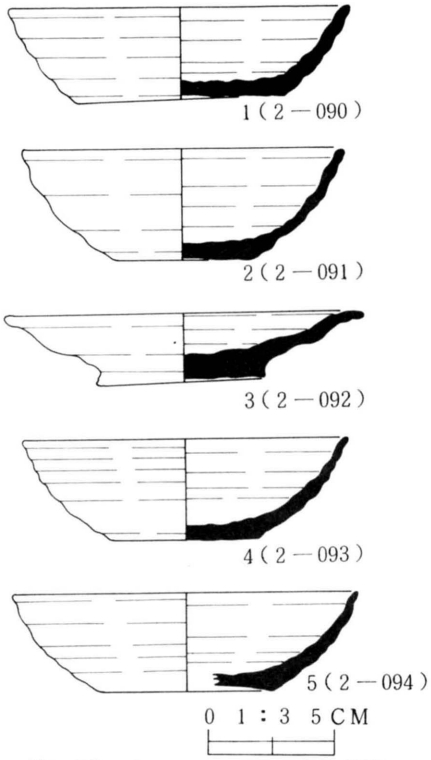
第3トレンチ

S X 561 A カマド状遺構（第16図，図版5）

旧表土下部赤褐色砂質土面で検出した北西向きに付設されたカマド状遺構である。粘土で構築された袖部はかなり攪乱をうけている。焚口部分には多くの炭化物，焼土が認められる。



第16図　第32次第3トレンチ全体図



第17図　ＳＸ561Ａ・Ｂ出土遺物

ＳＸ561Ａ出土遺物（第17図，図版７）

須恵器：１は回転糸切り無調整の坏である。灰褐色を呈する。

赤褐色土器：２は回転糸切り無調整の坏である。底部からゆるやかに内湾しながら口縁部に至る。全体に赤褐色を呈するが，部分的に黒色を帯びている。３は回転糸切り無調整の皿である。口縁部がわずかに外に開く。内面肌色，外面は赤橙色を呈する。

ＳＸ561Ｂカマド状遺構（第17図）

ＳＸ561Ａの下層面で検出した東向きのカマド状遺構である。袖部は粘土で構築されているが大部分壊されている。

ＳＸ561Ｂ出土遺物（第17図，図版７）

赤褐色土器：４，５は回転糸切り無調整の坏である。いずれも器形が酷似しており，底部からゆるやかに内湾しながら口縁部に至る。赤褐色を呈する。

ＳＡ562掘り方（第16図，図版５）

トレンチ南壁際で深さ約 70cm を計る掘り方を検出したが柱痕跡は確認できなかった。

第３トレンチ出土遺物（第18図，図版27，28）

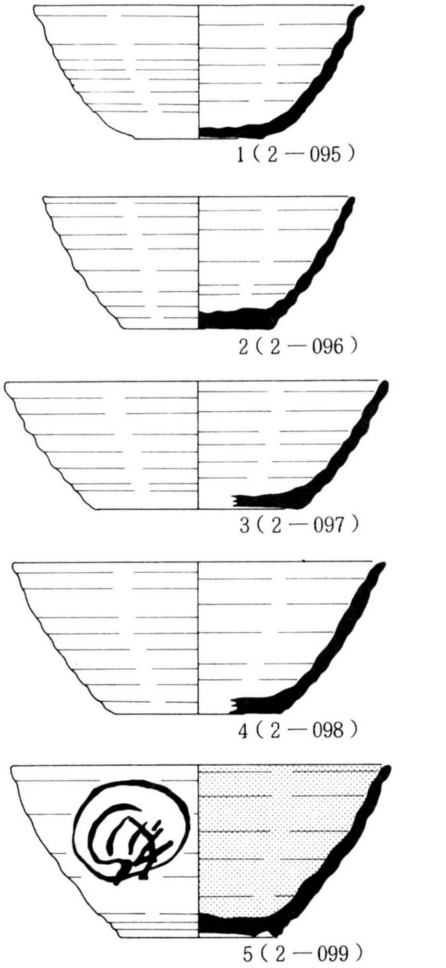
土師器：５は内黒の台付坏である。底部は回転糸切りでゆるく内湾しながら口縁部に至る。黒色処理は内面全体，外面口縁部に施しており，内面底部は放射状，内外面体部は横方向にミガキを施している。体部には墨書があり「利」の異体字の「㓝」と判読できる。

赤褐色土器：１，２，４は黒褐色土層出土の坏である。いずれも回転糸切り無調整である。１は一部に媒状の炭化物が付着しており，体部上半が黒色を帯びている。３は赤褐色砂層出土の回転糸切り無調整の坏である。胎土はもろく，うすい茶色を呈する。

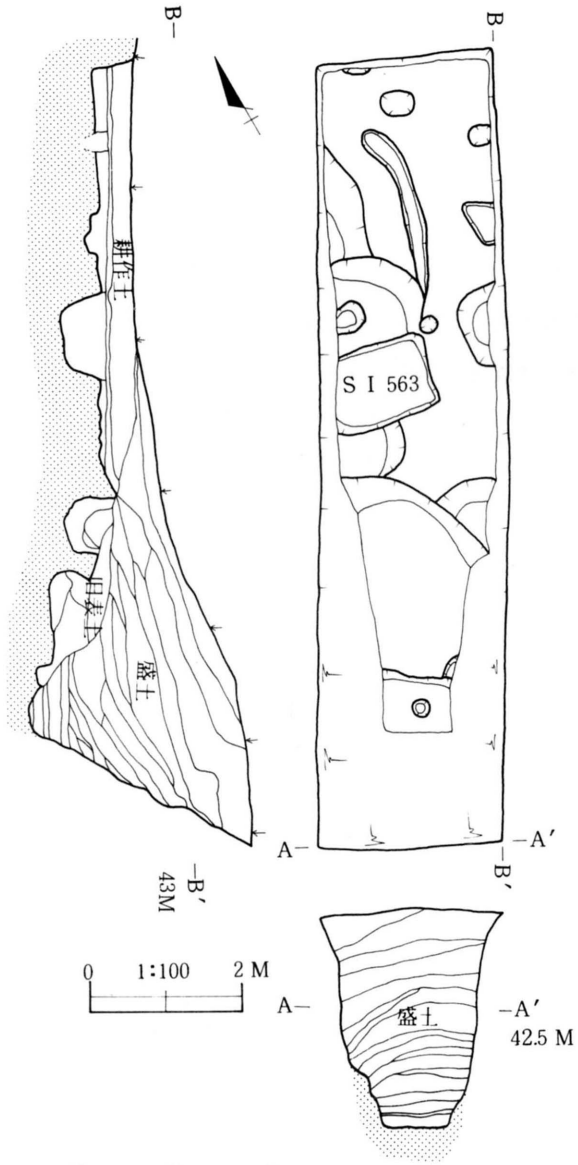
第４トレンチ

ＳＩ563竪穴状遺構（第19図，図版５）

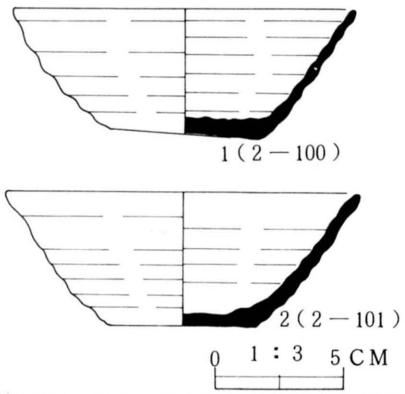
東西 1.3 m以上，南北約 1.1 mの長方形を呈する。埋土は暗



第18図　第３トレンチ，各層出土遺物



第19図　第32次，第４トレンチ全体図



第20図　ＳＩ 563 竪穴状遺構出土遺物

赤褐色土であり，赤褐色土器坏が出土している。

ＳＩ 563 出土遺物（第20図，図版28）

赤褐色土器：１，２とも回転糸切り無調整の坏で，底部からほぼ直線的にのびて口縁部に至る。１は内面赤橙色，外面肌色を呈し胎土中には小石粒を多く含む。２は赤橙色を呈し，外面は磨滅が著しい。

３）まとめ

北辺外郭屈折部の把握，第31次調査検出築地の追跡という目的で調査を実施した。

これまで，西外郭線は第19次調査地（焼山）北部で東方に曲がり，護国神社北部を東西に走ることが確認されている。しかし，その先は第27次調査地付近で北に折れ，北方の舌状部に延びるであろうという予測だけで明確でなかった。しかし今次第１トレンチの調査で狭い範囲ではあるが明確に築地遺構を検出し，さらに築地延長部の調査区外にも土手状の高まりが続いている。以上のことから神社北部の北辺外郭屈折部の位置が決定した。また築地崩壊後に溝状遺構，掘立柱建物が構築されており，これまでの外郭線調査検出遺構とほぼ同様な規模，共伴関係にある。

第２～４トレンチの調査では，築地遺構は検出されず，トレンチを設定した土手状の高まりはすべて後世の土盛であることが判明したため今後の課題として第31次調査検出の築地遺構を追跡する必要性が生じた。

今次調査の遺物については築地崩壊土から多量の瓦が出土したので，これについてまとめると下記のようになる。特に問題となるのは格子目瓦が瓦層中に多量に含まれていることであるが縄目瓦との比率では縄目50に対して格子目瓦１である。これまでの外郭線の調査では崩壊土からの格子目瓦の出土例はない。秋田城では格子目瓦については，上層から出土

することや，同笵型の格子目瓦が出土した昭和町「羽白目」遺跡では糸切り底の須恵器坏と共伴する（註１）ことなどから比較的新しい時期の所産と考えられている。しかし今次調査で崩壊土瓦層から出土したことにより，築地の存続年代，あるいは城内における特に内城に接する北外郭線の性格等が新たに問題となってきた。また格子目瓦の年代についてもさらに検討を加える必要が生じた。いずれにしろ現段階では明確に遺構中から土器と共伴して出土する例などはなく，今後資料の増加を待ちたい。

出土した格子目瓦の中に計５点刻印銘瓦が確認された。これまで秋田城では刻印型を「秋田瓦」，「高水」，「秋」の三種類と考えられている（註２）。 今回確認された刻印記銘は，「秋」だけであるが，「秋」の字体，格子目の大きさなどがこれまで出土の記銘瓦と明確に異なるものが２点認められる。以上のことから刻印型は四種類になる。すなわち「秋田瓦」，「高水」，それに「秋」が二種類である。

註１　奈良修介・富樫泰時・鍋倉勝男「羽白目遺跡調査報告」『秋田考古学』第25号，昭和45年

註２　小松正夫，「秋田城出土瓦について」，『東北考古学の諸問題』東北考古学会編，昭和51年

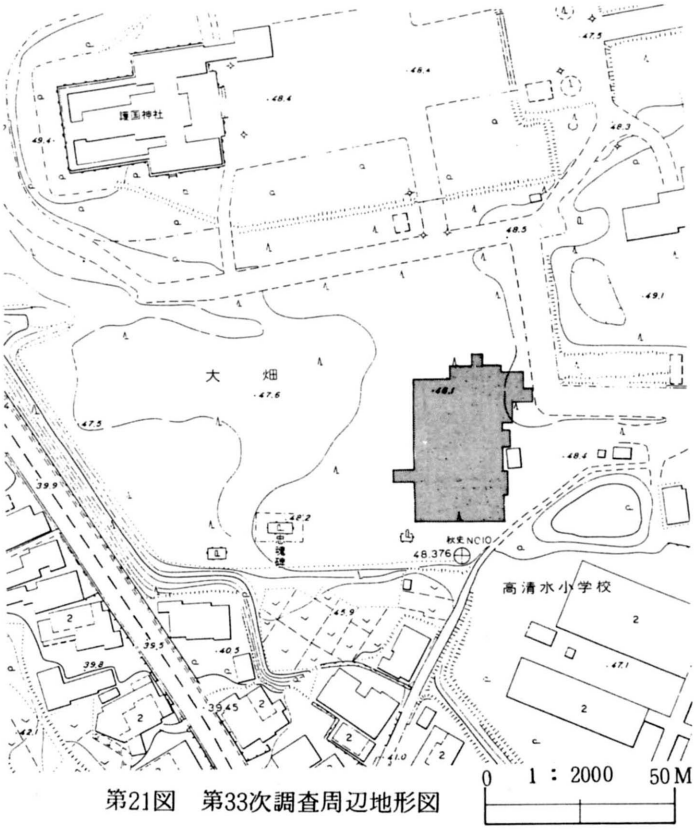
Ⅲ　第33次発掘調査

１）調　査　経　過

第33次発掘調査は，秋田市寺内字大畑を対象として５月22日から９月25日まで実施し，その調査面積は 1,162 ㎡である。

調査地は県護国神社境内地区に位置し，昭和34年～37年には国営（現文化庁）による発掘調査が実施され，柵列，建物跡等の遺構が検出された。その結果，発見遺構や地形的条件から秋田城の政庁域，内城と推定されている地域である。付近一帯の地質は，高位に位置しながら飛砂の堆積が認められ，その厚さは約１ｍに達する。

地区設定（グリッド）は，秋田城測量原点№10（Ｘ＝＋45.618・



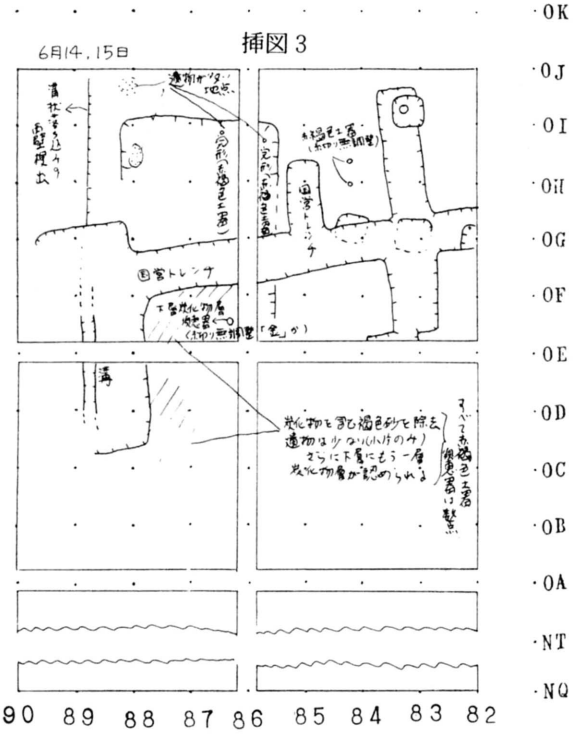
第21図　第33次調査周辺地形図

Y＝－22.912）を調査原点とした。

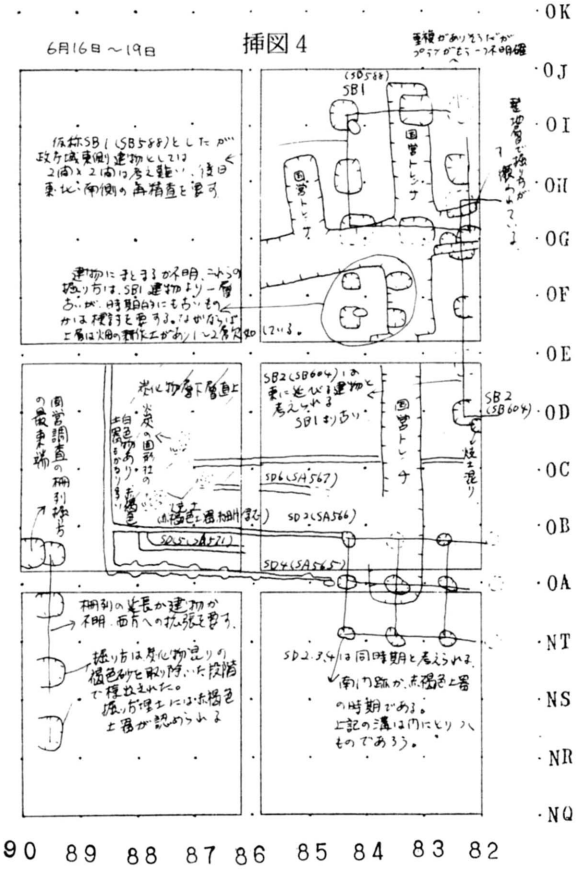
調査地内の表土剝ぎおよび国営調査トレンチ埋土除去作業は重機によって実施した。その結果，調査地南側では護国神社建築の際の整地およびそれ以前の畑耕作土が約１ｍ程堆積していることが判明した。またさらに下層は黒色砂，北側では厚さ20cm～30cmの表土下は黄褐色砂，東側では粘質の褐色砂でいずれも赤褐色土器を多量に含んでいることが判明した（６月８日）。調査地南半の約半分は黒色砂から赤褐色砂となり，遺構は認められず地山飛砂層に近似する砂質を呈している。北半分については，黄褐色砂を除去した時点で炭化物の落ち込みが認められ，追跡した結果ＯＤ～ＯＩ－85～88グリッドにわたる長方形のプランが確認できた（ＳＸ 582）。また竪穴状落ち込みの炭化物層は，数センチの薄い間層を挟んで二層に大別できる。なお炭化物層およびその直上の赤褐色土には多量の赤褐色土器が認められた。ＯＢ・Ｃ－88グリッドで確認した旧トレンチ内底面（炭化物層）では，南北に延びる幅30cm程の溝状遺構が検出され（ＳＡ 564），また東側では同トレンチ壁に数個の掘り方が確認され建物の存在が推測された（15日）。上述の掘り方を追跡した結果，２間×２間の建物跡（ＳＢ 588）が検出されたが，掘り方には重複が認められるところから北および東へ延びる可能性も考えられた。

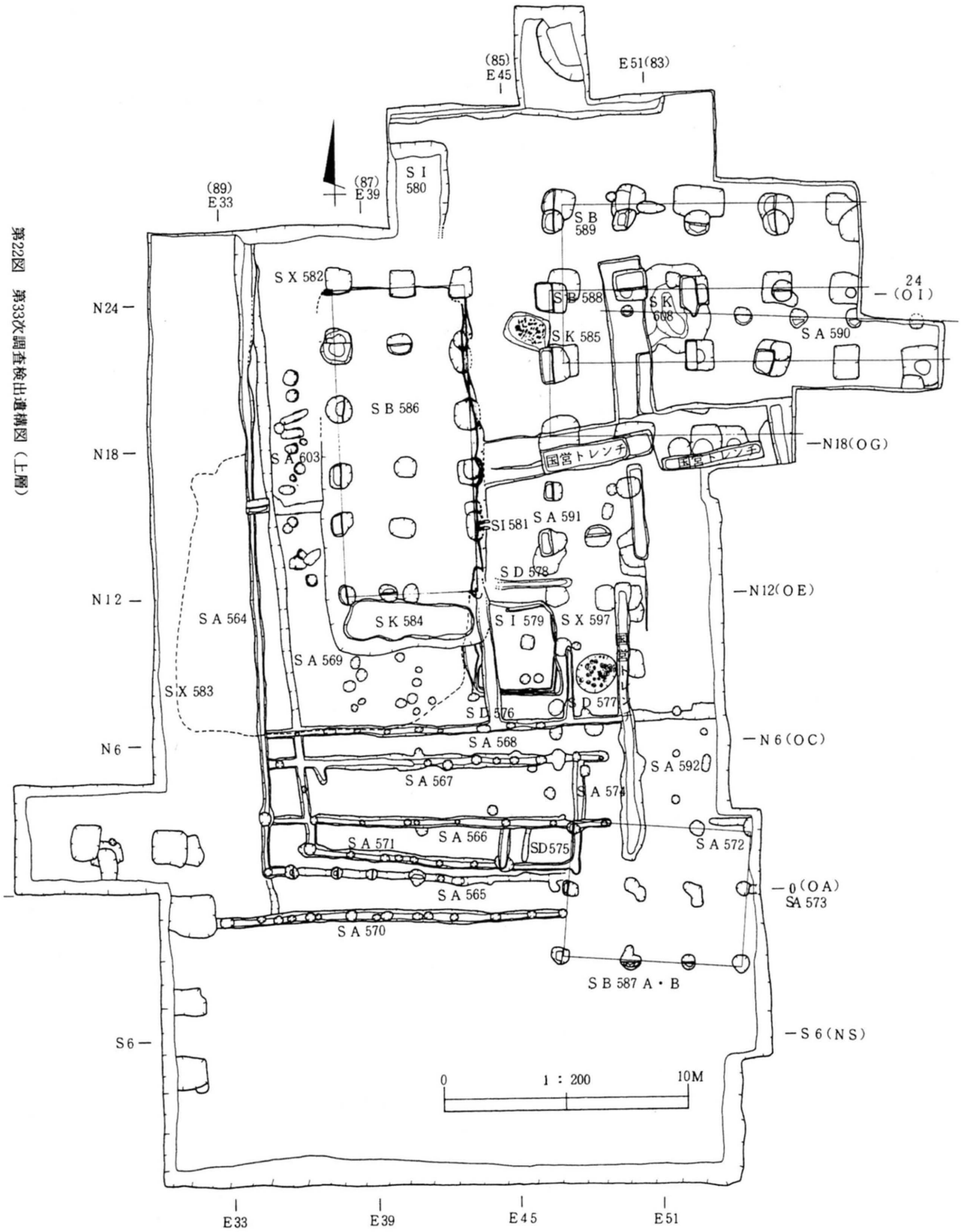
調査区中央部では東西に延びる３本の溝状遺構（南からＳＡ 565，566，567）が検出され，精査の結果，前述のＳＡ 564と同時期，しかも同じ一本柱列であることが確認された。また東西一本柱列のうちＳＡ 565は東南部で

挿図３

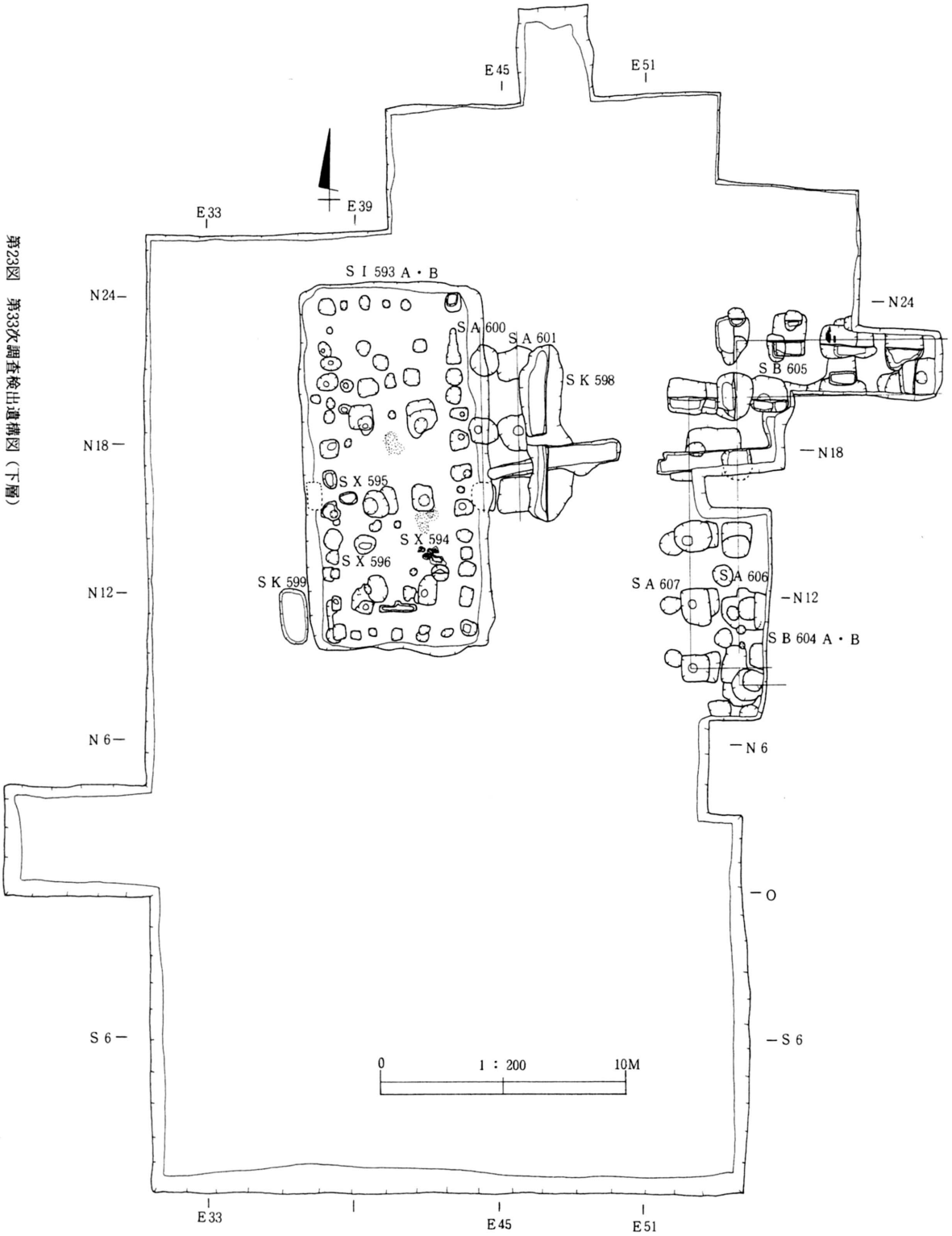


挿図４

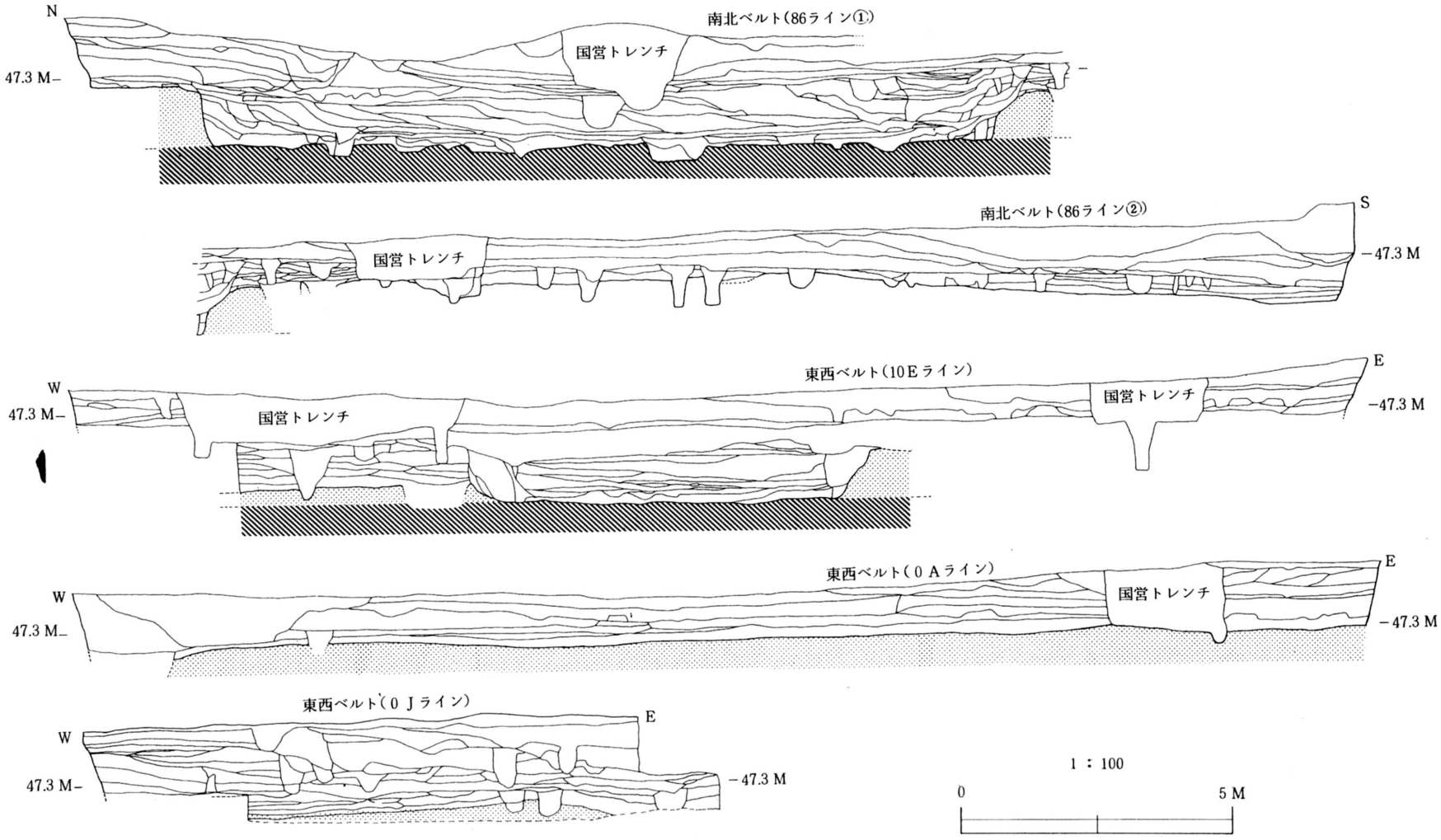




第22図　第33次調査検出遺構図（上層）



第23図　第33次調査検出遺構図（下層）



第24図　第33次調査土層断面図

検出された2間×3間の総柱建物（ＳＢ587）の棟持ち柱に取り付くことが判明したことから，建物と一本柱列は同時期と考えられる（19日）。前述のＳＸ582の西にもほぼ同規模の炭化物層が認められるが全容は不明である（ＳＸ583）。北東部に検出されていた建物は重複が確認され，北，東に各々拡張したところ南北2間×東西3間以上の東西棟であることが確認された(南側ＳＢ588・北側ＳＢ589）。全容を把握するにはさらに東方への拡張を要した（16日）。

ＳＸ582の床面である炭化物層を除去した段階で黄色砂が認められ，さらにそれを掘り込んだ2間×4間の南北棟建物が検出された(SB586)(28日)。またSX582の南側で認められた落ち込みはSX582の古い時期の床面と考えられたが，調査の結果は東西に長軸を有するSK584土壙であった(30日)。

ＳＢ586掘り方の基盤面である黄色砂を掘り下げ，さらに周囲の赤褐色砂を掘り下げた。その結果南北に長い竪穴住居跡ＳＩ593Ａ・Ｂのプランが確認された。床面精査の段階で円形の焼土遺構が検出され，その周囲から多量の鉄滓と0.5㎜程の薄い鉄片(粉)が出土したことから，この炉跡は製鉄（鍛冶）遺構と考えられた（8月8日)。

ＳＢ588，589は東方へ拡張した結果，さらに掘り方が検出され両者とも2間×5間あるいはそれ以上の東西棟建物であることが判明した（10日）。ＳＢ588，589建物は赤褐色砂質土の整地層上に築造されているが，この整地層を除去した段階でＳＢ604，606の掘り方が新たに検出された。しかし両者とも南北の柱間が必ずしも明確ではなく規模については断定できない（21日)。

ＳＢ605の西約4ｍ付近で南北に長い土壙（ＳＸ598）と，それに切られている掘り方3個（ＳＡ601），さらにＳＡ601を切る掘り方3個（ＳＡ600）が検出された。南北に配列された3個の掘り方は，西へ延びる建物の可能性が皆無ではないが，とりあえず柱列として把握しておく(9月10日)。

調査地の西壁南半で検出された掘り方は，国営調査において確認されすでに調査済みのものであるが，数回の重複が認められることと，遺構が西に延びているため今次では存在の確認のみにとどめた。

9月19日には現地説明会を開催し，約200名の参加者を数えた。

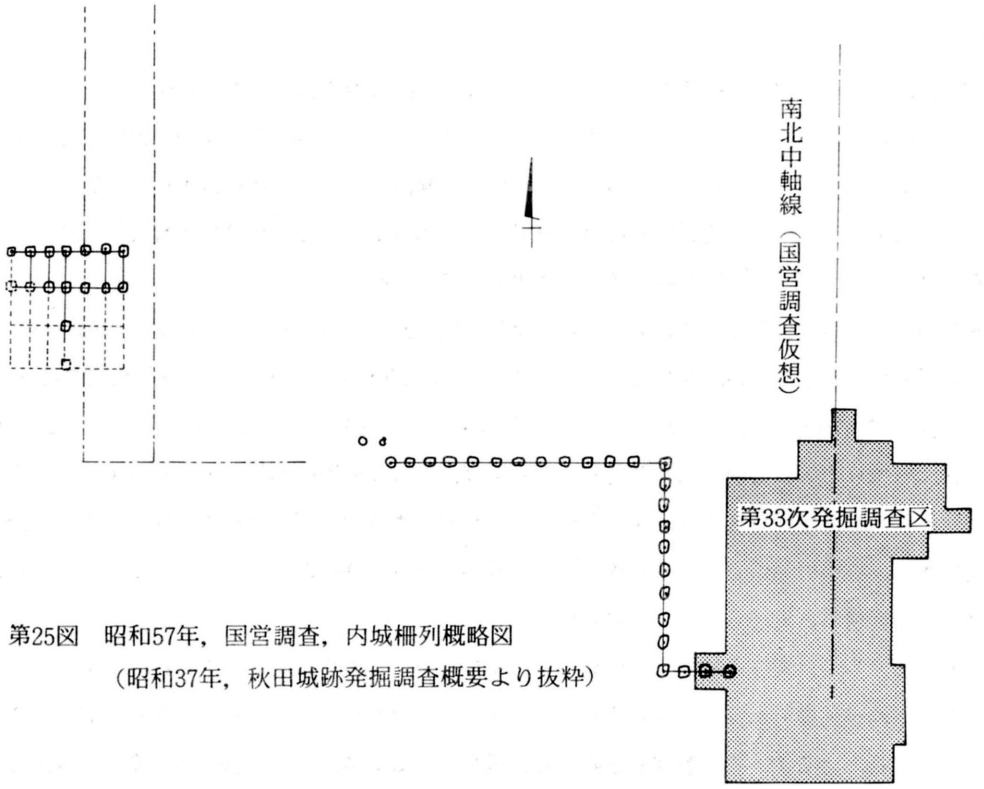
9月25日埋め戻しを終え，調査を完了した。

2）検出遺構と出土遺物

検出遺構は建物跡，住居跡，柱列，溝跡，土壙跡である。

調査地の基本的な層序は褐色砂，赤褐色砂，炭化物層（焼土・粘土ブロックを含む）が主体をなす。しかし調査地全域におよぶプライマリーな層はなく，すべて部分的でしかも薄い互層をなす場合が多い。したがって遺構掘り込み面確認作業あるいは遺物取り上げの層観察はきわめて困難であった。

そこでここでは，建物跡が集中する東側における粘質土による整地層を基準として遺構を上層遺構群，下層遺構群として記述することとした。なお整地層と連結する層，あるいは同じレベルと考えられる層には，ＳＸ582竪穴状遺構が営まれている赤褐色砂および炭化物層がある。



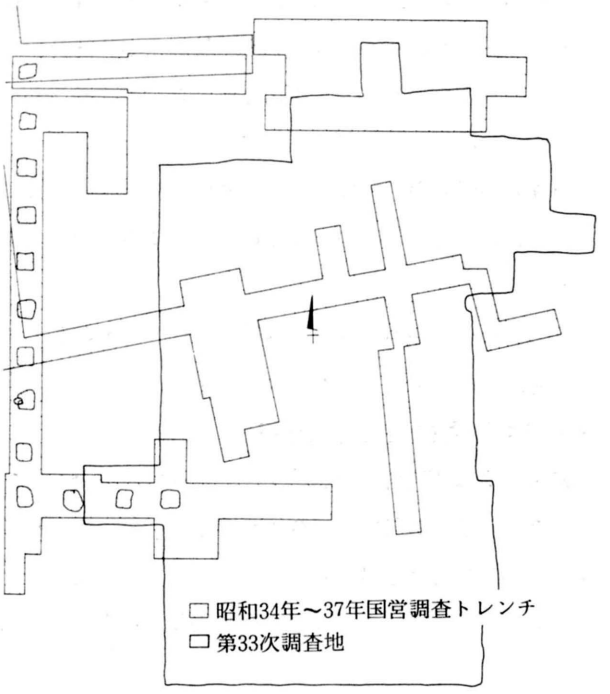
第25図　昭和57年，国営調査，内城柵列概略図
（昭和37年，秋田城跡発掘調査概要より抜粋）

第25・26図は，昭和34年～37年に実施された国営調査検出の柵列跡・トレンチ図である。

上層遺構群（第22図・図版７）

ＳＢ586建物跡（第27図）

２間（北梁行2.5 m＋2.5 m）×５間（西桁行北から2.5m＋2.6 m＋2.7 m＋2m＋3m）の南北棟である。柱間は比較的不ぞろいで，掘り方も円形に近い不整形である。掘り方は，ＳＸ582竪穴状遺構の炭化物層を除去した段階の黄（褐）色砂（西側は赤褐色砂）で確認された。



第26図　昭和34年～37年国営調査トレンチ

SB586出土遺物(第31図・図版28)

赤褐色土器：１は回転糸切りの坏である。口縁部外面に油煙によると思われる煤状付着物が認められる。

須恵器硯：２は風字硯である。

ＳＢ587Ａ・Ｂ建物跡

（第28図・図版７）

２間（西梁行北から2.5 m＋2.8 m）×３間（南桁行西から2.8 m＋2.4 m＋2.2 m）の東西棟建物である。方位は梁行が北で東に約６度振れる。赤褐色砂面で確認された掘り方は，径約60㎝前後，深さ30㎝～50㎝の不整円形である。埋土はよごれた赤褐色砂で柱痕跡は検出できなかった。また数個の掘り方には重複が認められるが，いずれも小形で柱痕跡も不明である。

ＳＢ587出土遺物

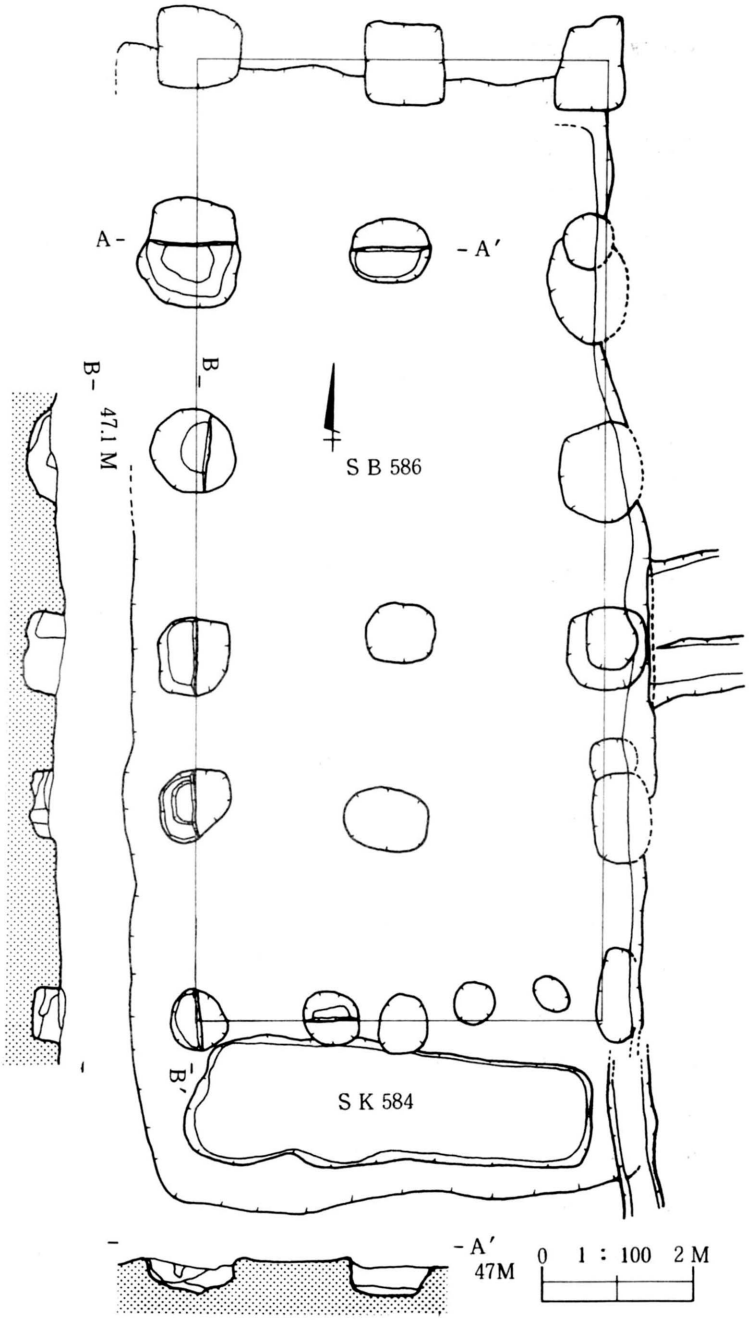
（第31図・図版28）

須恵器：３は回転ヘラ切りの坏である。

ＳＢ588建物跡

（第29図・図版８）

２間（西梁行北から2.8 m＋2.9 m）×５間（北桁行西から3.3 m＋2.5 m＋3.6 m＋2.7 m＋○）かそれ以上の東西棟建物である。掘り方は薄い炭化物層下の砂質粘土面で検出された。埋土はやや粘質のある赤褐色砂である。柱痕跡は，平面で確認することは困難であるが断面では明瞭に認められるものもある。西梁行棟持柱掘り方は，多量の炭化物が混入するＳＡ590掘り方によって切られている。また多少不自然ではあるが，北桁行の北に検出されたＳＢ589を切る柱列は，本建物の廂あるいは建物付設の柱列とも考えられる。



第27図　ＳＢ586建物跡　ＳＫ584土壙跡

ＳＢ588出土遺物

（第31図・図版28）

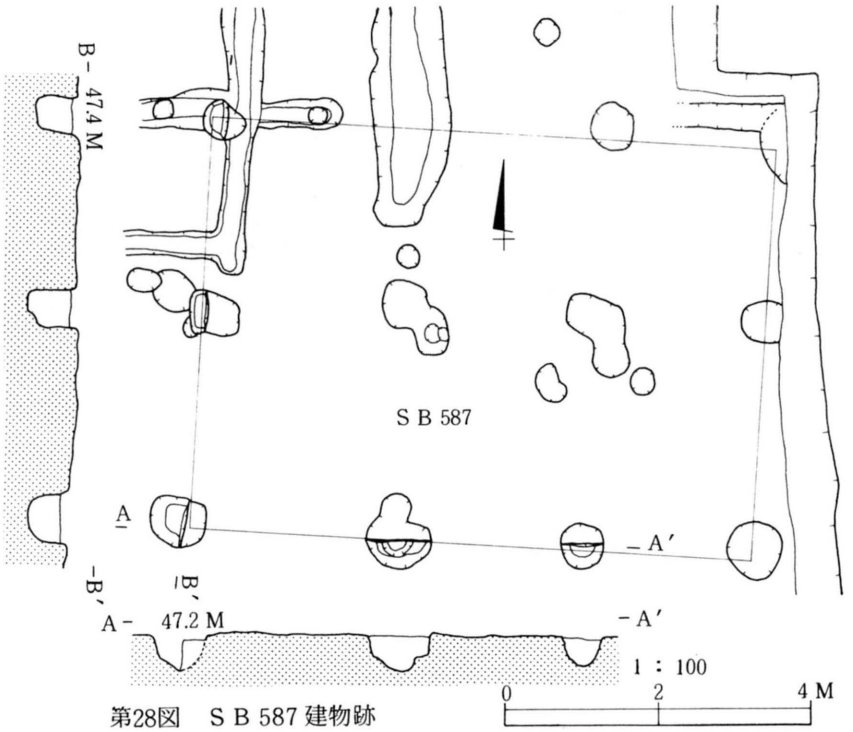
須恵器：６は蓋で，内面中央部は磨滅が著しく，また墨痕が認められることから硯に転用されたものと考えられる。

赤褐色土器：４・５は回転糸切りの坏である。

ＳＢ579住居跡

（第29図・図版８）

ＳＢ588建物より古く，１間分北に寄っている。規模・方位はＳＢ588と同じと考えられる。掘り方も浅く埋土は粘質性がほとんどなくサラサラの褐色砂である。



第28図　ＳＢ587建物跡

住　居　跡

ＳＩ579住居跡（第32図・図版15）

一辺が約3.7 m程の方形である。西側はＳＩ593に切られており，残存部にはカマドは認められない。北・東・南の周溝は顕著であるが西は不明。住居跡に伴う柱掘り方は認められない。

ＳＩ579出土遺物（第34図・図版28）

須恵器：１～３は埋土出土坏である。１・２は回転ヘラ切り，３は回転糸切り，体部外面に粘土紐巻き上げ痕が認められる。２は内外面ともスベスベしているがミガキ等の痕跡は見あたらない。

ＳＩ580住居跡（第33図）

西側は調査区外，南側は掘り過ぎのため規模は把握できなかった。北側は地山砂であるが確認面から床面までの深さは約60cmである。カマド・柱等は検出されない。

ＳＩ580出土遺物（第34図・図版28）

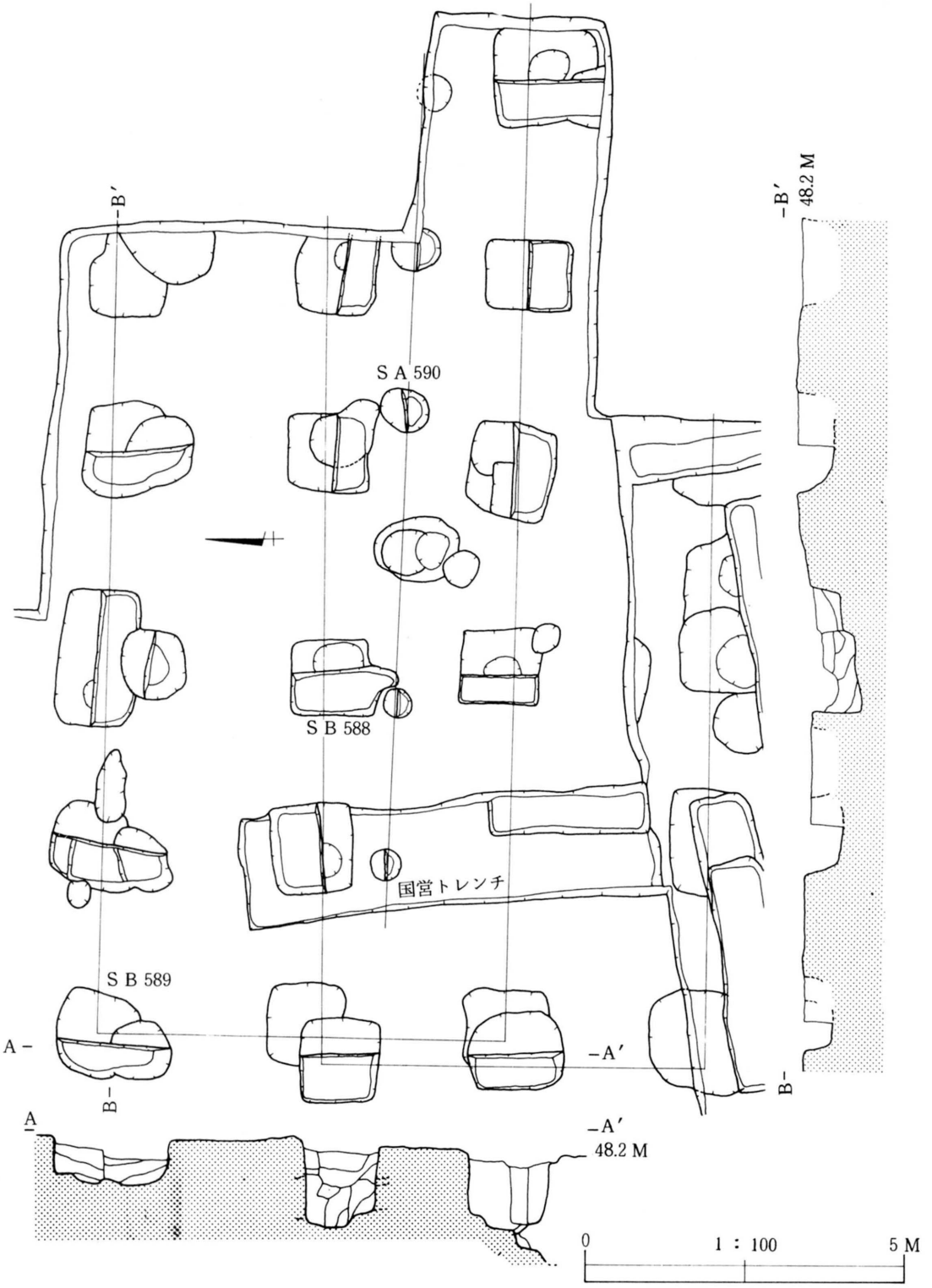
土師器：４は内面黒色処理を施した台付坏である。内面ミガキは中心に向って施されている。

ＳＩ581住居跡（第22図・図版14）

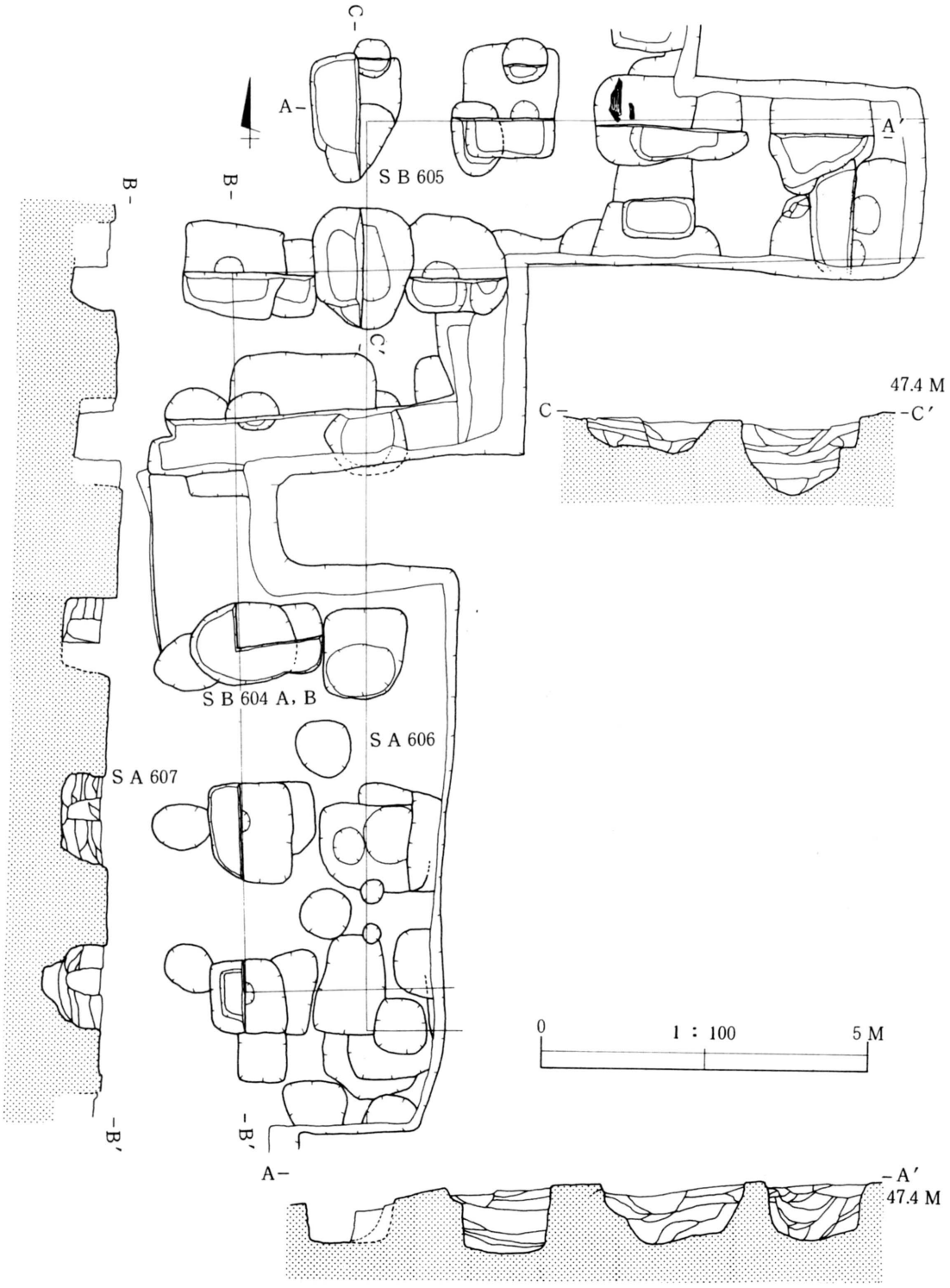
東向きのカマド煙道部のみの検出である。ＳＩ593より新しいが，壁等は検出できなかった。

ＳＩ593Ａ・Ｂ住居跡（鍛冶工房跡）（第35，36，40図・図版11，14）

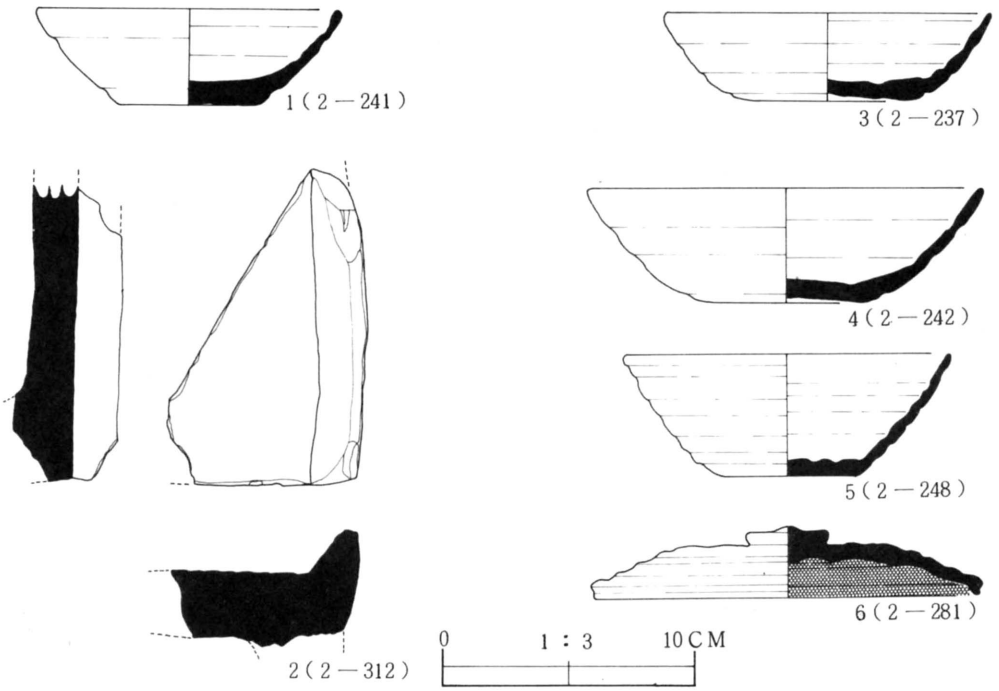
Ｂは東西約7.5 m，南北約15mの長方形の竪穴状を呈する。掘り込み面は赤褐色砂，深さは70cm



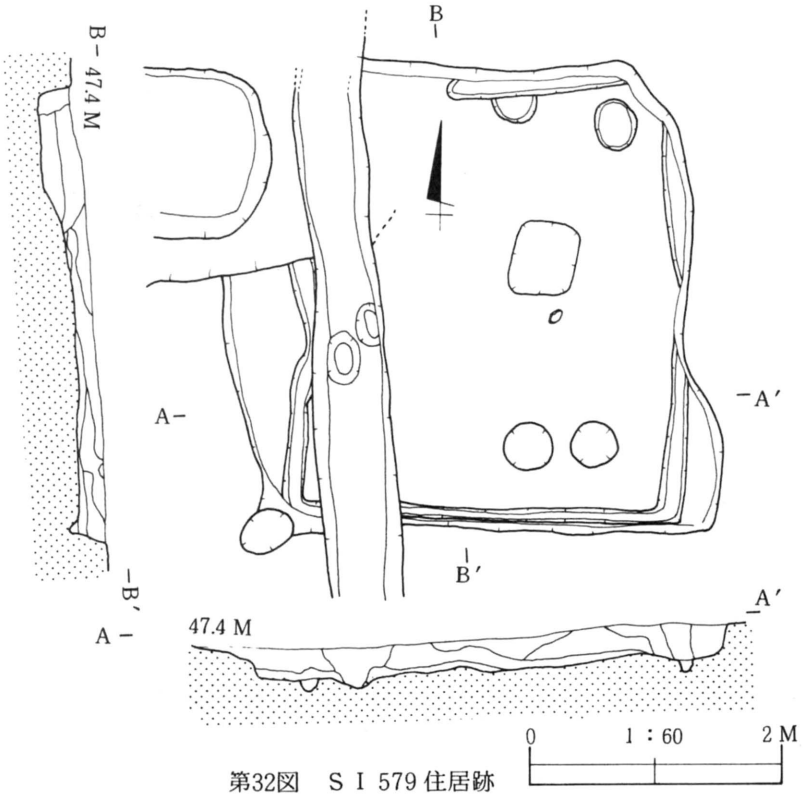
第29図　S B 588，589 建物跡，S A 590 柱列



第30図　S B 604 A・B，S B 605 建物跡　S A 606，607 柱列



第31図　ＳＢ 586，587，588 建物跡出土
1～2，ＳＢ 586，3，ＳＢ 587，4～6，ＳＢ 588



第32図　ＳＩ 579 住居跡

で床面は地山である黒色粘土層（寺内層＝粘土・シルト層）に達する。

床面は炭化物と砂混りの粘土が薄い不整な互層をなし，一時期の面を明確にすることは困難である。また床面の数カ所には焼土が確認され，特に東南コーナー近くには炉跡（ＳＸ 594）が検出された。ＳＸ 594は地山粘土面に黒色砂（黄色砂が地山黒色粘土面と接して変色したとも考えられる），黄色砂を各々４㎝～８㎝敷き，さらに黄

色粘土を3㎝～5㎝張って炉床としている。また炉粘土周囲の相対する4カ所にフイゴ羽口をセットしたと考えられる凹が認められる。炉床は青灰色に，その周囲は赤褐色に焼けている。鉄滓と厚さ0.5mm程の鉄片（粉）は炉の西約40㎝の位置から出土している。この鉄片出土により本炉跡は鍛冶の工房跡と考えられる。

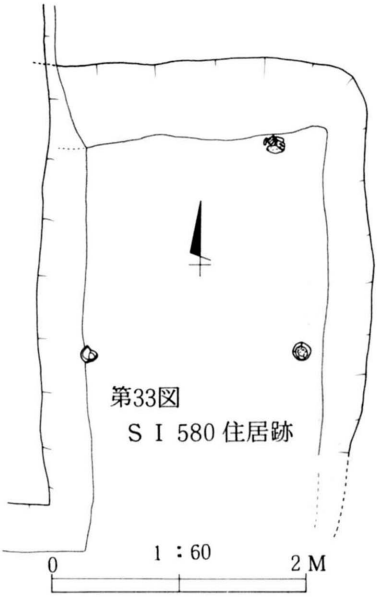
床面で検出されたＳＸ595は，小規模な楕円形を呈し，壁が部分的に火熱を受け赤褐色に変色している。また隣接するＳＸ596は浅い鍋底状を呈し，底面には厚さ2㎝程の炭化物（木灰のような）が堆積している。いずれも性格不明。

Ａは東西約5.5ｍ，南北約13mでＢより一回り小形化している。Ａの床面はＢの床面とほぼ同じレベルにあり，Ｂの床面で検出された遺構の中にはＡに伴う可能性のあることも否定できない。

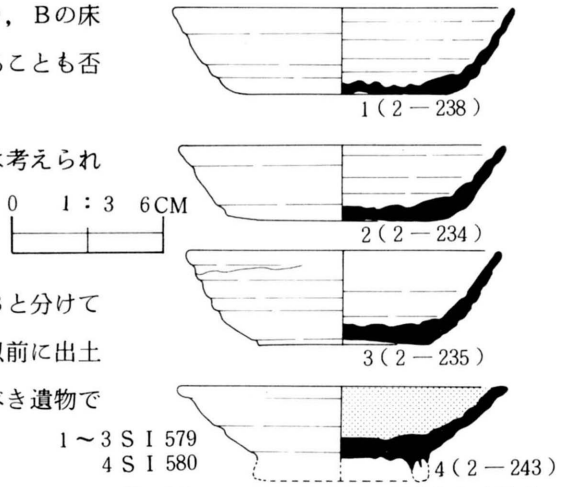
出土遺物による比較ではＡ・Ｂの大きな時期差は考えられない。

ＳＩ593Ａ・Ｂ出土遺物

図面上では出土遺物をＳＩ593・593Ａ・593Ｂと分けてあるが，593出土遺物はＡ・Ｂの重複を確認する以前に出土したもので，本来はＡ・Ｂどちらかの埋土に入るべき遺物である。



第33図
ＳＩ580住居跡



第34図　ＳＩ579，580住居跡出土遺物

（ＳＩ593出土遺物）（第37図・図版29）

土師器：1は内面黒色処理を施したロクロ成形台付坏である。内外面に手持ちミガキを施している。

須恵器：2は回転糸切りの台付双耳坏である。3～5は回転ヘラ切り，6・7は回転糸切りである。4～7は転用硯で内面はスベスベし，墨痕が認められる。8は転用硯の蓋である。

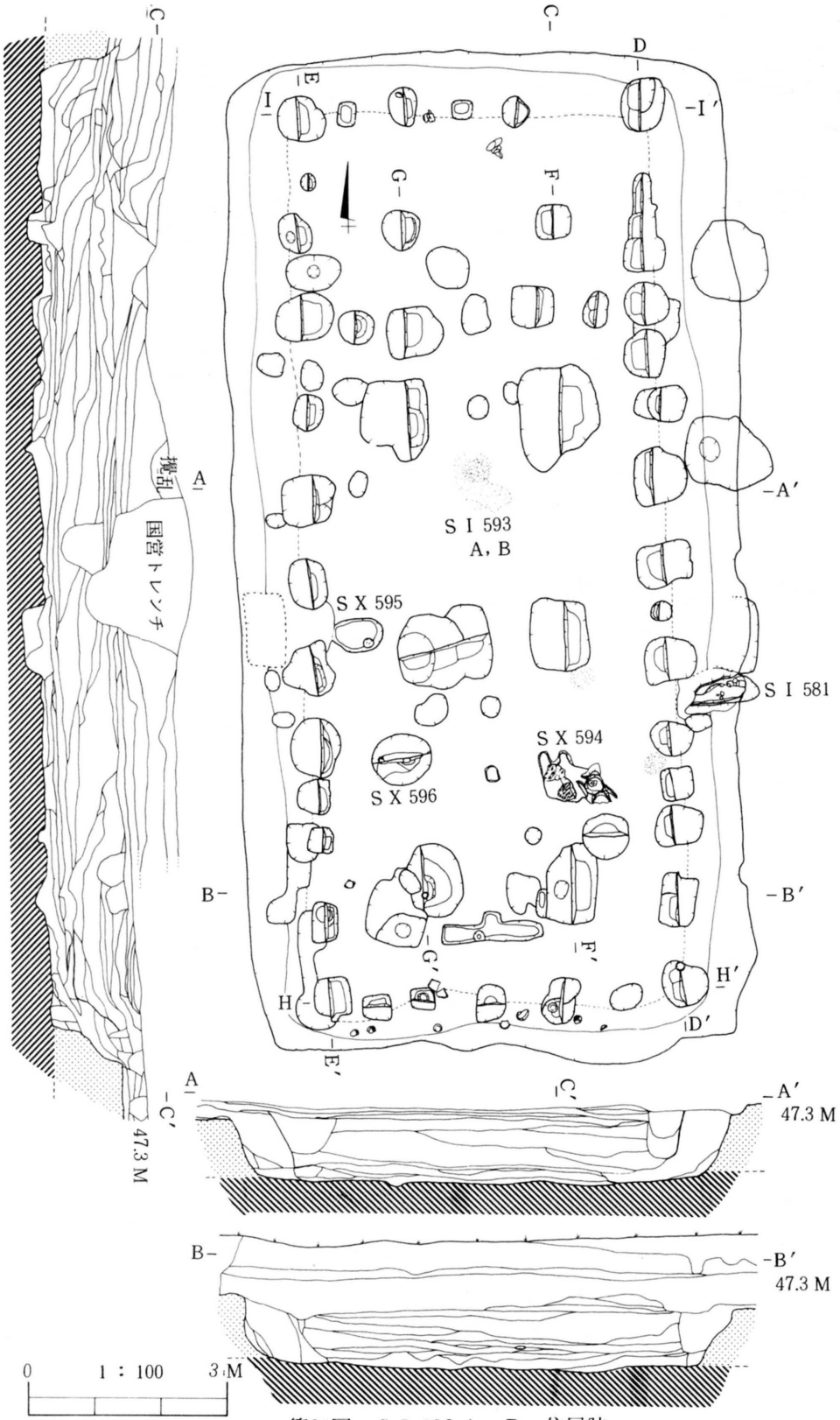
赤褐色土器：9は回転糸切り後，体部下端に回転ケズリを施した坏である。

（ＳＩ593Ａ出土遺物）（第37図・図版29）

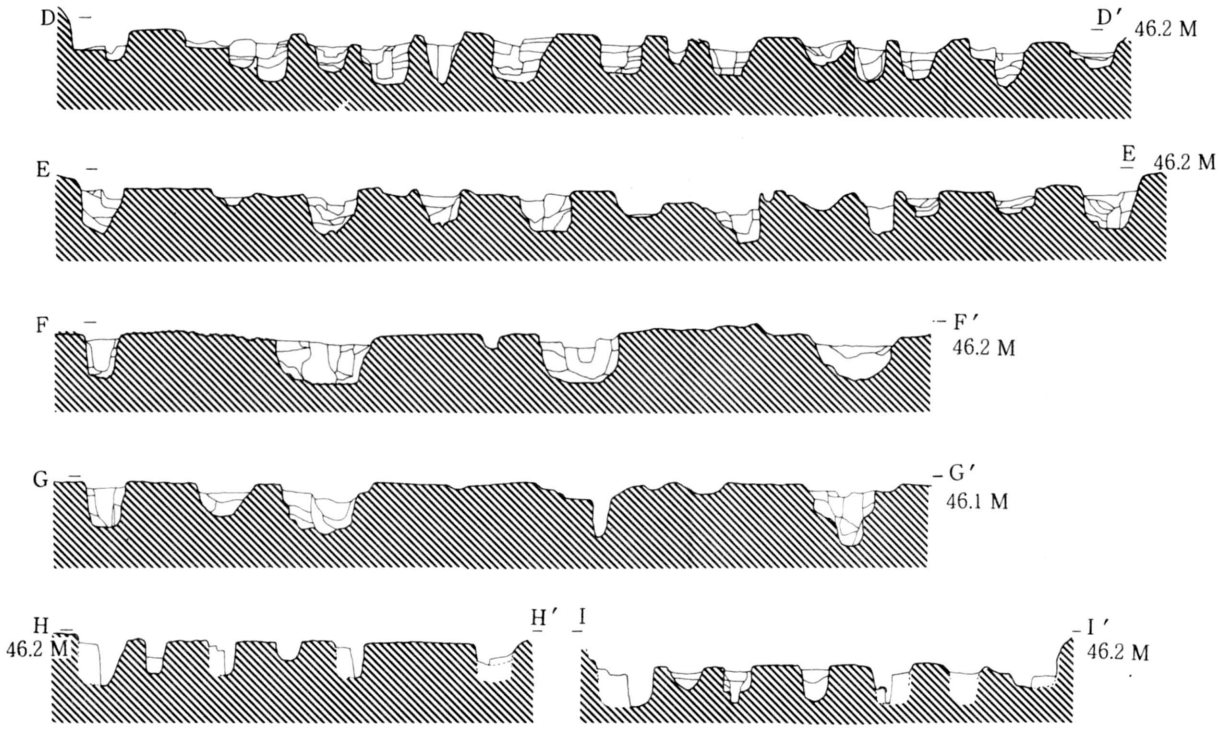
10，12，14は床面，それ以外は埋土から出土している。

須恵器：10，15は鉢である。内外面をハケ（布）状の工具による回転の整形。15は体中央部以下に斜方向の手持ケズリが施されている。11，12は回転ヘラ切りの坏である。いずれも硯に転用されているが，11は墨痕，12はベンガラである。13は転用硯の蓋である。

赤褐色土器：14は回転糸切りで，内面はスベスベしており墨痕も認められることから転用硯と考



第35図　S I 593 A・B，住居跡



第36図　ＳＩ 593 Ａ・Ｂ住居跡柱列掘り方断面図　0　1：100　4 M

えられるが，須恵器以外のものはきわめて少例でありめずらしい。

（ＳＩ 593 Ｂ出土遺物）（第38図・図版30）

６は床面，８は掘り方内，それ以外は埋土からの出土である。

土師器： １は黒色処理の施された蓋である。内外全面に回転ミガキあり。

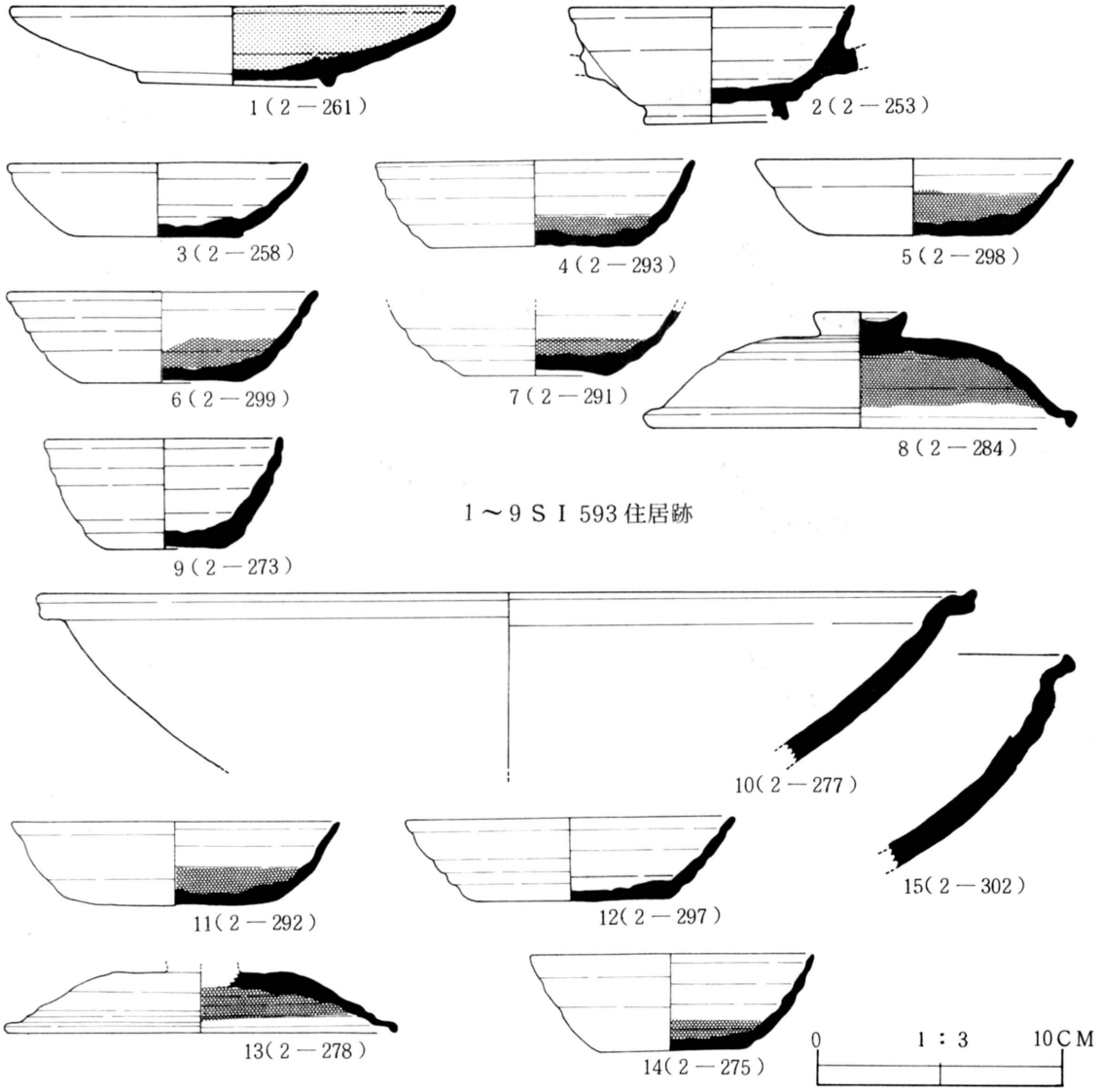
須恵器： ２，４は回転糸切りの坏である。４は内面を硯に転用している。５は肩部に回転ケズリを施した蓋で，内面は硯に転用している。

赤褐色土器： ６は台部を硯に転用している。７，８は回転糸切りで，８は体部下端に回転ケズリが施されている。また底部中央部には内面径 1.2 ㎝，外面径 0.5 ㎝程の小孔が穿たれている。

その他の出土遺物　９はＳＸ 594付近出土の羽口である。先端部は粘土内ガラス質が溶解しアメ状になっている。

ＳＸ 582竪穴状遺構（第22図・図版10）

長径12m，短径７ｍの範囲に土器片（赤褐色土器）を多量に含んだ炭化物面である。またその周囲には幅約30㎝～70㎝，厚さ２㎝～10㎝の黄褐色粘土が部分的に取り巻いている。明確な掘り込み面は不明であるが，壁と考えられる落ち込みは北・東において認められ，西・東の一部と南については国営調査時に除去されており不明である。炭化物を除去した面には数ケ所に薄い焼土面が認められた。



第37図　S I 593，593 A住居跡出土遺物　10～15 S I 593 A住居跡

S X 582出土遺物（第39図・図版30，31）

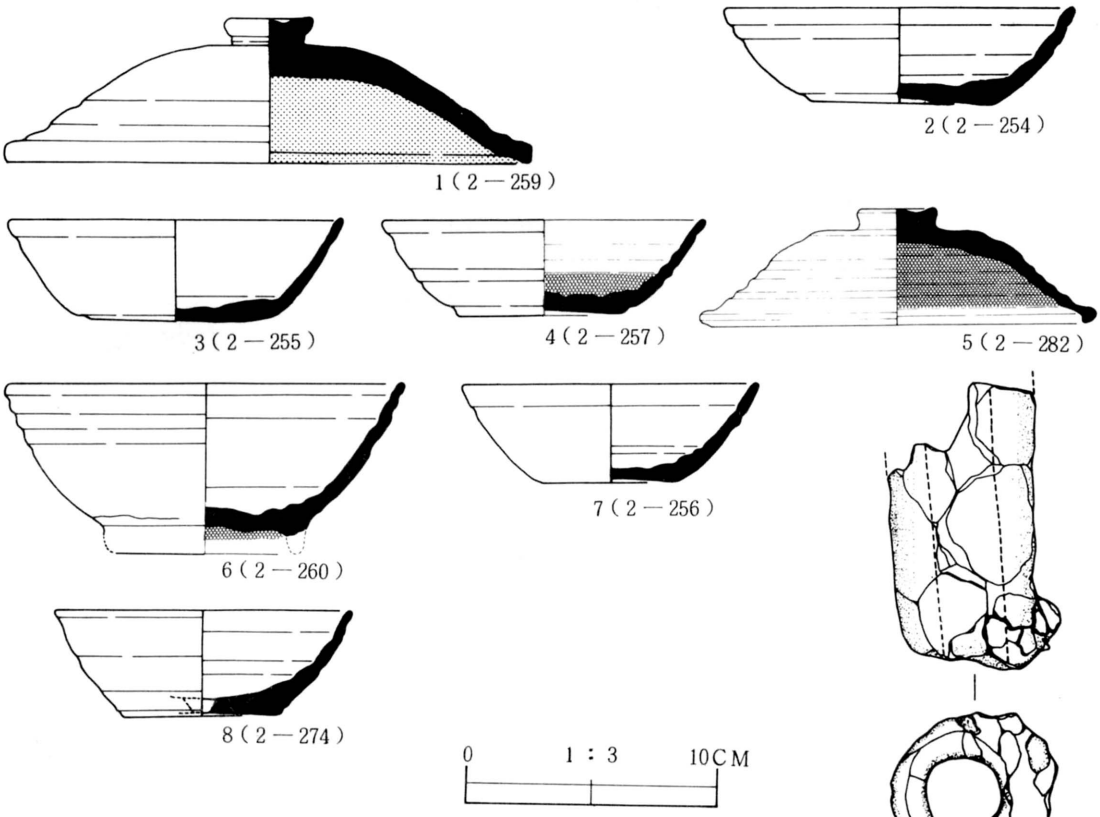
須恵器：1～3は台付坏である。1は内面見込部，2，3は外面底部を硯に転用している。1は焼成・胎土がきわめて良好で，また作り，器形も洗練されている。

赤褐色土器：8～10，14は浅い皿状を呈す。15は鉢である。

須恵器硯：16，17は円面硯である。

S X 583竪穴状遺構（第22図・図版7）

炭化物と遺物出土状況は前述のS X 582と類似するが，プランについては西側で壁と思われる粘土の一部を確認できた他は明確にできなかった。S X 582によって東は切られている。



第38図　ＳＩ 593 Ｂ住居跡出土遺物

土　　壙

ＳＸ597土壙跡（第41図・図版14）

径約1.7 mの浅い鍋底状の落ち込みである。底面には2㎝～こぶし大の鉄滓が多量に遺存している。底面の状態あるいは周囲の状況からして製作場ではなく，廃棄場と考えられる。

一本柱列

一本柱列としたものは，30㎝～50㎝の布掘り内に円形の掘り方が認められるものである。内部の掘り方は，30㎝～60㎝で布掘りの幅より広いものもある。

ＳＡ564柱列跡（第22図・図版6，7）

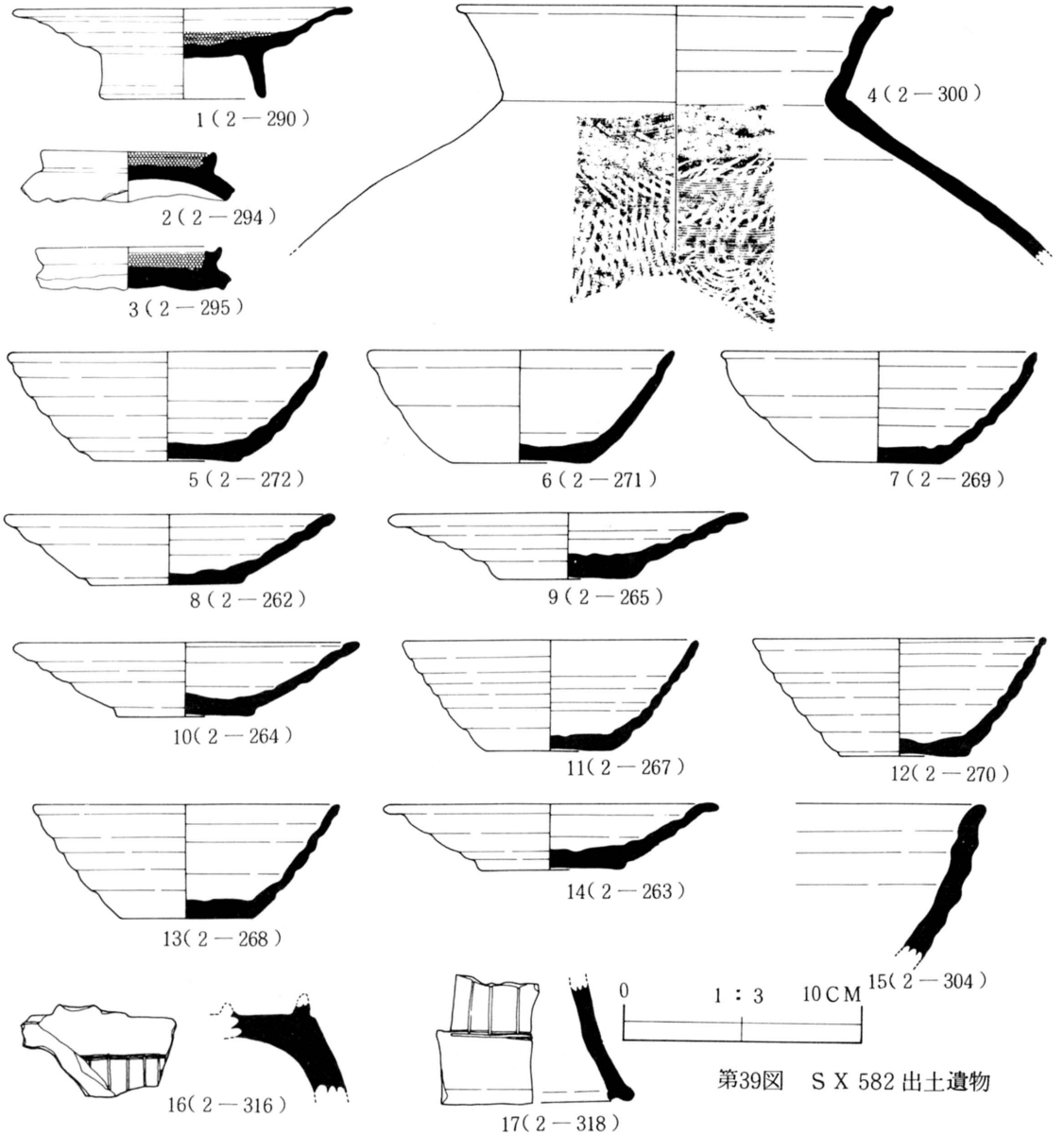
南北に延びる柱列でやや西に偏す。間尺は遺存状況の良好な南側についてみると2 m～2.5 mである。布掘りはＳＸ582，583の炭化物層を切っている。

ＳＡ564出土遺物（第43図・図版31）

須恵器　1は回転ヘラ切りの坏である。口縁部外面には油煙状の煤が付着している。

ＳＡ565・566・567柱列跡（第22図・図版10図）

ＳＡ564の南端から東方に延びる柱列である。各々2.3 mの間隔で東西方向に平行して延び，Ｓ



第39図　ＳＸ 582 出土遺物

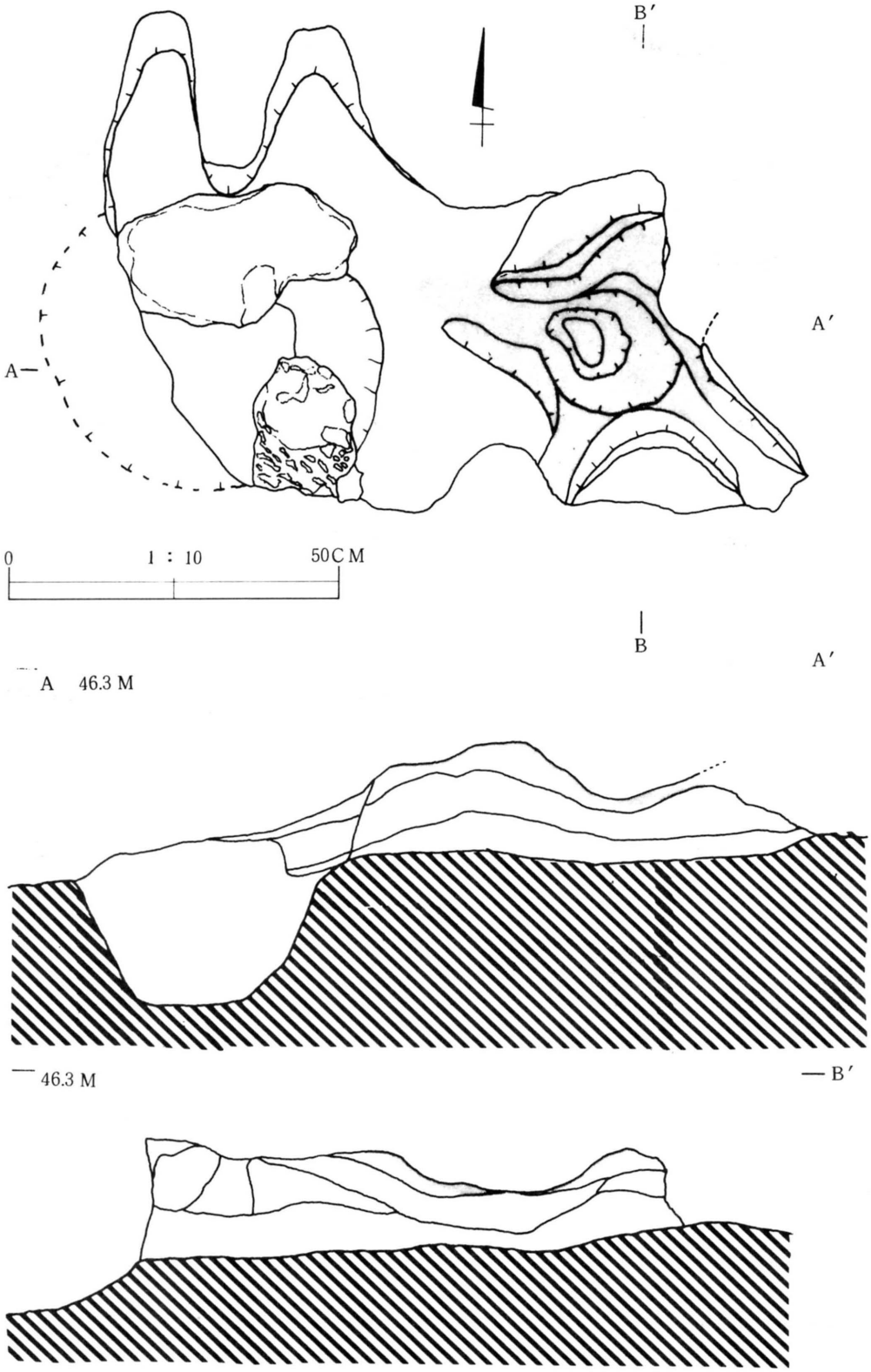
Ａ 565はＳＢ 587の西梁行棟持柱に取り付き，ＳＡ 566は同北柱に取り付く。またＳＡ 566，567は西梁行より一間（1.2 m）程さらに西に延びる。間尺は不規則で70cm～２mである。埋土はサラサラの褐色砂，柱痕跡は不明瞭である。

ＳＡ 567出土遺物（第43図・図版31）

赤褐色土器： ２は回転糸切りの坏である。内面はロクロによる凹凸はあるものの器面はスベスベしている。

ＳＡ 569柱列跡（第22図・図版10）

東西に延びる柱列である。遺構確認面はＳＡ 564～567と同じであるが，同時存在したかどうかは不明である。布掘り内の掘り方はほぼ 1.3 m間隔で最も規則的である。



第40図　ＳＸ 594 鍛冶遺構（炉跡）

ＳＡ 569 柱列跡

（第22図・図６）

南北に延びる柱列で，南端は前述のＳＡ 564とほぼ同位置で東に屈曲するが，全体の西への傾きは大きい。掘り込みプランはＳＸ 583の炭化物を除去しないと検出できない。ＳＡ566・567より古い。

ＳＡ 570 柱列跡

（第22図・図版10）

東西に延びる最南端の柱列で，西は調査区外に，東はＳＢ 587西梁行で止まる。掘り込みは前述のＳＡ 565より一層下層（褐色砂）で検出された。布掘り内の掘り方は，1.3 m～1.5 m間隔で認められるが，近接しているものもあることから部分的な柱の建替が行われたものと考えられる。

ＳＡ 571 柱列跡

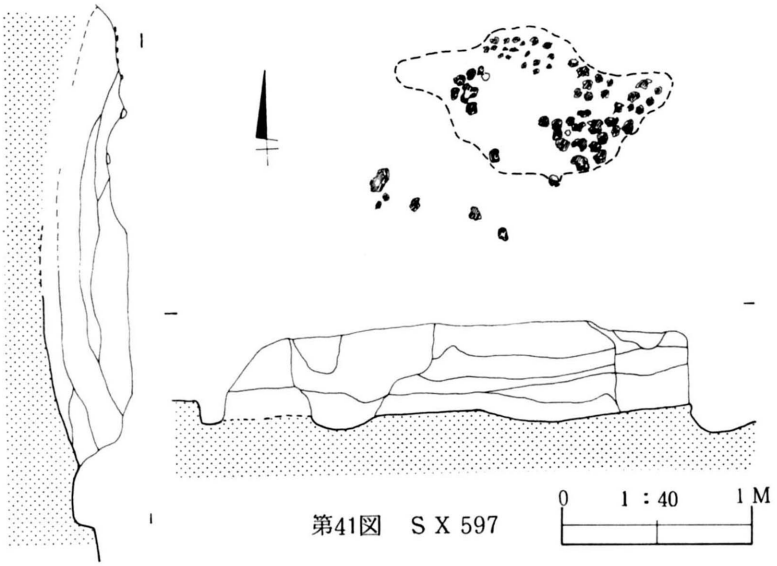
（第22図・図版10）

ＳＡ 569の南端で東に屈曲し，ＳＢ 587の西梁行で止まる。埋土は赤褐色砂でサラサラしている。

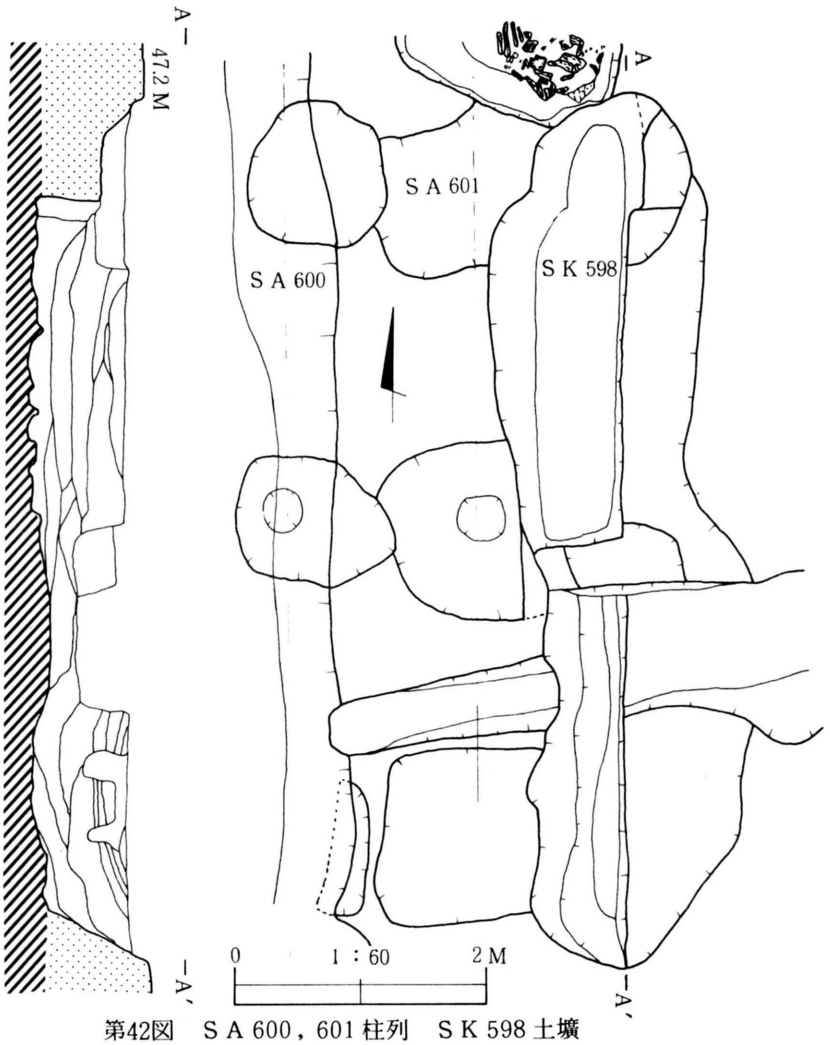
ＳＡ 571 出土遺物

（第43図・図版31）

鐙瓦：３は細弁蓮華文鐙瓦片である。内面は縄の叩



第41図　ＳＸ 597



第42図　ＳＡ 600，601 柱列　ＳＫ 598 土壙

き目，頸接合部はナデ成形である。

ＳＡ572柱列跡（第22図・図版10）

ＳＡ566の延長と考えられる。

ＳＡ574柱列跡（第22図・図版10）

ＳＢ587，ＳＡ575～577と同時期と考えられる。他の柱列と比較して上面幅がやや広い。

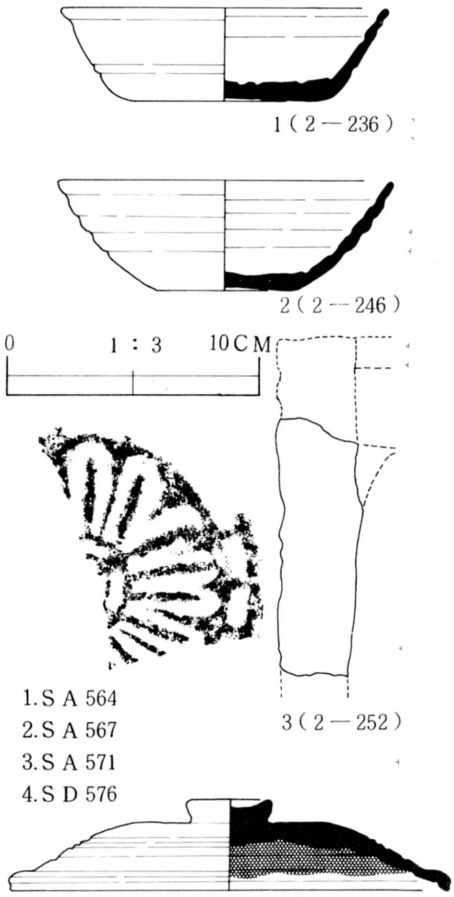
ＳＡ590柱列跡（第22，29図・図版８）

布掘りを伴わない一本柱列である。東西に６間（○＋2.7 m＋2 m＋2.3 m＋2.3 m＋○）検出されている。西端はＳＢ588北西コーナー掘り方を切り，東はグリッド北壁で確認されている。いずれの掘り方にも炭化物が多く混入している。遺構群の中では最も新しいものである。

溝　　跡

ＳＤ576溝跡（第22図）

ＳＩ住居跡の西側を南北に切断する形で延びている。北側ではＳＩ593を切っているが，埋土がきわめて似ておりどこまで延びるかは確認できなかった。ＳＫ584土壙より新しい。



第43図　ＳＡ564，567，571柱列，ＳＤ576溝跡出土遺物

ＳＤ576出土遺物（第43図・図版31）

須恵器： ４は回転糸切りの蓋で，内面は硯に転用されている。墨痕は多いが，擦痕はわずかであり，あまり使い込まれていない。

土　　壙

ＳＫ584土壙跡（第27図）

ＳＩ593の南壁と同時に検出された東西に長い土壙である。埋土は炭化物と焼土を含んだ黒褐色砂が互層をなしている。ＳＩ593より新しく，ＳＸ582より古い。性格は不明である。

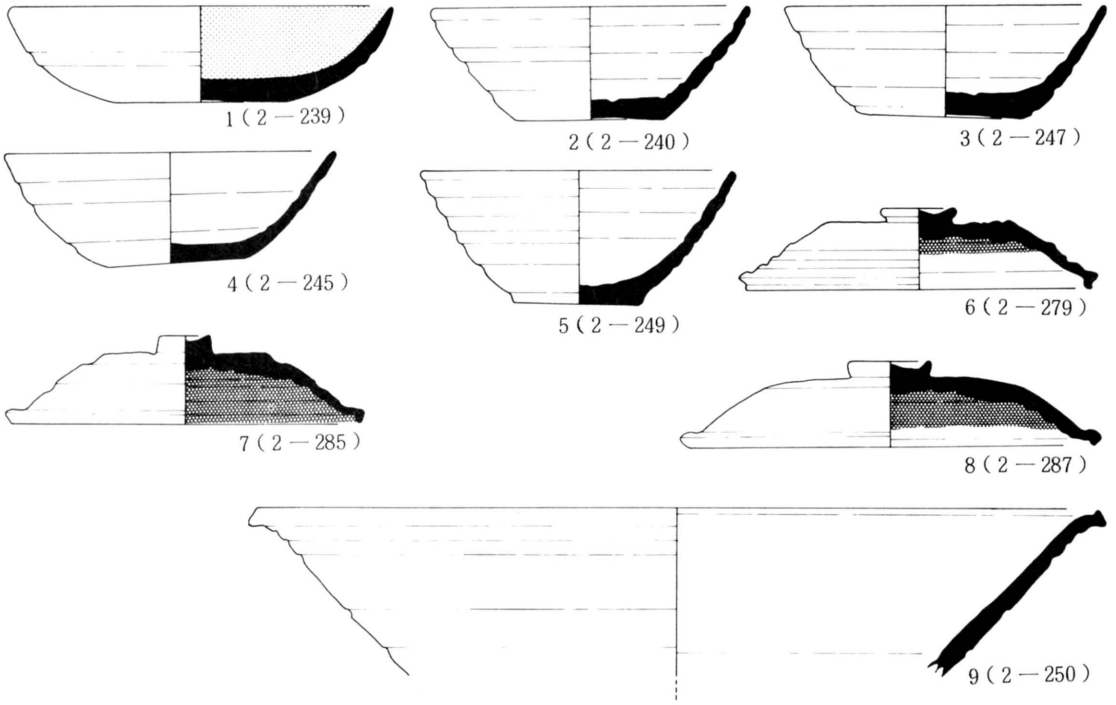
ＳＫ584出土遺物（第44図・図版31，32）

土師器： １は床面出土の黒色処理を施した坏である。回転糸切りで，内外全面に回転ミガキを施している。

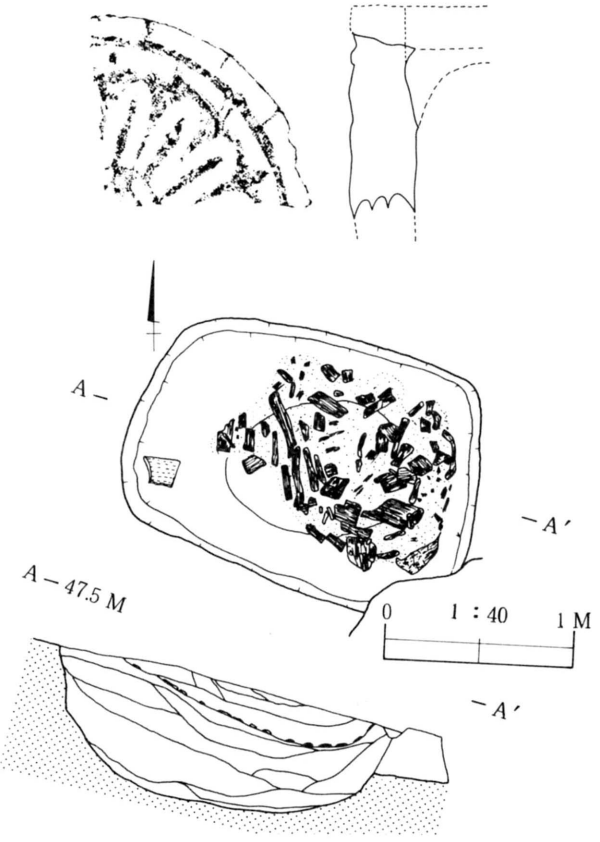
須恵器： ６～８は蓋で，いずれも内面は硯に転用されており磨滅痕と墨痕が認められる。６，８は肩部に回転ケズリが施されている。

赤褐色土器： ２～５は回転糸切りの坏で，内面のロクロによる凹凸が少ない。９は鉢である。

鐙瓦： 10は細弁蓮華文鐙瓦である。内面は縄の叩き，顎部は補強粘土が剝落し丸瓦接合時の指圧



第44図　ＳＫ 584 土壙出土遺物



第45図　ＳＫ 585 土壙

痕が認められる。

ＳＫ 585土壙跡（第45図・図版15）

楕円形の土壙で，底面までは深さ65cmであるが，その中間程には板材の細片と考えられる炭化材が約３cmの厚さで認められる。しかし焼面が壁の一部にしか認められず，土壙がある程度埋没した段階でまだ完全に火が消えない材を投げ込んだものと考えられる。性格は不明。西壁近くで焼けた縄目瓦（平瓦）が出土している。

下層遺構群（第23図・図版６）

下層遺構群としたものは，調査東側の砂質粘土整地層の上層を除去した段階で検出された建

物および地山飛砂層上で検出された遺構を指す。

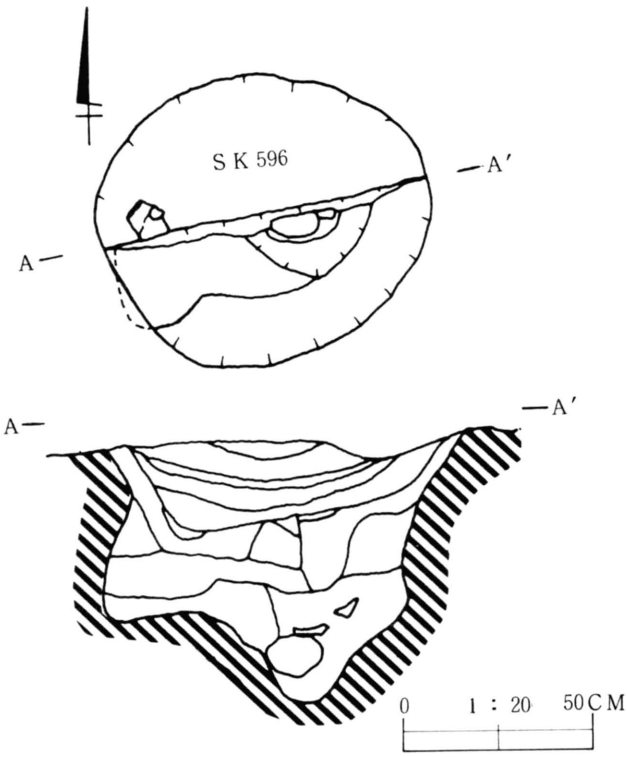
ＳＢ 604 Ａ建物跡（第30図・図版９）

東西２間（北梁行西から3.2 m＋○）かそれ以上×南北４間（北から2.9 m＋2.9 m＋2.6 m＋2.6 m）の南北棟と考えられる。方位はほぼ真北を指す。掘り方はほぼ方形を呈し，柱痕跡は径30㎝～40㎝の円形である。埋土は粘質土（砂混り）である。前述のＳＢ588，589の掘り方は本建物の約50㎝上面で確認されている。

埋土からは図示し得なかったが赤褐色土器の小片が出土している。

ＳＢ 604 Ｂ建物跡（第30図・図版９）

Ａによって切られている。間尺はＡと同じであるが建物全体が掘り方半分程東に寄っている。規模・方位はＡと同じと考えられる。Ａとの顕著な相違は掘り方内の埋土である。すなわち，Ａ掘り方埋土が粘性の砂質土であるのに対し，Ｂは大部分が黄褐色粘土であり，一部間層として砂質土が混入する程度である。



第46図　ＳＫ596土壙

ＳＢ 605建物跡（第30図・図版９）

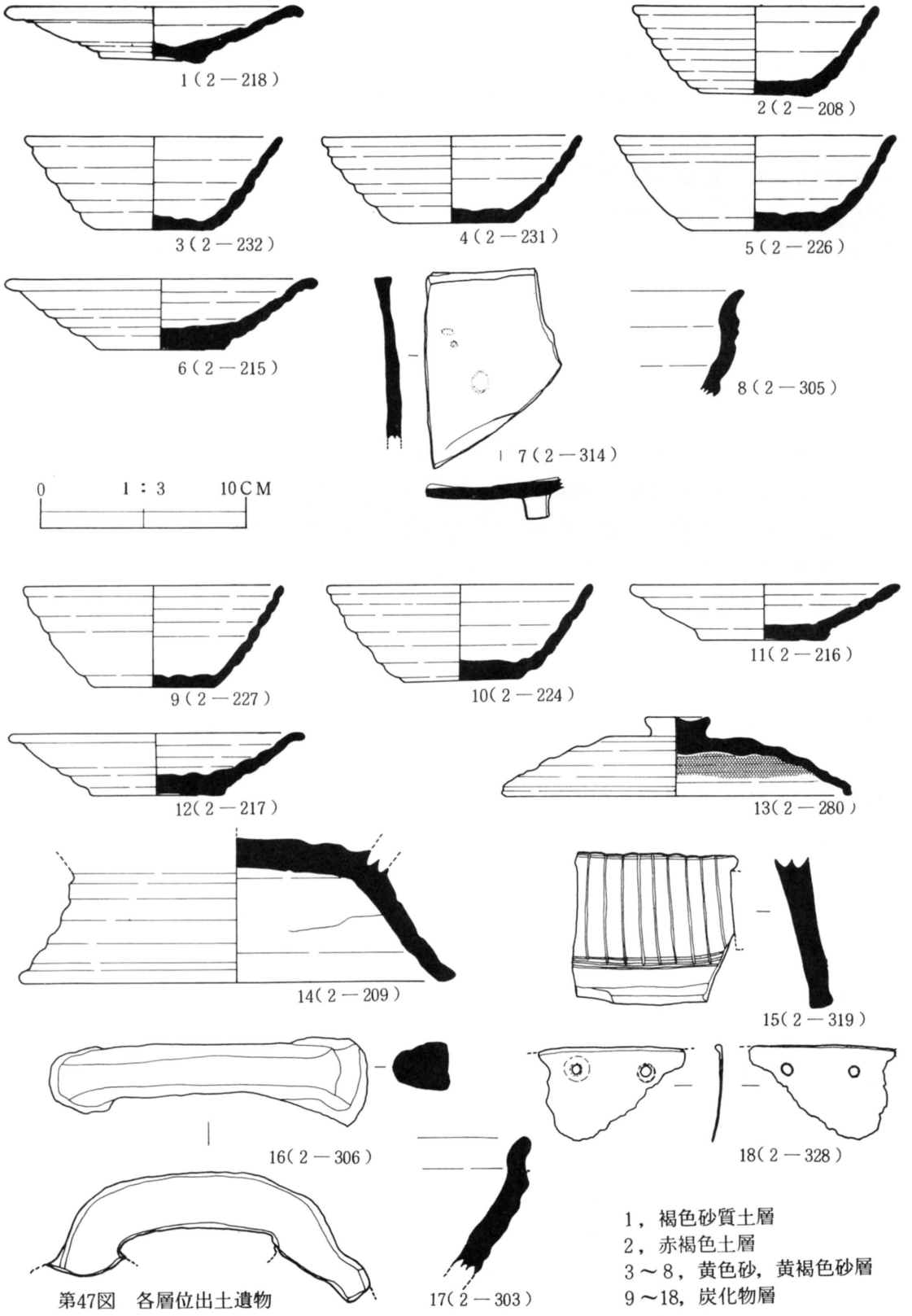
東西３間（西から2.3 m＋2.3 m＋2.3 m）かそれ以上×南北５間（2.5 m＋2.5 m＋3 m＋3 m＋3 m）かそれ以上の建物でほぼ真北を指す。掘り方検出面は砂混りの粘質土を除去した地山飛砂層上で，調査区内では最も古い時期の建物に相当する。掘り方内の埋土はやや軟弱ではあるが，粘土黄褐色砂が互層をなし，掘り込みも確認面より約１mと深い。しかし南北柱列は柱筋は通るものの，間尺が不規則，掘り方規模，形状の相違など疑問が残る。

ＳＡ 600柱列跡（第42図・図版９）

地山飛砂層上で南北に３個，ＳＩ593に切られた形で検出された。掘り方は円形に近く，埋土は粘土ブロック混りの褐色砂である。

ＳＡ 601柱列跡（第42図・図版９）

ＳＡ600の東に位置し，掘り方の一部はＳＡ600とＳＫ598に切られている。埋土は軟弱な褐色砂である。検出状況から柱列としたが，両柱列とも西に延びる建物の可能性も皆無ではない。



1，褐色砂質土層
2，赤褐色土層
3～8，黄色砂，黄褐色砂層
9～18，炭化物層

第47図　各層位出土遺物

ＳＫ598土壙跡（第42図・図版９）

地山飛砂層上で検出された南北に長い土壙である。底面は黒色粘土層（寺内層＝粘土・シルト層）に達している。

ＳＫ599土壙跡（第23図・図版６）

最下層で検出されたが出土遺物はなく性格は不明である。

ＳＫ608土壙跡（第22図・図版９）

不整形を呈し，床面も凹凸が激しく人為的なものかどうか不明である。地山飛砂層で検出されている。

３）各層位出土遺物

褐色砂質土層出土遺物（第47図１，図版32）

赤褐色土器：坏―回転糸切り，無調整。体部が強く外反し，皿形を呈する。

赤褐色土層出土遺物（第47図２，図版32）

赤褐色土器：坏―回転糸切り，無調整。胎土に砂粒が混り，やや荒い。焼成は良好である。

黄色砂褐黄・色砂層出土遺物（第47図３～８，図版32）

赤褐色土器：坏―３～６はいずれも回転糸切り，無調整。６は体部が強く外反し，皿形を呈している。いずれも胎土，焼成とも良好である。鉢―８は口縁部破片である。内外面ともロクロ痕が顕著である。

須恵器：硯―17は風字硯である。脚部は1.1㎝を計り，四面の面取りを行っている。墨痕はわずかに残っている。

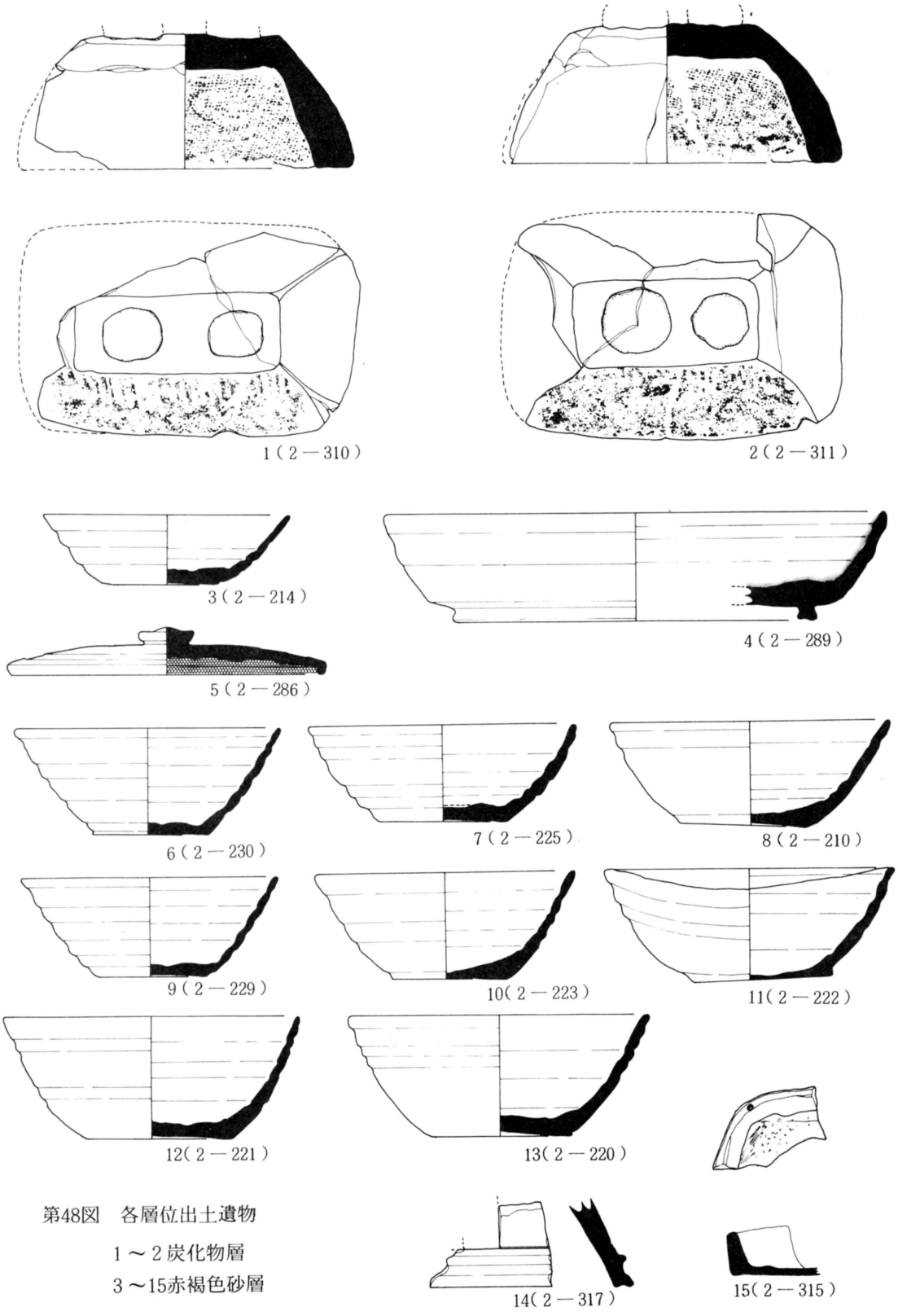
炭化物層出土遺物（第47図９～18，第48図１～２，図版32，33）

須恵器：蓋―13は切り離し不明，無調整。低い擬宝珠状の鈕をもち，その周辺には回転ケズリを施している。天井部から体部中央下半にかけて墨痕が残っており，擦痕が確認されることから，転用硯として使用されたものと考えられる。硯―15は円面硯の脚部で，ヘラ描きによる細い沈線が施され，また長方形の透かし窓と考えられる切り込みがみられる。

赤褐色土器：坏―９～12はいずれも回転糸切り，無調整。11，12は体部が強く外反し，皿形を呈している。台付鉢―14は台部と考えられる。内面には粘土紐巻き上げ痕がみられる。胎土には１㎜～２㎜の砂粒を含んでおり，焼成は良好である。鉢：17は口縁部破片である。

その他の遺物：16は須恵器質の把手と考えられる。胎土中にはカーボン質の黒色粒子が多く混入している。他の部分からの剥脱品か。18は銅製の鉢または杯と考えられる。体部上部には穴を穿ち，把手もしくは鈕を付けたものか。内面には穴の周辺に剥脱した痕跡がみられる。

屋根形土器―１，２はいずれも赤褐色を呈する。外面は天井部を除き全面に縦方向の叩きを施している。一方内面には全面に布目痕があることから型によって成形されたものと考えられる。上部には欠損しているが，把手または鈕と考えられる二ケ所の突起痕がある。胎土は小砂粒が多く，ま



第48図　各層位出土遺物

1～2炭化物層

3～15赤褐色砂層

た焼成もやや不良である。

赤褐色砂層出土遺物（第48図３～15，第50図１～３，図版33，34）

須恵器：坏―３は回転糸切り，無調整である。胎土に少量の砂粒を含むが焼成は良好である。台付鉢―４は底部切り離しは不明であるが，台貼り付け後に周縁部にナデを施している。内面全体にベンガラ状の赤色付着物が残存している。蓋―５は回転ヘラ切り，無調整。内面全体に墨痕が残り，さらに天井部から体部中央にかけて擦痕が確認されることから転用硯として使用されたと考えられる。硯―14は円面硯脚部で，ヘラ描きによる細い横の沈線，長方形の透かし窓と考えられる切り込みがみられる。15は風字硯で，全体に薄手に成形されているが脚部は不明である。

赤褐色土器：坏―６～13はいずれも回転糸切り，無調整で胎土，焼成とも良好である。11は大きな歪みを生じている。

須恵器―１は灰黒色を呈し，外面はケズリの後，ナデを施し，一方内面は成形後ナデを施している蓋状の土器である。上部には欠損しているが，把手または鈕と考えられる突起痕がみられる。胎土には１㎜～２㎜の砂粒を含んでいる。

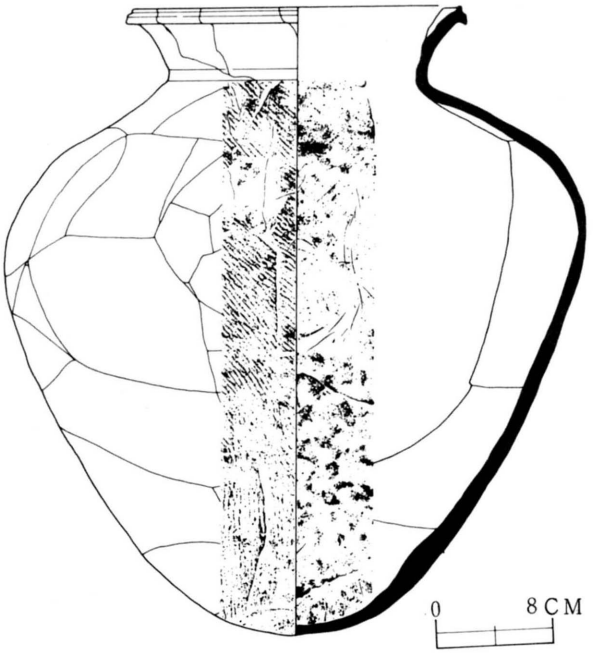
石製品―２は五面使用の砥石である。上部は欠損しているが，擦痕が多くみられる。凝灰岩製。

石器―３は頁岩製の石鏃で，底辺がわずかに内湾している。長さ4.1㎝，幅1.5㎝，厚さ0.6㎝。

褐色砂質土層出土遺物

（第49図，図版32）

須恵器甕―丸底を呈するもので，口縁部直径22㎝，胴部最大径38㎝を計る。外面は左から右下がりの条線状叩き板痕，内面は当て具痕をナデて整形しているか，もしくは無文の当て具と考えられる。口縁部は内外面ともナデ，底部には焼き台痕跡が認められる。

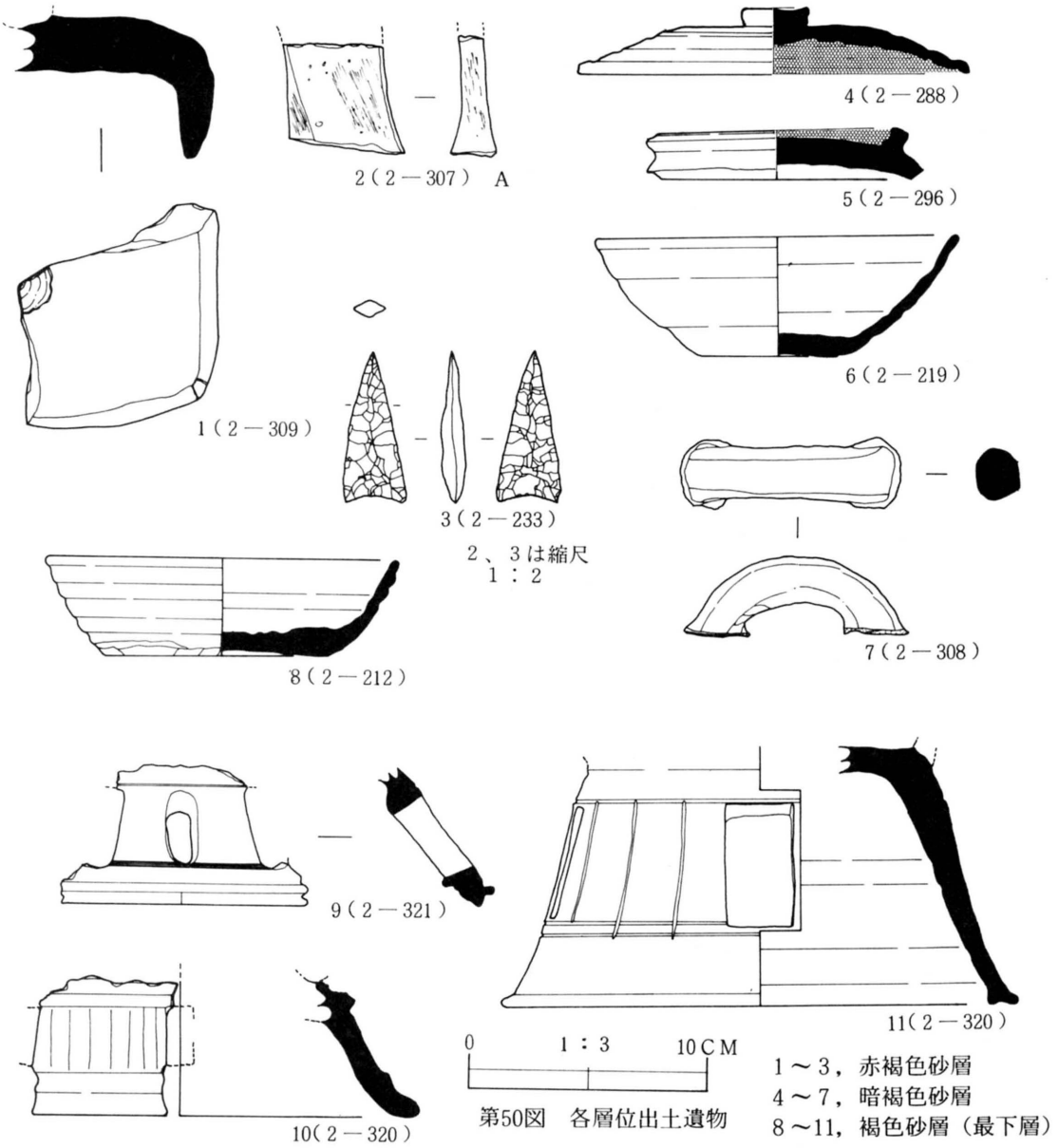


第49図　各層位出土遺物褐色砂質土層

暗褐色砂層出土遺物

（第50図４～７，図版34）

須恵器：蓋―４は切り離し不明で，鈕周辺に回転ケズリを施している。内面全体に墨痕が残っており，また天井部から体部下半にかけて擦痕が確認されることから，転用硯として使用されたと考えられる。長頸壺―５は長頸壺台部である。台部の周囲を打ち欠き，また打ち欠いた一部をさらに擦って整形している転用硯



第50図　各層位出土遺物

1～3，赤褐色砂層
4～7，暗褐色砂層
8～11，褐色砂層（最下層）

と考えられる。台部の切り離しは不明。胎土，焼成とも良好である。

赤褐色土器：坏－6は回転糸切り，無調整である。体部は底部からやや内反して口縁部にいたる。やや軟質の焼成である。

その他の遺物－7は須恵器質の把手と考えられる。胎土，焼成とも良好である。他の部分からの剝脱品か。

・色砂層出土遺物（第50図8～11，図版34）

須恵器：坏－8は回転ヘラ切りによる切り離しで，底部外面下端に部分的に手持ちケズリを施している。硯－9～11はいずれも円面硯である。9は脚部で楕円形の透かし窓の切り込みがあり，3

～4個を一単位として脚部に3～4単位めぐるか，あるいは1個ずつ独立しているかのいずれかが考えられるが，10個以上存在すると考えられる。透かし窓の下端にはヘラ描きによる細い横の沈線がみられる。10は同じく脚部で，上部には海部と陸部を分ける突起が若干残存する。長方形を呈する透かし窓の切り込みがあり，その数は7～8個と考えられる。またヘラ描きによる縦の細い沈線がみられる。11は長方形を呈する透かし窓の切り込みがあり，その数は5個と考えられる。透かし窓の上部に一本，下部に二本のヘラ描きによる横の沈線，また三本の縦の沈線がみられる。

4）墨書土器と転用硯

墨書土器（第51～56図，図版35～41）

墨書土器は，住居跡，掘り方，溝，各層から，104点出土している。このうち判読可能（字形の一部を欠くが推測できるものを含む）なもの62点，不明または判読不能なもの42点となっている。大部分は坏類で95点，蓋が8点，甕が1点となっている。

これらの墨書の銘記場所を分類してみると底部外面が64点と最も多く，次に体部外面32点，蓋外面5点，蓋鈕1点，甕内面1点，また体部から底部にかけて墨書されたもの1点となる。

出土地点をみた場合，ＳＩ593住居跡の埋土・床面等から不明のものも含めて29点，またその上層にあたるＳＸ582・583竪穴状遺構埋土とその周辺より不明のものも含めて21点出土している。まとまって出土したわけではないが，出土墨書総数の約半数がＳＩ593住居跡とその上層遺構から出土していることがわかる。

墨書土器全体からみた文字別数量は，「厨」が16点と最も多く，次いで「大」3点，「酒」2点，「官」2点という順序でその他の文字は多岐にわたっている。特に興味をひくのは「厨」がＳＸ582・583竪穴状遺構，ＳＩ593住居跡より最も多く出土していることである。

内容についてみると，使用場所をあらわすと思われるものに，「官厨」「酒所」「鎮」「軍毅所」があげられる。また官職・身分をあらわすと思われるものに，「厨主」「官」「佐」「〔秋カ〕介」等があり特に「〔秋カ〕介」は文字の一部を欠くとはいえ，秋田城に専当国司として置かれた「秋田城介」と関連を持つ墨書として注目される。その他には，人名，所有者を意味すると考えられる「大伴」や，赤褐色土器の体部に吉祥句かと思われる「□六年二月十□（日カ）（福カ 徳カ 良 良）」の文字を配列したものがある。これは「良良」以外の文字は，墨痕が部分的にしか残っておらず，また薄かったため，肉眼では判読できなかったが，赤外線テレビカメラを使用して見ると「六年二月十□福カ徳カ」の文字が浮き出てきた。しかし「六年」の上につく年号については墨痕があまりにも薄かったため，判読は不可能であった。

今回出土の墨書土器のうち，硯に転用したと思われるものが18点あった。うち坏類は12点，蓋が6点であるが，各々1点ずつ内面にベンガラが付着しているものがあり，ベンガラ用の硯として使用したと考えられる。

表V

第33次出土墨書土器一覧表

通番号	遺物番号	器種	調整技法	切り離し	墨書部位	出土層位	墨書銘	備考
1	2－172	土師器台付坏	台部周縁ナデ・内面黒色処理	回転糸切り	底部	SX582 床面	判読不能	
2	2－155	〃 〃	内面黒色処理	不明	〃	SD578 埋土	〃 〃	
3	2－149	須恵器坏		回転ヘラ切り	〃	赤褐色砂	〔丸カ〕	
4	2－178	〃 〃		回転糸切り	〃	炭化物混砂	〔得カ〕	硯に転用
5	2－144	〃 〃		回転ヘラ切り	〃	SI593 埋土	大	〃
6	2－151	〃 〃		回転糸切り	〃	SI593 埋土	□厨	
7	2－169	〃 〃		回転ヘラ切り	〃	赤褐色砂	官厨	
8	2－171	〃 〃		〃 〃	〃	SI593 B床面	〔東弘カ〕	
9	2－166	〃 〃		回転糸切り	〃	炭化物混砂	判読不能	
10	2－176	〃 〃	体部下端回転ケズリ	不明	〃	炭化物層	〃 〃	
11	2－193	〃 〃		〃	体部	SX582 床面	〃 〃	
12	2－194	〃 〃		〃	〃	炭化物混砂	入	
13	2－203	〃 〃		〃	〃	SX582 床面	判読不能	硯に転用
14	2－131	〃 〃		〃	〃	SX582 床面	〃 〃	
15	2－160	〃 〃		回転糸切り	底部	黄褐色砂	〃 〃	硯に転用
16	2－143	〃 〃		回転ヘラ切り	〃	表土	〔酒カ〕	
17	2－205	〃 〃	体部下端回転ケズリ	〃 〃	〃	SI593 A床面	官	硯に転用
18	2－154	〃 〃	底部ナデ	〃 〃	〃	赤褐色砂質土	譯	
19	2－168	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃	SX582 埋土	瓦	
20	2－128	〃 〃		〃 〃	〃	SI593 埋土	判読不能	
21	2－207	〃 〃		〃 〃	体・底部	SK584 埋土	次□	硯に転用
22	2－129	〃 〃		〃 〃	底部	SI593 A床面	厨	〃
23	2－126	〃 〃		回転糸切り	〃	SI593 A床面	厨	
24	2－152	須恵器台付坏	台周辺ナデ	回転ヘラ切り	〃	炭化物層	厨	
25	2－206	〃 〃		回転糸切り	〃	SI593 埋土	判読不能	
26	2－184	〃 〃	底部外面ロクロナデ調整	回転ヘラ切り	〃	SB588 掘り方	〃 〃	
27	2－167	〃 〃	台周縁ナデ	回転糸切り	〃	暗褐色砂直上	大	
28	2－161	〃 〃	台周辺ナデ	回転ヘラ切り	〃	SB586 掘り方埋土	年	
29	2－137	須恵器蓋		〃 〃	鈕	SI593 埋土	大	硯に転用
30	2－190	〃 〃		不明	外面	SI593-Aブリッヂ	判読不能	〃
31	2－139	〃 〃	外面肩部回転ケズリ	〃	〃	赤褐色砂	〃 〃	〃
32	2－189	〃 〃		〃	〃	SI593 A床面	□所□	ベンガラ付着、硯に転用
33	2－138	〃 〃		回転ヘラ切り	〃	SK584埋土・SI579床面	〔秋カ〕介	硯に転用
34	2－158	〃 〃		不明	〃	SA564 埋土	〔佐カ〕	〃
35	2－204	須恵器甕		〃	内面	SI593 A床面	判読不能	
36	2－106	須恵器坏	底部わずかにナデ	回転ヘラ切り	底部	赤褐色砂下層	官	
37	2－107	〃 〃		〃 〃	〃	赤褐色砂	判読不能	
38	2－110	須恵器台付坏		不明	体部	赤褐色砂	得	硯に転用
39	2－112	須恵器坏		回転糸切り	底部	SI593 埋土	判読不能	
40	2－115	〃 〃		〃 〃	体部	炭化物混砂	金	
41	2－113	〃 〃		〃 〃	底部	炭化物層	厨	

表Ⅵ

通番号	遺物番号	器種	調整技法	切り離し	墨書部位	出土層位	墨書銘	備考
42	2－117	須恵器杯		回転ヘラ切り	底部	赤褐色砂（炭化物混）	石	硯に転用
43	2－119	〃 〃		〃 〃	〃	ＳＩ593 埋土	大伴	
44	2－116	〃 〃		〃 〃	〃	ＳＫ584 埋土焼土内	判読不能	
45	2－121	〃 〃		〃 〃	〃	ＳＩ579 埋土	〃	
46	2－120	〃 〃		回転糸切り	〃	ＳＩ593 埋土	之 〔福ニ徳ヵ〕	ベンガラ付着、硯に転用
47	2－208	赤褐色土器杯		〃 〃	体部	ＳＸ582 床面	□□六年二月十日□良良	
48	2－180	〃 〃	体部下端回転ケズリ	〃 〃	底部	ＳＩ593 埋土	判読不能	
49	2－127	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃	ＳＩ593 Ａ埋土	厨	燈明皿
50	2－130	〃 〃		〃 〃	体部	暗褐色砂土	厨	
51	2－136	〃 〃		〃 〃	底部	炭化物層	厨	
52	2－125	〃 〃		〃 〃	〃	ＳＩ593 埋土	村	
53	2－185	〃 〃		〃 〃	〃	ＳＸ582 床面	軍穀所	
54	2－183	〃 〃	底部周縁軽くナデ	〃 〃	〃	赤褐色砂	判読不能	
55	2－170	〃 〃		〃 〃	〃	表土	厨主	
56	2－159	〃 〃	体部下端回転ケズリ	〃 〃	〃	ＳＩ593 Ｂ床面	厨	硯に転用
57	2－181	〃 〃		〃 〃	〃	赤褐色砂土	〔厨ヵ〕	
58	2－177	〃 〃		〃 〃	〃	ＳＩ580 埋土	厨	
59	2－145	〃 〃		〃 〃	〃	黄褐色砂上層	厨	
60	2－147	〃 〃		〃 〃	〃	ＳＩ593 埋土	厨	
61	2－140	〃 〃		〃 〃	〃	ＯＥ86～9 ベルト内	万	
62	2－153	〃 〃		〃 〃	〃	ＳＩ593 埋土	上	
63	2－150	〃 〃	底部周縁軽くナデ	〃 〃	〃	ＳＡ567 埋土	木	
64	2－142	〃 〃		〃 〃	〃	新しい整地層	行事	
65	2－141	〃 〃		〃 〃	〃	暗褐色砂直上	判読不能	
66	2－157	〃 〃		〃 〃	〃	炭化物層下層	積	
67	2－164	〃 〃		〃 〃	〃	ＳＩ579 埋土	判読不能	
68	2－146	〃 〃		〃 〃	〃	暗褐色砂上	〔田ヵ〕	
69	2－156	〃 〃		〃 〃	〃	ＳＩ580 埋土炭化物層	判読不能	硯に転用
70	2－165	〃 〃		〃 〃	体部	炭火物層	〃	
71	2－182	〃 〃		〃 〃	底部	ＳＩ580 埋土	〃	
72	2－135	〃 〃		〃 〃	体部	ＳＢ588建物跡西側中央柱埋土内	〃	
73	2－148	〃 〃	体部下端回転ケズリ	〃 〃	底部	ＳＩ593 掘り方	〃	
74	2－175	〃 〃		〃 〃	〃	ＳＩ593 埋土	〃	
75	2－174	〃 〃		〃 〃	〃	ＳＫ584 埋土	〃	
76	2－173	須恵器杯			体部	赤褐色砂上黄褐色砂	〃	
77	2－162	赤褐色土器杯		回転糸切り	底部	ＳＫ584 埋土	〃	
78	2－163	〃 〃		〃 〃	体部	ＳＸ582 床面	厨	
79	2－186	〃 〃		不明	〃	ＯＥ86～9 ベルト内	厨	
80	2－187	〃 〃		〃	〃	炭化物層	判読不能	
81	2－201	〃 〃		〃	〃	表土	〃	
82	2－195	〃 〃		〃	〃	褐色砂	世	

表Ⅶ

通番号	遺物番号	器　種	調　整　技　法	切り離し	墨書部位	出　土　層　位	墨　書　銘	備　考
83	2－196	赤褐色土器杯		不　明	体部	SD576 埋土	〔大ヵ〕	
84	2－198	〃　〃		〃	〃	SA566 埋土	〔代ヵ〕	
85	2－200	〃　〃		〃	〃	第3トレンチ表土	判読不能	
86	2－192	〃　〃		〃	〃	炭化物層	〃	
87	2－202	〃　〃		〃	〃	〃	〃	
88	2－199	〃　〃		〃	〃	SK584 埋土	〃	
89	2－197	〃　〃		〃	〃	炭化物層	〃	
90	2－133	〃　〃		〃	〃	SX582 床面	〃	
91	2－132	〃　〃		〃	〃	炭化物層	〃	
92	2－134	〃　〃		〃	〃	SA564 埋土	〃	
93	2－105	〃　〃		回転糸切り	底部	SI579 床面	大	
94	2－108	〃　〃	体部下端回転ケズリ	〃	〃	SK584 埋土	厨上	
95	2－109	〃　〃	〃　〃	〃	〃	SI593 B床面近く	酒	
96	2－111	〃　〃		〃	体部	炭化物層	県	
97	2－114	〃　〃		〃	〃	暗褐色砂上	□田	
98	2－118	〃　〃		〃	底部	SI579 床面	厨	
99	2－122	〃　〃		〃	〃	SI593 B埋土	厨上	
100	2－123	〃　〃		〃	体部	暗褐色砂上	判読不能	
101	2－124	〃　〃		〃	〃	SI580 埋土	酒所	
102	2－179	赤褐色土器台付杯		〃	底部	SI593 Aブリッヂ	〔致ヵ〕	
103	2－191	赤褐色土器蓋		不　明	外面	表　土	判読不能	
104	2－188	〃　〃	外面肩部回転ケズリ	〃	〃	黄褐色砂上層	鎮	

表Ⅷ

第33次出土転用硯一覧表

通番号	遺物番号	器種	調整技法	切り離し	転用部位	出土遺構・層位	図面番号	備考
1	2－293	須恵器坏		回転ヘラ切り	底部内面	SI593 OEブリッジ	第37図－4	
2	2－298	〃 〃		〃	〃	SI593 埋土	〃 5	
3	2－299	〃 〃		回転糸切り	〃	SI593 埋土	〃 6	擦痕なし、墨ツボか？
4	2－291	〃 〃		〃	〃	SI593 埋土	〃 7	
5	2－292	〃 〃		回転ヘラ切り	〃	SI593 埋土	〃 11	
6	2－297	〃 〃		〃	〃	SI593 A床面	〃 12	ベンガラ用硯
7	2－257	〃 〃		回転糸切り	〃	SI593 B埋土(東南スミ)	第38図－4	
8	2－178	〃 〃		〃	〃	炭化物混砂	第51図－4	墨書あり 底部外面〔得ヵ〕
9	2－144	〃 〃		回転ヘラ切り	〃	SI593 埋土	〃 5	〃 〃 「大」
10	2－203	〃 〃		不明	〃	SX582 床面	〃 13	〃 体部外面 判読不能
11	2－160	〃 〃		回転糸切り	〃	黄褐色砂	〃 15	〃 底部外面 〃
12	2－205	〃 〃		回転ヘラ切り	〃	SI593 A床面	〃 17	〃 〃 「宮」
13	2－207	〃 〃		〃	〃	SK584 埋土	〃 21	〃 体・底部外面「次口」
14	2－129	〃 〃		〃	〃	SI593 A床面	〃 22	〃 底部外面 「厨」
15	2－117	〃 〃		〃	〃	茶褐色砂(炭化物混り)	第53図－42	底部外面 「石」
16	2－120	〃 〃		回転糸切り	〃	SI593 埋土	〃 46	〃 〃「之」ベンガラ用硯
17	2－156	〃 〃		〃	〃	SI580 埋土	第55図－69	〃 〃 判読不能
18		〃 〃		〃	〃	SK584 埋土		
19		〃 〃		〃	〃	SI593 Aブリッジ		
20		〃 〃		〃	〃	SX582 床面		
21		〃 〃		回転ヘラ切り	〃	OE－86～9 ベルト内		
22		〃 〃		回転糸切り	〃	赤褐色砂		
23		〃 〃	底部周縁軽くナデ	回転ヘラ切り	〃	赤褐色砂質土		
24		〃 〃		〃	〃	SI579 ベルト内		
25		〃 〃		〃	〃	SI593 埋土		
26		〃 〃		回転糸切り	〃	暗褐色砂直上		
27		〃 〃		〃	〃	黄褐色砂上層		
28		〃 〃	底部周縁ナデ	回転ヘラ切り	〃	SA564 埋土		ベンガラ用硯
29		〃 〃		〃	〃	黄褐色砂下層		
30		〃 〃	底部全面ケズリ	不明	〃	赤褐色砂		
31		〃 〃		回転ヘラ切り	〃	SI593 埋土		
32		〃 〃	底部全面不定方向のナデ	不明	〃	褐色砂最下層		
33		〃 〃		〃	〃	SI593 OEブリッジ		
34		〃 〃		回転ヘラ切り	〃	SI593 埋土		
35		〃 〃		〃	〃	SK584 埋土		
36		〃 〃		〃	〃	SI579 埋土		
37		〃 〃		〃	〃	赤褐色砂質土		
38		〃 〃		〃	〃	SI579 埋土		
39		〃 〃		〃	〃	SI593 床面掘り方		
40		〃 〃	底部全面ナデ	不明	〃	赤褐色砂		ベンガラ用硯
41		〃 〃		回転ヘラ切り	〃	SI593 OEブリッジ		

表Ⅸ

通番号	遺物番号	器　種	調　整　技　法	切り離し	転用部位	出土遺構・層位	図面番品	備　　考
42		須　恵　器　坏		回転糸切り	底部内面	ＳＩ593 埋土		
43		〃　〃		回転ヘラ切り	〃	ＳＩ593 Ａ埋土		
44		〃　〃		〃	〃	黄褐色砂上赤褐色砂		
45		〃　〃		〃	〃	ＳＫ584 埋土		
46		〃　〃		〃	不　明	赤褐色砂下		
47		〃　〃		不　明	〃	ＳＫ584 埋土		
48		〃　〃		〃	〃	ＳＩ593 埋土		
49		〃　〃		〃	〃	ＳＸ582 埋土		
50		〃　〃		〃	〃	ＳＩ593 床面掘り方		
51		〃　〃		〃	〃	ＳＩ579 床面		
52		〃　〃		〃	〃	ＳＸ582 床面		
53	2－275	赤褐色土器坏		回転糸切り	内面見込部	ＳＩ593 Ａ床面	第37図－14	
54	2－290	須恵器台付坏	台部周縁ナデ	〃	底部内面	ＳＸ582 埋土	第39図　1	台部周囲を打ち欠いている
55	2－294	〃　〃		〃	台　部	ＳＸ582 埋土	〃　2	
56	2－295	〃　〃		回転ヘラ切り	〃	ＳＸ582 埋土	〃　3	
57	2－289	〃　〃	台部周縁ナデ	不　明	底部内面	赤褐色砂層	第48図－4	ベンガラ用硯
58	2－110	〃　〃		〃	〃	赤褐色砂	第53図－38	墨書あり　体部外面「得」
59		〃　〃	台部周縁ナデ	回転ヘラ切り	台　部	ＳＩ593 埋土		底部内面スベスベしている
60		〃　〃	〃	〃	底部内面、台部	ＯＪ-Ｋ-82－4 拡張部表土		底部内面にベンガラ少し付着
61		〃　〃	〃	不　明	台　部	ＯＧ・Ｈ－81拡張部表土		
62		〃　〃	〃	回転糸切り	〃	ＳＩ593 埋土		
63		〃　〃	〃	〃	〃	暗褐色砂直上		
64		〃　〃		不　明	底部内面、台部	赤褐色砂		内面にベンガラも付着
65	2－260	赤褐色土器台付坏		〃	台　部	ＳＩ593 Ｂ床面	第38図－6	
66	2－281	須　恵　器　蓋	外面肩部回転ケズリ	不　明	内面天井部	ＳＢ588 掘り方内	第31図－6	
67	2－284	〃　〃	〃　〃	〃	〃	ＳＩ593 埋土	第37図－8	
68	2－278	〃　〃	〃　〃	〃	〃	ＳＩ593 Ａ埋土	〃　13	
69	2－282	〃　〃		〃	〃	ＳＩ593 Ｂ埋土(南辺中央)	第38図－5	
70	2－283	〃　〃		回転糸切り	〃	ＳＤ576 埋土	第43図－4	
71	2－279	〃　〃	外面肩部回転ケズリ	不　明	〃	ＳＫ584 埋土	第44図－6	
72	2－285	〃　〃		回転ヘラ切り	〃	ＳＫ584 埋土	〃　7	
73	2－287	〃　〃	外面肩部回転ケズリ	不　明	〃	ＳＫ584 埋土	〃　8	
74	2－280	〃　〃	〃　〃	〃	〃	炭化物層	第47図－13	
75	2－286	〃　〃		回転ヘラ切り	〃	赤褐色砂層	第48図－5	
76	2－288	〃　〃	外面肩部回転ケズリ	不　明	〃	暗褐色砂層	第50図－4	
77	2－137	〃　〃		回転ヘラ切り	〃	ＳＩ593 埋土	第52図－29	墨書あり　鉦「大」
78	2－190	〃　〃		不　明	〃	ＳＩ593 Ａブリッジ	〃　30	〃　底部外面　判読不能
79	2－139	〃　〃	外面肩部回転ケズリ	〃	〃	赤褐色砂	〃　31	〃　〃　〃
80	2－189	〃　〃		〃	〃	ＳＩ593 Ａ床面	〃　32	〃　〃□所、□ ベンガラ用硯
81	2－138	〃　〃		回転ヘラ切り	〃	ＳＫ584 埋土、ＳＩ579床面	〃　33	〃　〃〔秋ヵ〕介
82	2－158	〃　〃		不　明	〃	ＳＡ564 埋土	〃　34	〃　〃〔佐ヵ〕

表X

通番号	遺物番号	器種	調整技法	切り離し	転用部位	出土遺構・層位	図面番号	備考
83		須恵器蓋	外面肩部回転ケズリ	回転糸切り	内面天井部	SI579 埋土		内面にベンガラも付着
84		〃 〃	〃 〃	不明	〃	SA568 埋土		
85		〃 〃	〃 〃	〃	〃	SI593 埋土		
86		〃 〃	〃 〃	〃	〃	茶褐色砂		
87		〃 〃	ツマミ部周縁ナデ	〃	〃	赤褐色砂		
88		〃 〃		〃	〃	SB586 掘り方内		
89		〃 〃	外部肩部回転ケズリ	〃	〃	SI593 埋土		
90		〃 〃	〃 〃	〃	〃	SI593 埋土 SA571埋土		
91		〃 〃	〃 〃	〃	〃	SI593 埋土		
92		〃 〃	〃 〃	〃	〃	SI593 埋土		
93		〃 〃	〃 〃	〃	〃	NS-OA-8 拡張部表土		内面にベンガラも付着
94		〃 〃	〃 〃	〃	〃	赤褐色砂質土		
95		〃 〃	〃 〃	〃	〃	SI593 埋土		
96		〃 〃	〃 〃	〃	〃	SI593 埋土		
97		〃 〃	〃 〃	〃	〃	SK584 埋土		
98		〃 〃	〃 〃	〃	〃	SI599 埋土		
99		〃 〃	ツマミ部周縁ナデ	〃	〃	赤褐色砂		
100		〃 〃	〃 〃	回転ヘラ切り	〃	SI579 埋土		ベンガラ用硯
101		〃 〃	外面肩部回転ケズリ	不明	〃	SI593 埋土		
102		〃 〃	〃 〃	〃	〃	SI593 埋土		
103		〃 〃		〃	〃	SI593 A埋土		
104		須恵器蓋		〃	〃	西側拡張部粘土上層		
105		〃 〃	外面肩部回転ケズリ	〃	〃	SB586 掘り方		
106		〃 〃		回転ヘラ切り	〃	SD576 埋土		
107		〃 〃		不明	〃	SI593 埋土		
108		〃 〃		〃	〃	SD576 埋土		
109		〃 〃		〃	〃	SX582 床面		
110		〃 〃		〃	〃	OH-79 粘土層		
111		〃 〃	外面肩部回転ケズリ	〃	〃	暗褐色砂		
112		〃 〃		〃	〃	赤褐色砂質土上層		
113		〃 〃		〃	〃	SI579 埋土		
114		〃 〃		〃	〃	SI593 Aブリッジ		
115		〃 〃	外面肩部回転ケズリ	〃	〃	褐色層（最下層）		
116		〃 〃	〃 〃	〃	〃	赤褐色砂上		
117		〃 〃	〃 〃	〃	〃	SI593 B床面		
118		〃 〃		〃	〃	SI593 OEブリッジ		内面にベンガラも付着
119		〃 〃		〃	〃	茶褐色砂（炭化物混）		〃
120		〃 〃	外面ほぼ全体を回転ケズリ	〃	〃	SD576 埋土		
121		〃 〃		〃	〃	SI593 Aブリッジ		
122		〃 〃		〃	〃	茶褐色粘土上面		
123		〃 〃	外面肩部回転ケズリ	〃	〃	炭化物層		

表XI

通番号	遺物番号	器種	調整技法	切り離し	転用部位	出土遺構・層位	図面番号	備考
124		須恵器蓋	外面肩部回転ケズリ	不明	内面天井部	OH−81 掘り方内		
125		〃 〃	〃 〃	〃	〃	赤褐色砂		
126		〃 〃	〃 〃	〃	〃	赤褐色砂		
127		〃 〃		〃	〃	赤褐色砂質土上層		
128		〃 〃	外面肩部回転ケズリ	〃	〃	黄褐色砂下層		
129		〃 〃	〃 〃	〃	〃	SB588 掘り方内		
130		〃 〃	〃 〃	〃	〃	SI593 埋土		
121		〃 〃	〃 〃	〃	〃	SI593 埋土		
132		〃 〃	〃 〃	〃	〃	黄褐色砂（炭化物層）		
133		〃 〃	〃 〃	〃	〃	炭化物層		
134		〃 〃		〃	〃	SI593 埋土		
135		〃 〃		〃	〃	SI593 埋土		
136		〃 〃		〃	〃	赤褐色砂下		
137		〃 〃	外面肩部回転ケズリ	〃	〃	SD578 埋土		
138		須恵器蓋	〃 〃	〃	〃	赤褐色砂		
139		〃 〃	〃 〃	〃	〃	赤褐色砂		
140		〃 〃	〃 〃	〃	〃	赤褐色砂土上層		
141		〃 〃		〃	〃	SA564 埋土		
142		〃 〃		〃	〃	炭化物層下層		
143		〃 〃	外面肩部回転ケズリ	〃	〃	SI579 埋土		内・外面ベンガラ付着
144		〃 〃		〃	〃	SI593 A掘り方内		ベンガラ用硯
145		〃 〃		〃	〃	SI593 A床面		〃
146		〃 〃	外面肩部回転ケズリ	〃	〃	SI593 埋土		〃
147		〃 〃		〃	〃	SI593 埋土		〃
148		〃 〃		回転ヘラ切り	〃	赤褐色砂		〃
149		〃 〃	外面肩部回転ケズリ	不明	〃	SX582 埋土		〃
150		〃 〃	〃 〃	〃	〃	SI593 A埋土		
151		〃 〃	〃 〃	〃	〃	SD578 埋土		
152		〃 〃		〃	〃	SI593 埋土		
153		〃 〃	外面肩部回転ケズリ	〃	〃	SK584 埋土		
154		〃 〃		〃	〃	褐色砂（最下層）		
155		〃 〃	外面肩部回転ケズリ	〃	〃	SK584 埋土		
156		〃 〃		〃	〃	SI593 埋土		
157		〃 〃		〃	〃	SI579 埋土		
158		〃 〃		〃	〃	SI593 A埋土		
159		〃 〃		〃	〃	赤褐色砂質土		
160		〃 〃		〃	〃	SX582 床面		
161		〃 〃		〃	不明	SI593 埋土		
162		〃 〃		〃	〃	SI579 ベルト内		内面にベンガラ付着
163		〃 〃		〃	〃	赤褐色砂土上		墨付着、擦痕不明
164		〃 〃		〃	〃	赤褐色砂質上		〃 〃

表XII

通番号	遺物番号	器種	調整技法	切り離し	転用部位	出土遺構・層位	図面番号	備考
165		須恵器蓋		不明	不明	赤褐色砂		墨付着、擦痕不明
166		〃 〃		〃	〃	炭化物層		〃 〃
167		〃 〃		〃	〃	SK584 埋土		〃 〃
168		〃 〃		〃	〃	SI593 埋土		〃 〃
169		〃 〃		〃	〃	炭化物層		〃 〃
170		〃 〃		〃	〃	赤褐色砂質土上層		〃 〃
171		〃 〃		〃	〃	SA564 埋土		〃 〃
172		須恵器蓋		〃	〃	SA571 埋土		〃 〃
173		〃 〃		〃	〃	SD578 埋土		〃 〃
174		〃 〃		〃	〃	SD576 埋土		〃 〃
175		〃 〃		〃	〃	赤褐色砂		〃 〃
176		〃 〃		〃	〃	SA568 埋土		〃 〃
177		〃 〃		〃	〃	赤褐色砂質土		〃 〃
178		〃 〃		〃	〃	SI579 埋土		〃 〃
179		〃 〃		〃	〃	SD578 埋土		〃 〃
180	2－322	須恵器甕		〃	体部内面	赤褐色砂	第57図－1	
181	2－326	〃 〃		〃	〃	暗褐色砂層	〃 4	
182		〃 〃		〃	〃	赤褐色砂		
183		〃 〃		〃	〃	SI593 埋土		
184		〃 〃		〃	〃	炭化物層		
185		〃 〃		〃	〃	SX582 床面		
186		〃 〃		〃	〃	SX582 床面		
187		〃 〃		〃	〃	黄褐色砂上層		
188		〃 〃		〃	〃	SI579 埋土		
189		〃 〃		〃	〃	OE－86～9 ベルト内		
190		〃 〃		〃	〃	SX582 床面		
191		〃 〃		〃	〃	赤褐色砂		
192		〃 〃		〃	〃	SK584 埋土		
193		〃 〃		〃	〃	赤褐色砂土		
194		〃 〃		〃	〃	OE－86～9ベルト内		
195		〃 〃		〃	〃	SX582 床面		
196		〃 〃		〃	〃	SI593 A埋土		
197		〃 〃		〃	〃	暗褐色砂直上		
198		〃 〃		〃	〃	赤褐色砂上黄褐色砂	第57図－3	
199	2－325	赤褐色土器甕		〃	〃	SI579 床面	〃 2	
200	2－296	須恵器長頸壺		〃	台部	暗褐色砂層		
201	2－324	須恵器壺		〃	体部内面	SI593 埋土		
202		〃		〃	〃	SI593 埋土		
203	2－159	赤褐色土器杯	底部周縁回転ケズリ	回転糸切り	底部外面	SI593 床面		墨書あり「厨」

転　用　硯

表XIII

器種別	杯類				蓋	甕類		壺	計	備考
出土遺構	須坏	須台付	赤坏	赤台坏	須恵器蓋	須恵器甕	赤褐色土器甕	須恵器壺(長頸壺)		
SA 564	1(べ)				3				4	墨書(蓋1)
SA568					2				2	
SA 571					1				1	
SB 586					2				2	
SB 588					2				2	
SD 576					5				5	
SD 578					4				4	
SI 579	4				8(べ1)		1	1	14	ベンガラ付着(蓋3)
SI 580	1								1	墨書(須坏1)
SI 593	15(べ1)	2			22(べ1)	1		2	42	墨書(須坏2,蓋1)ベンガラ付着(蓋1)
SI593 A	6(べ1)		1		11(べ4)	1			19	墨書(須坏2)
SI593B	1		1	1	2				5	墨書(赤杯1)
SK 584	5				8	1			14	墨書(須坏1、蓋1)
SX 582	4	3(べ1)			3(べ1)	4			14	墨書(須坏1)
その他各層	15(べ1)	6			41(べ1)	12			74	墨書{須坏3 須坏(台)1,蓋1 ベンガラ付着-須坏(台)2・蓋2
計	52(べ4)	11(べ1)	2	1	114(べ8)	19	1	3	203	

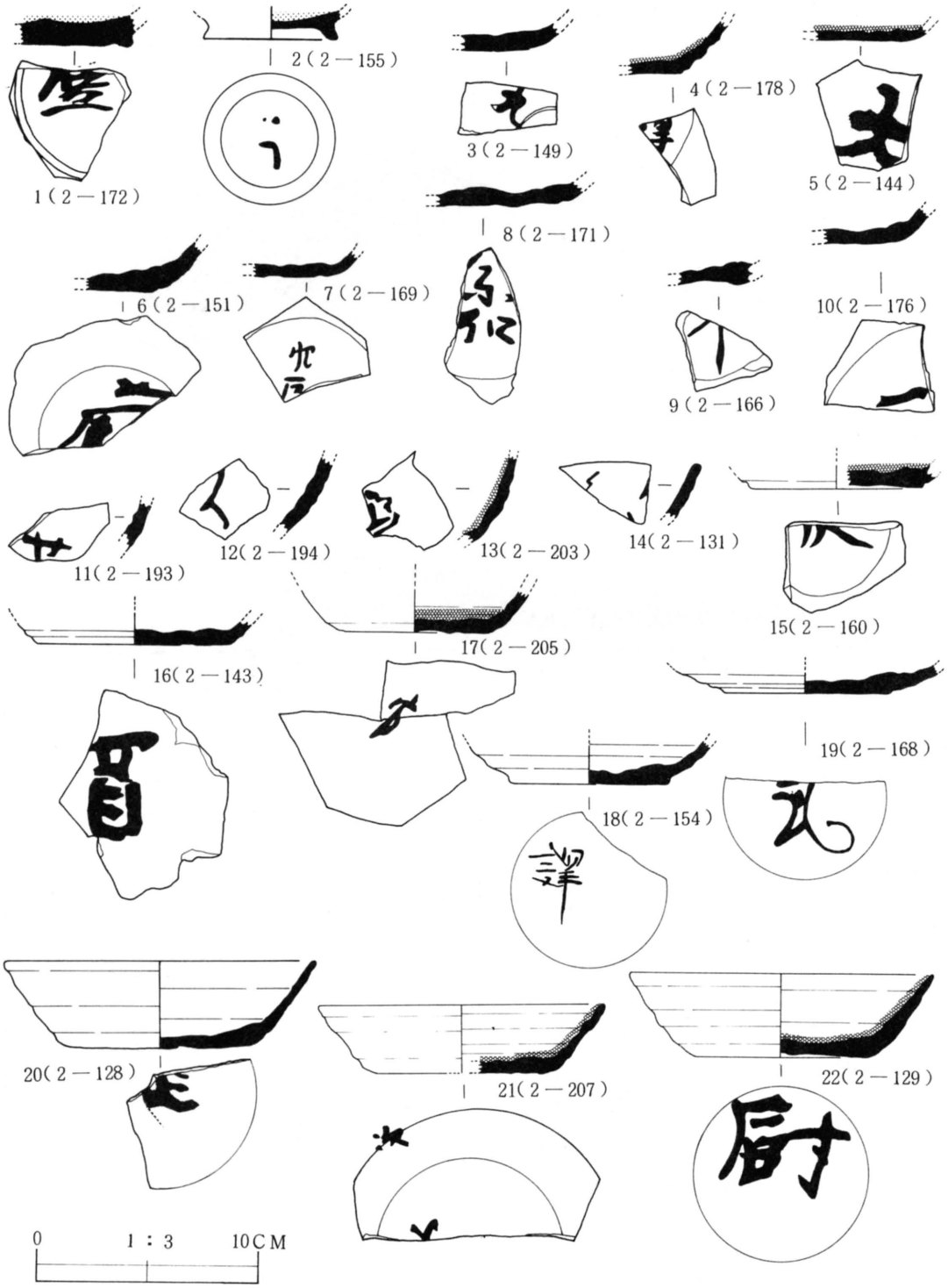
※(べ)：ベンガラ用の硯

表　XIV　第33次調査出土平瓦

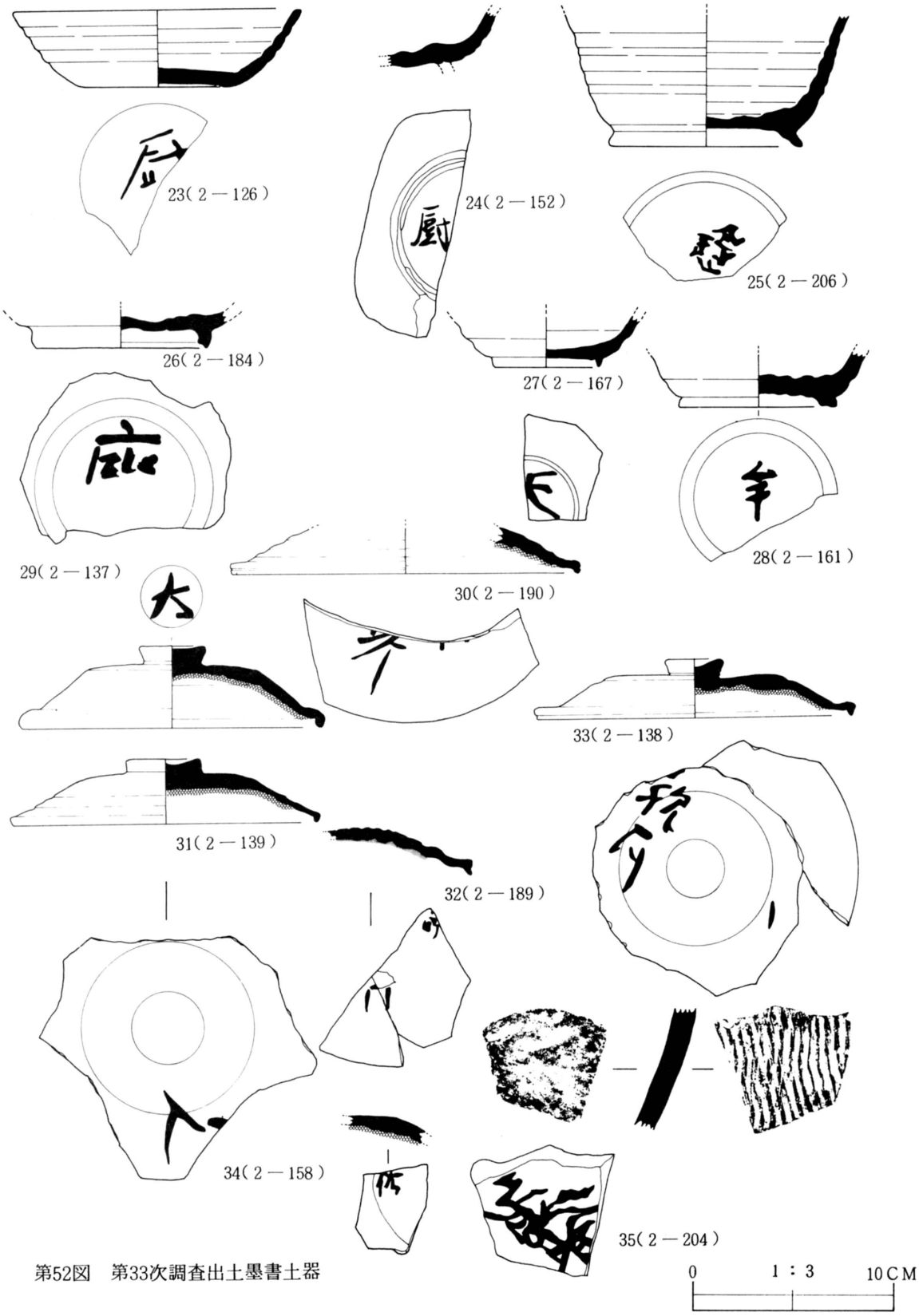
凸面	凹面	端部	端部
縄目叩 r r>L 55 / ℓ ℓ>R 17	布目 全面 6 / 布端 14	凸面 側縁盛り上り 17 / 側縁まで叩き 37	広・狭端部
縄目→スリ消 0	粘土板合わせ目 0	側端面取り	① 0
格子叩 2	模骨痕 3	① 0	② 6
スリ消 0	部分的スリ消し 0	② 19	③ 30
焼成	糸切りの方向	③ 24	④ 35
軟質(黒・白灰色) 37	① 5 / ② 28 / ③ 0 / ④ 4 / ⑤ 11 / ⑥ 0	④ 33	
硬質 32		⑤ 0	

転用硯（図面番号は転用硯一覧表参照）

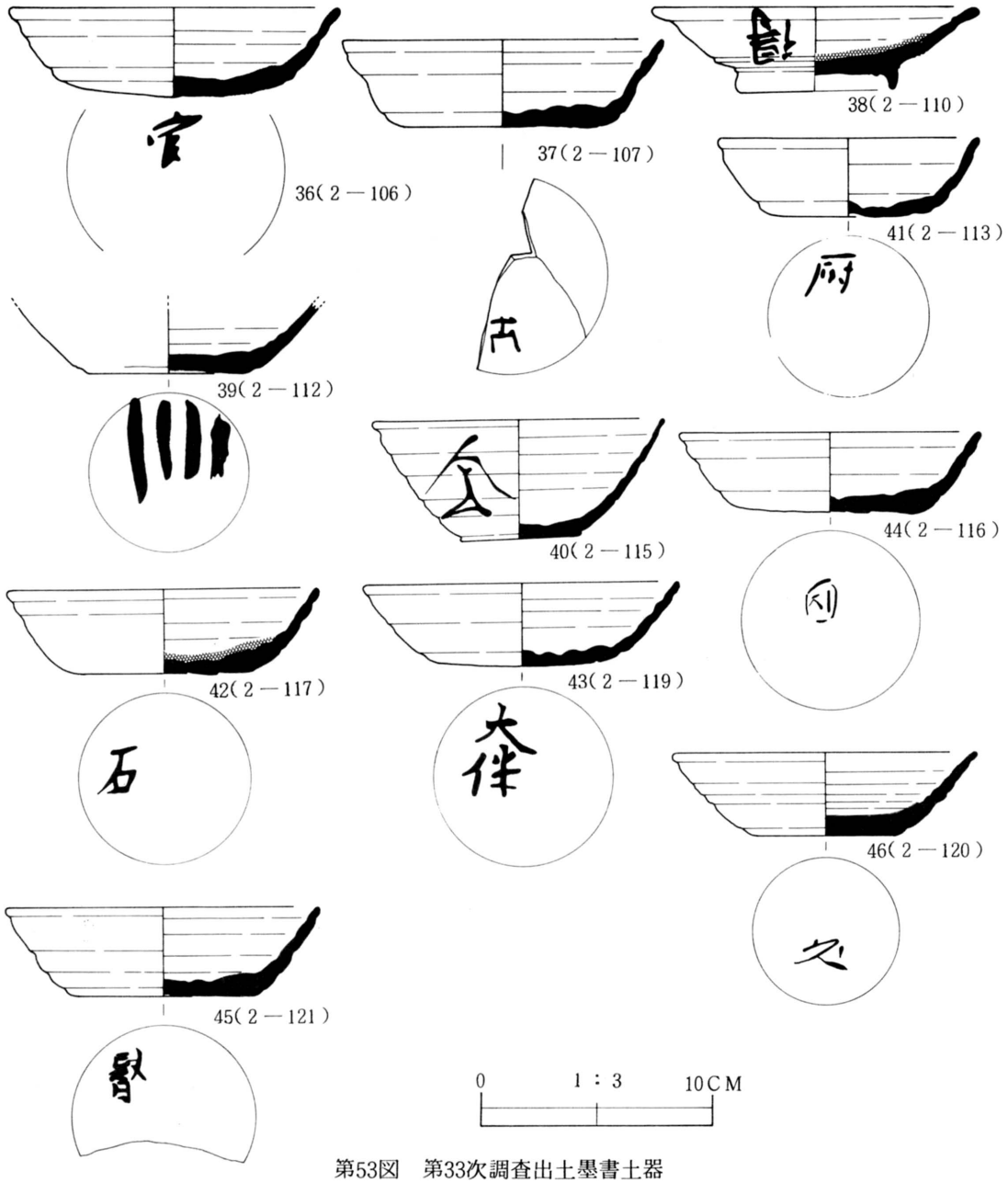
転用硯をみると須恵器蓋が最も多く，出土総数の半数以上を占めている。転用部位については，ほとんど内面に限られるが，台付坏に関しては内面，内面と台部の両面，台部の三種類に分けられる。使用痕（擦痕）は，明瞭なもの不明瞭なものがあり，また擦痕の認められない須恵器坏もあっ



第51図　第33次調査出土墨書土器



第52図　第33次調査出土墨書土器

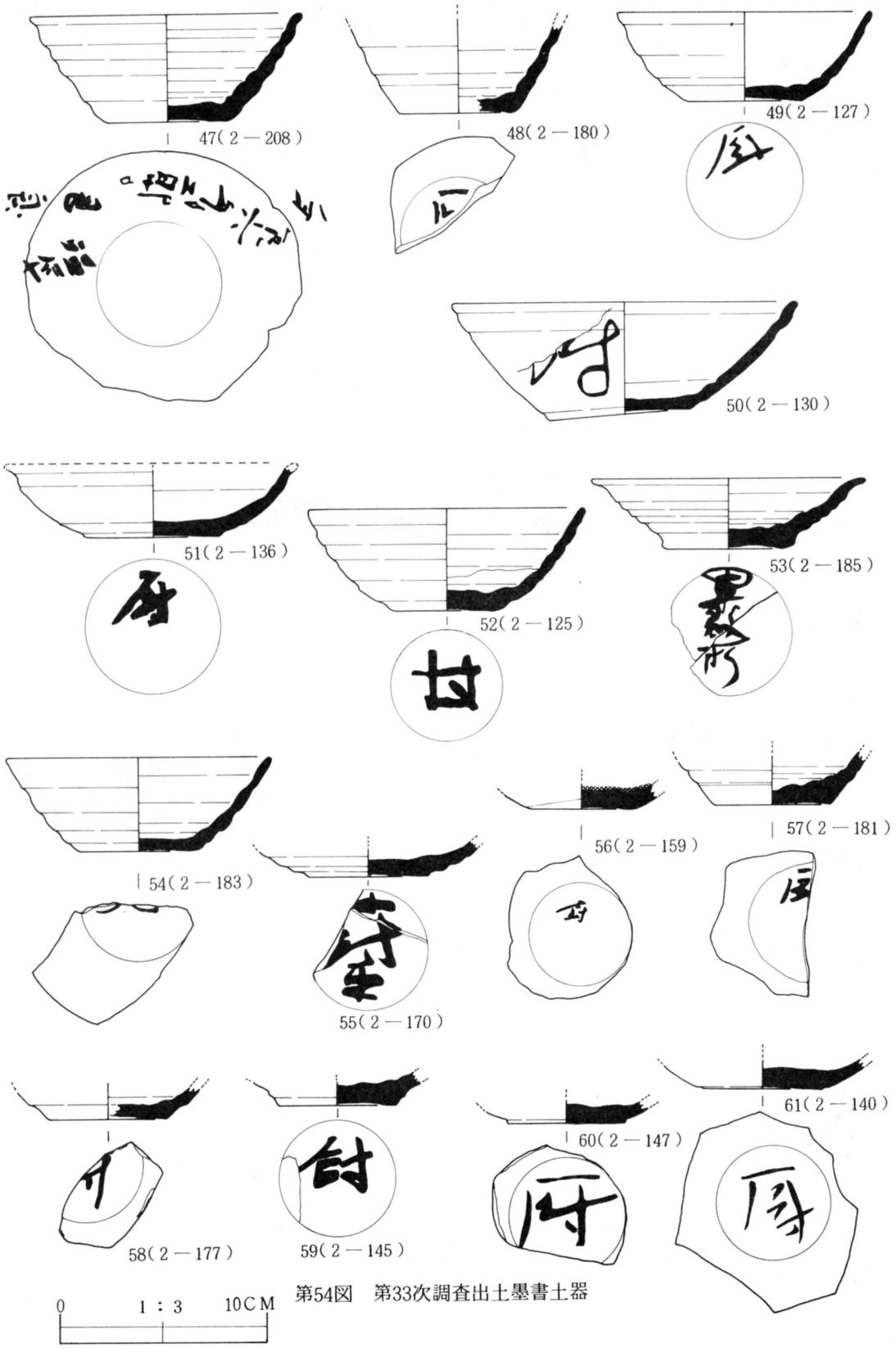


第53図　第33次調査出土墨書土器

た。内面に墨が付着していることから墨ツボとして使用されたと思われる。

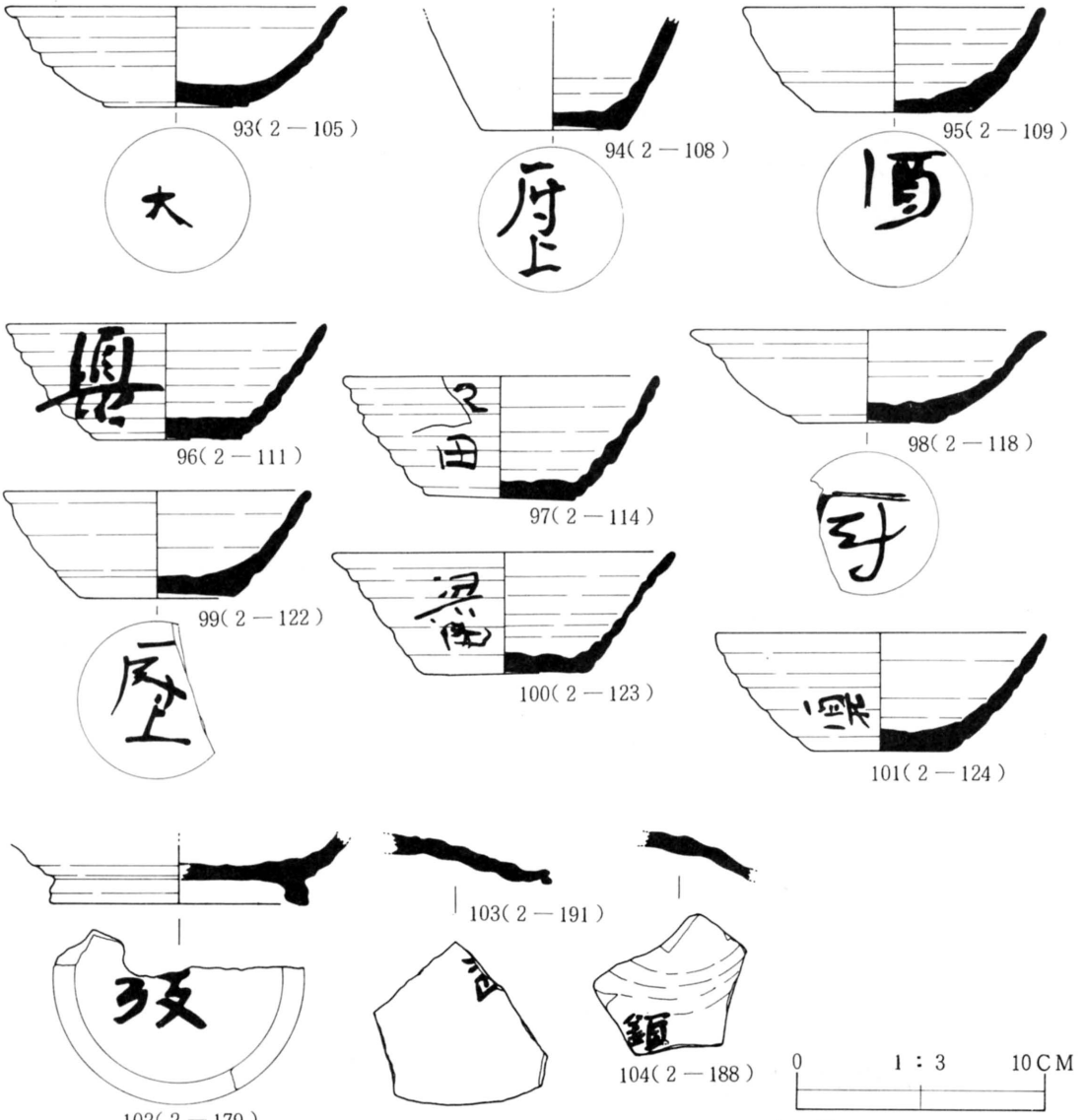
ベンガラ用の硯に転用した土器も13点みられた。また墨とベンガラの両方付着している土器もあり，墨，ベンガラ両用の硯に使用したものと思われる。

出土地点をみていくと墨書土器同様，ＳＩ 593 住居跡周辺と東方建物跡周辺に最も多く出土していることがわかる。



第54図　第33次調査出土墨書土器

第55図　第33次調査出土墨書土器



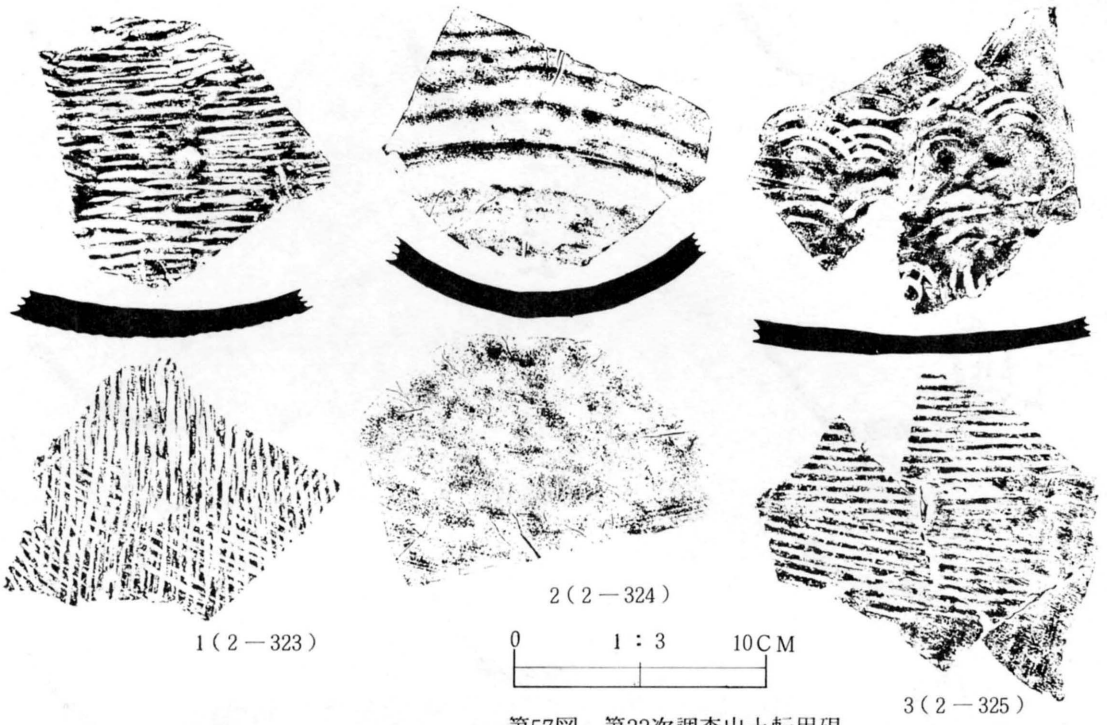
第56図　第33次調査出土墨書土器

5）第33次調査出土瓦（第58図，図版42）

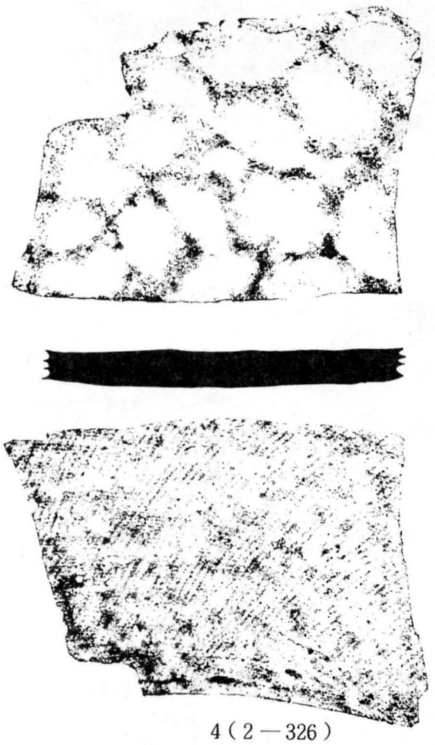
今次の調査においては多量の瓦が検出されたが，いずれも破片である。復元した瓦を含めて，平瓦，丸瓦，のし瓦について観察を行った。

平瓦

復元したものを含めて，広・狭端部のいずれかが残存しているもの59点について表XⅣのように観察を行った。凸面の縄目叩きの縄文原体についてはL $\left\{ \begin{matrix} r \\ r \end{matrix} \right.$ が大部分を占め，R $\left\{ \begin{matrix} \ell \\ \ell \end{matrix} \right.$ は約 ⅓ を占めるに過ぎない。縄目のスリ消しを施しているものはない。凹面においては，一枚作りの特徴である布目端が顕著にみられるもの14点，また桶巻き作りの特徴と考えられる全体に布目がみられるもの６点であるが，瓦によって側縁部の面取り時において整形しているものが多くを占め観察不可能



第57図　第33次調査出土転用硯



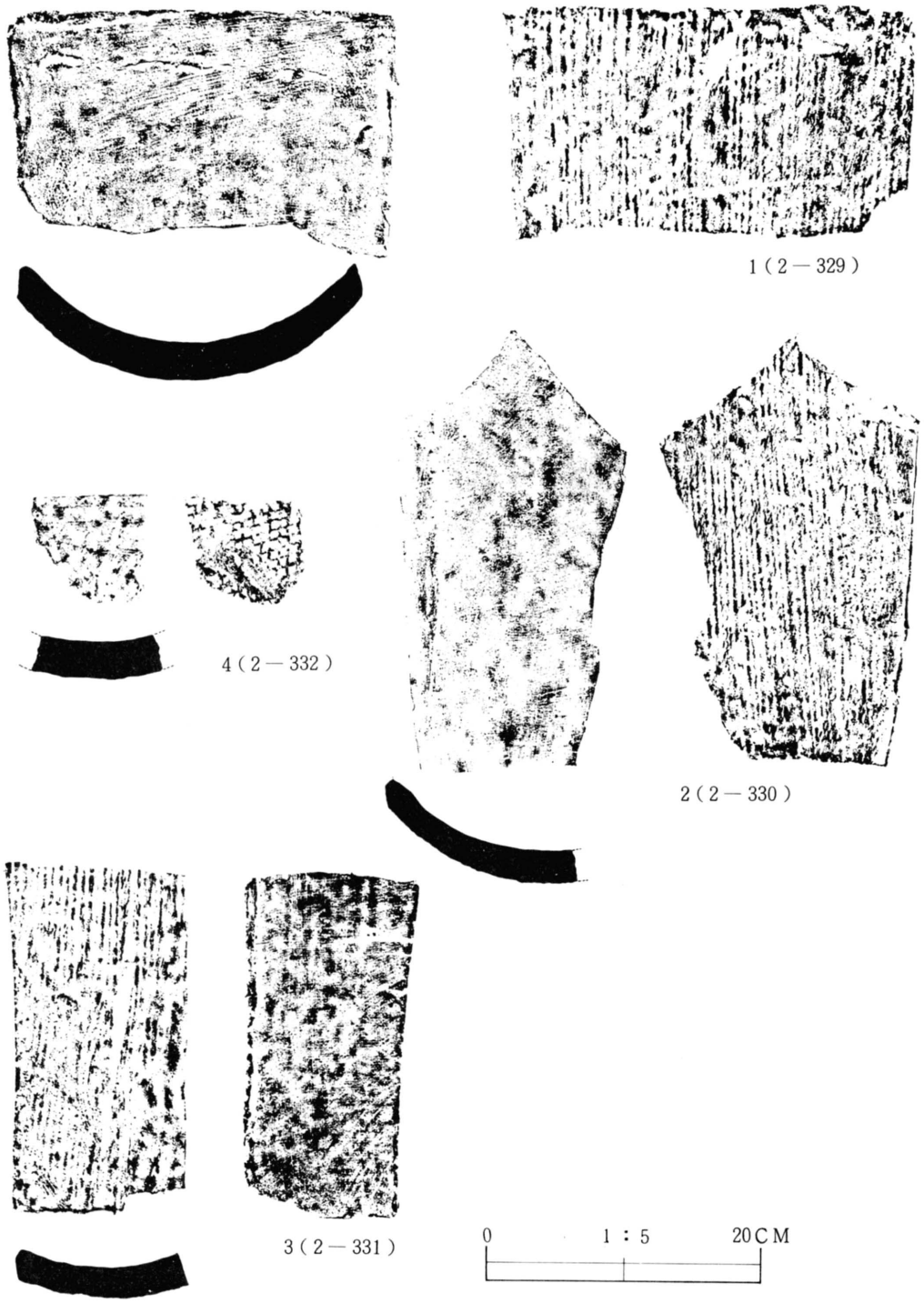
であった。また桶巻き作りの痕跡である模骨痕のある瓦は少く，板痕跡が明瞭に一直線には認められない。一方糸切りの方向については表XⅣのように広端部を上にした場合，左下隅から糸が入るものが大部分を占め，左上隅から糸が入るものが次に多い。この両者に関しての相違は調整技法からは認められない。側縁面取り技法は，表XⅣの②，③，④に集中し，広・狭端部の面取り技法は③，④に集中している。焼成は硬質，軟質ともに数量的には類似している。軟質のものは灰白色が大部分である。

丸瓦

丸瓦は無段（行基），有段（玉縁付）両者がみられるが，いずれも小破片である。縄目のスリ消しはほぼ全面に行われているが，縄目がすべて消えるほど深くまでは行っていない。分割は内側に分割線を有し，その深さは5㎜～7㎜である。焼成は大部分が黒色，あるいは灰白色の軟質である。

のし瓦

のし瓦は7点（広・狭端部，および側縁の残存する瓦）出土している。凸面の縄目叩における縄



第58図　第33次調査出土瓦

文原体はL$\left\{\begin{matrix}r\\r\end{matrix}\right.$がほとんどである。凹面における糸切りの方向は，広端を上にした場合，左下隅から右上隅へかけて糸が入るものがほとんどであり，反対に右上隅から左下隅へかけて糸が入るものはきわめて少ない。側縁の分割はすべて瓦の弧に対して直角に行っており，分割痕が側縁上部に1㎝～1.5㎝残存するもの，分割痕が残存していないもの，両者がみられる。前者は平瓦成作過程において、あらかじめ分割線を入れて，焼成後に分割したものと考えられる。一方，後者は平瓦成作過程において焼成以前に分割し，その後焼成したものと考えられる。

格子目瓦

格子目瓦の出土はきわめて少ない。格子目は比較的細かく，叩き板の幅は約5㎝と考えられる。いずれも焼成はやや軟質で，黄白橙色を呈している。

6）ま と め

第33次調査は内城地区の東辺区画遺構（築地，土塁，柱列，溝等）および東辺建物（脇殿）の検出を目的として実施したものである。

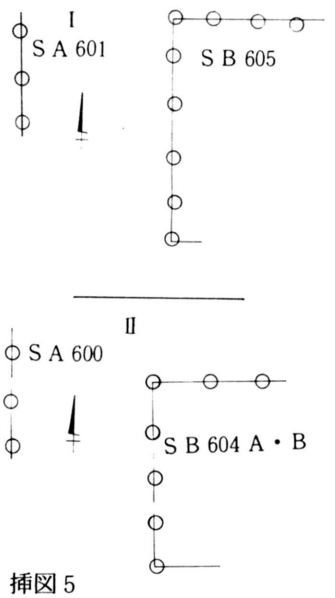
その結果建物跡，一本柱列，鍛冶工房，土壙，溝，住居跡等の遺構が重複して検出され，しかもこれらの遺構群は上層，下層に大別することが可能である。

上・下層に大別した根拠は，北東地区検出の建物群が整地層を挟んで構築されていることによるもので，他の地区についてもその延長層序を基本として分類した。また発見遺構は下層を建物中心にⅡ期に，上層は一本柱列を中心にⅢ期に分類し，Ⅰ期からⅤ期まで設定した（挿図5，6）。

上層で検出された遺構には一本柱列，建物，溝，土壙，竪穴住居跡があるが，これらの遺構は前述した整地層の上層とほぼ同層位，同レベルから掘り込まれているものである。

東西・南北に延びる一本柱列は，区画を意図したもので，Ⅲ期の重複が認められる。すなわち，古い方からＳＡ570がⅢ期，ＳＡ569・571がⅣ期，ＳＡ564～7がⅤ期である。ただし，Ⅲ期とⅣ期については国営調査の段階で上層部が除去されており明確さを欠く。今後西部地区の調査時に再度検討したい。またＳＡ568はⅤ期かあるいはさらに新しい時期が考えられるが，ここでは保留にした。

柱列線上に位置するＳＢ587は櫓か門と考えられる。後者の場合，桁行中央柱間が他と比し狭いという懸念はあるが，柱列の布掘りが建物の部分で消滅することから考えると常用ではないにしても門的性格を強調したい。ただ位置的に，南北柱列南端からわずか12m強であることを考慮するならば，南辺中央部の門というよりは南辺西門とするのが妥当であろう。他にＳＸ582・ＳＢ586そして最下層でＳＩ593Ａ，Ｂ（鍛冶工房跡）がほぼ同位置で重複して検出された。炉跡，



挿図5

羽口および鉄滓が伴って検出されたのはSI593Bのみであるが，各遺構埋土内や周囲から多くの炭化物，鉄滓，羽口等が出土することから，いずれも鍛冶工房か類似遺構と考えられる。

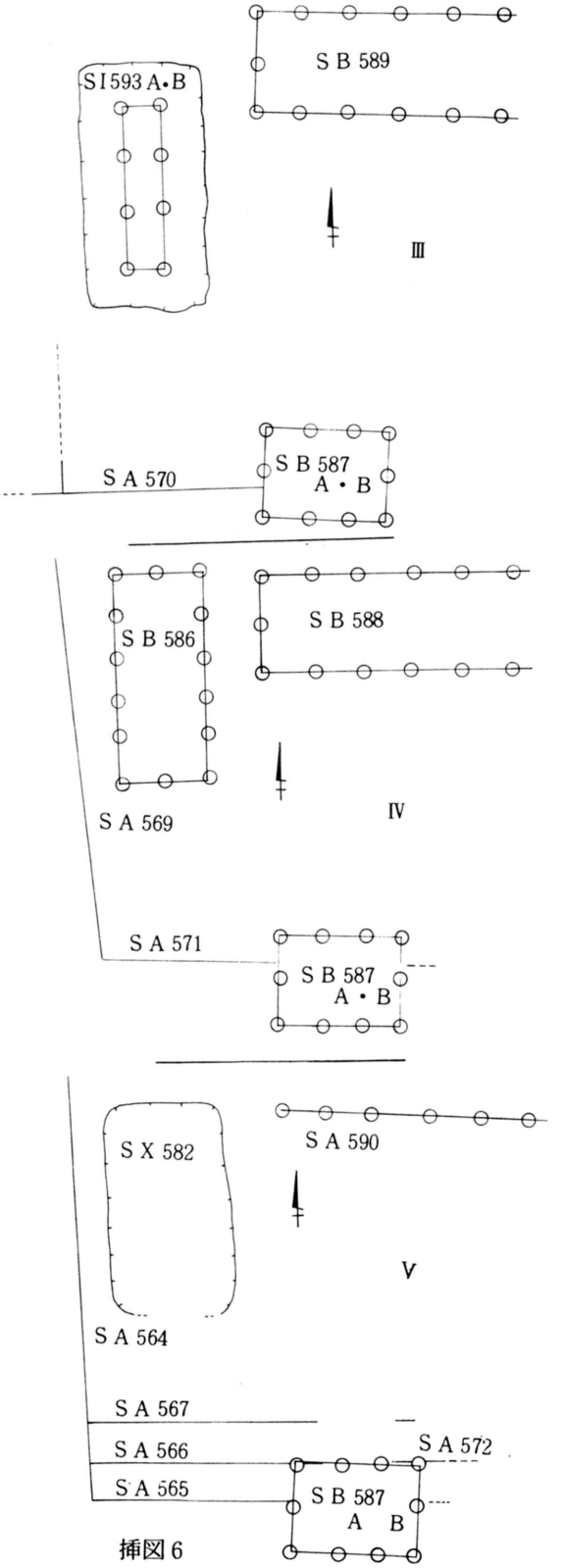
これらの各遺構を時期別にみると次の如くである。

Ⅲ期はＳＡ570，ＳＢ587Ａ・Ｂ，ＳＢ589，ＳＩ593Ａ・Ｂである。ＳＩ593Ａ・Ｂである。ＳＡ570南北柱列はＳＡ564と重複しているものと考えられる。ただし断面および平面では認めることができなかった。

Ⅳ期はＳＡ569・571，ＳＢ587・Ａ・Ｂ，ＳＢ586，ＳＢ588である。ＳＡ569は北で西にやや振れる。Ⅲ期では竪穴であったＳＩ593が掘立柱に移行するが，東側の土層堆積状況から判断して竪穴状である可能性を否定できない。

Ⅴ期はＳＡ564～7，ＳＢ587Ａ・Ｂ，ＳＸ582，ＳＡ590である。ＳＡ564はほぼ真北を指し，南辺柱列は三重になる。ＳＸ582は炭化物面を床面として把握したが，北，東側の堆積状況から竪穴状を呈しているものと考えられる。ＳＡ590は柱列として把握した。しかしSB589北側柱を切っている掘り方と組み，２間×５間の建物の可能性も考えられるが，埋土が若干異なる。ＳＢ587Ａ・Ｂは平面では最低二時期の重複が認められるが，一本柱列はいずれもＳＢ587に取り付くことからⅢ期～Ⅴ期までは，同位置に営まれたものと考えられる。ただこれらの分類はプライマリーな層序において検出された遺構と異なり，厳密な意味においては今後の調査結果を踏まえて検討したい。

下層遺構は建物，一本柱列，土壙跡である。上層遺構群との大きな相異は遺構検出量の極端



挿図6

な減少において認められる。

ここではⅡ期に大別できる。

Ⅰ期としたものは建物規模において問題はあるが，地山飛砂層で検出されたSB605・SA601である。

Ⅱ期はⅠ期の建物，柱列を切るＳＢ604Ａ・Ｂ，ＳＡ600である。ＳＫ598は切り合い関係からⅡ期に比定できよう。

このようにみてくると，上・下層の遺構配置，性格はかなり異なる様相を呈している。すなわち，下層遺構は数量的には少ないが，大規模な建物が整然とした形で配置されているという点においては，当初調査の主目的とした内城東辺建物という条件を満たしていると考えられる。

一方上層遺構は，一本柱列という区画施設は有するものの，その内部に工房跡，住居跡等を取り込む状況は，これまでの古代東北城柵の内城域においては異例と言える遺構配置を示す。しかし，このような上・下層における大規模な遺構変化は何に起因するものか現段階では考察し難い。

さてここで上・下層遺構の年代に若干ふれておきたい。

主な遺物は土師器，須恵器，赤褐色土器，瓦で，その量は上層が圧倒的多数を占めるが，絶対年代に比定できる資料は出土していない。

上層遺構出土の大部分は，いわゆる赤褐色土器坏，皿類で，ほんの数点を除けば残りすべてが回転糸切りで切り離し，二次調整をまったく加えないものである。またⅢ期～Ⅴ期の遺構から出土した土器の時期差は，形態，技法上から識別し得える特徴は見い出せない。これらのことから現段階では，９世紀末，10世紀初頭～11世紀代を考えたい。

下層遺構ではⅡ期のＳＢ604Ａ掘り方から須恵器，瓦片と共に赤褐色土器体部片が出土することから９世紀中は遡らないと考えられる。またⅠ期のＳＢ605の上限については不明であるが，下限は検出層位等からＳＢ604Ｂと大差ない時期と考えられる。

以上，時期別に遺構を概観したが，整地を基本とした上層・下層という分類は，層位的，遺構の数量，配置そして遺物量等の点においては妥当と考えられる。しかし遺跡としては，Ⅰ期～Ⅴ期まで間隙なく断続していたものと考えられる。

Ⅳ 第34次発掘調査

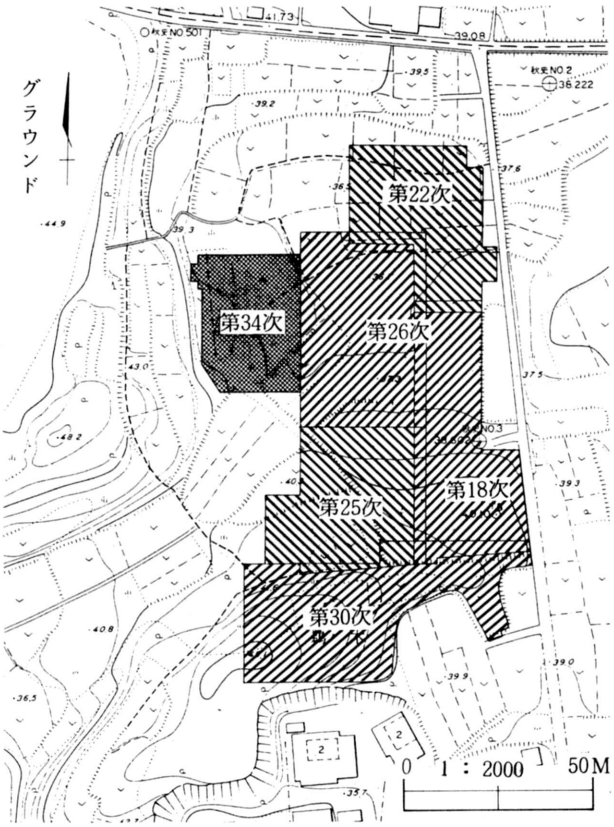
1）調査経過

第34次発掘調査は寺内字鵜ノ木地区を対象に９月26日から12月12日までの期間で実施し，発掘調査面積は864㎡（約262坪）である。

調査地の鵜ノ木地区は，すでに，国営調査，第18・22・25・26・30次の各調査によって，広範囲にわたり調査が終了しており，計画的に配置されたと考えられる数時期に及ぶ壮大な掘立柱建物群を検出している。また，これに伴う井戸跡からは天平６年，勝宝４年，同５年の紀年のある木簡が

出土し，内容的にも調米の付札，「文選」の習書，解の文書など建物群の性格を解明する重要な資料となるものがある。

この建物群，井戸跡の北にはＳＧ463湿地と呼称した泥炭の堆積する湿地を検出している。湿地は縄文中期後半頃から弥生期にかけて形成された泥炭層が堆積し，最上層と最下層のＣ－14年代測定は1780±100，3610±130年Ｂ。Ｐ．である。古代にも湿地として建物群の北にあったものと考えられ，平安時代後半期と中世以降のⅡ時期に湿地の東，南縁部を整地している。整地後は小規模な柱掘り方をもつ掘立柱建物，井戸，溝を営んでいることが判明している。



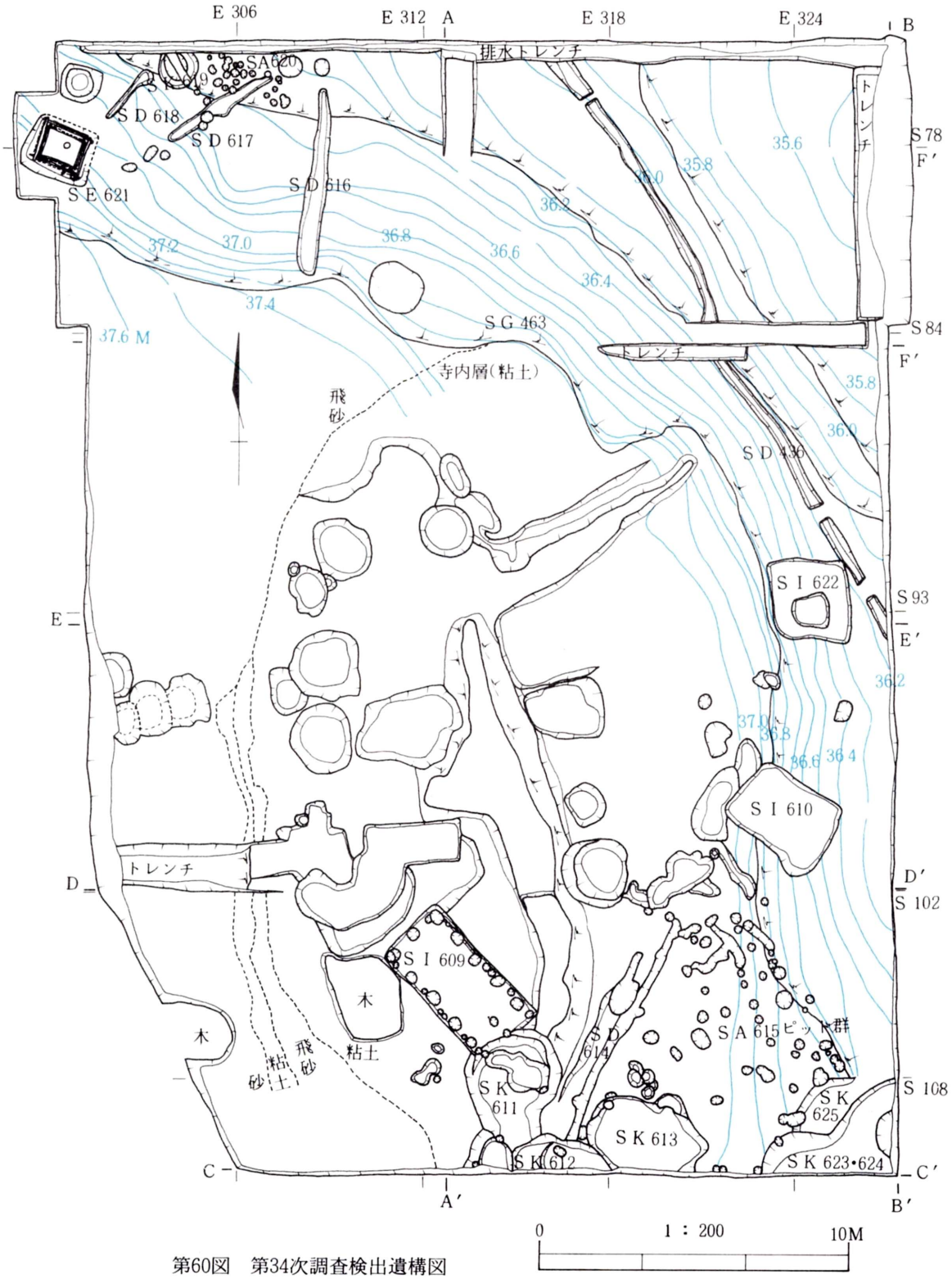
第59図　第34次調査周辺地形図

以上の既調査の結果から，本次の調査は①壮大な掘立柱建物群に伴う遺構の広がりの追求，②ＳＧ463湿地，およびその整地の範囲の確認と整地に伴う遺構の追求を目的に実施した。

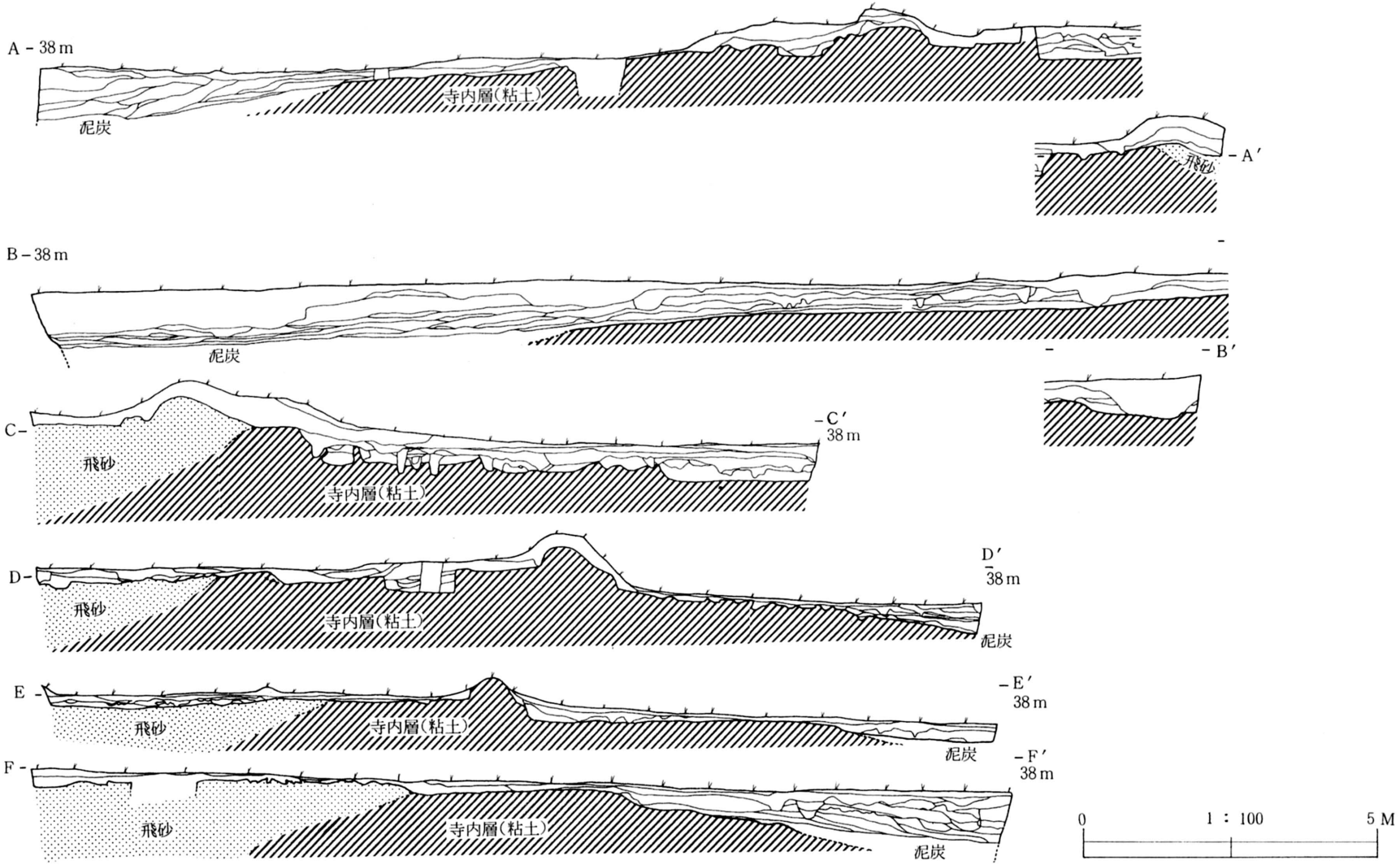
調査は下刈り，表土の排土に並行して基準杭（Ｘ＝332,242ｍ，Ｙ＝－80,963ｍ，Ｈ＝37,299ｍ）を設定した（10月１日）。表土は近年までの耕作土で，これを除去すると，北西部では黄褐色砂，北東部では黒色砂となる。調査予定区域全体の表土を除去した段階では，北西から南西区域にかけて黄褐色砂，中央区域で基盤の寺内層（粘土・シルト層），北東から南東区域では黒色砂と赤褐色砂質土が現れた。当初，ＳＧ463湿地は黒色砂と赤褐色砂質土の堆積する範囲と考えられたが，後日，北区域の黄褐色砂は古代以前の飛砂と区別されることが判明し，湿地の範囲はさらに広がっていた。表土を排土した段階で明らかになった事項としては他に，本調査地西区域が古代以前の飛砂の東限に当たること，調査区の南区域中央に認められていた土手状の高まりは畑地造成の際の削り残しによるもので，この土手状の高まりの周縁は１ｍ以上削平されていることなどがある（12日）。

調査予定地の中央区域が著しい攪乱をうけているため，調査区をさらに南に拡張した後に，精査を開始していった。

まず，北東区域でＳＧ463湿地に堆積した黒色砂面にて，すでに第26次調査で検出していたＳＤ436溝の西の延長を確認した（23日）。また，南区域中央の寺内層（粘土・シルト層）の削り残された高まり部でＳＩ609竪穴遺構，その南でＳＫ611～613土取り穴を検出した（11月２日）。



第60図　第34次調査検出遺構図



第61図　第34次調査土層断面図

一方，ＳＧ463湿地の調査も並行して実施し，ＳＤ436溝，黒色砂，赤褐色砂の堆積範囲の図化などを行った。終了後，黒色砂の除去にはいり，その下層に灰白色砂，黄褐色砂の堆積を確認した。両層は塼・瓦・赤褐色土器など遺物を含み，古代以前の黄褐色の飛砂と区別された（17日）。この灰白色砂，黄褐色砂はＳＧ463湿地の西縁から流入した状態で堆積し，湿地中央まではいたっていない。

東区域中央から南部にかけて認められた赤褐色砂質土は土層観察では黒色砂の下層，灰白色砂・黄褐色砂上層に位置するものと判断された。ＳＩ662竪穴遺構，ＳＫ623～625土取り穴はこの赤褐色砂質土に覆われており，湿地の窪地とともに整地されたものと考えられた（25日）。

赤褐色砂質土，黄褐色砂面にての溝，ピット群の精査，実測後，同層の残る状態で写真撮影を行い（28日），終了した段階で，両層を除去し，下層面を現していった（12月１日）。灰白色砂を除去した段階でＳＥ621井戸跡を検出したが，井戸跡の西半分は発掘区外にあり，発掘区を拡張し，精査した（10日）。

発掘区全体が古代以前の飛砂層，寺内層（基盤粘土層），湿地の泥炭層面となり，さらに下層には古代の遺構のあることが考えられないため，全体写真，平面実測を行い調査を終了した（11日）。

２）検出遺構と出土遺物

検出遺構としては井戸跡１，溝５，竪穴遺構３，土取り穴，ピット群がある。又，遺構ではないが自然地形としての湿地，および，その整地層があるが，ここにまとめた。

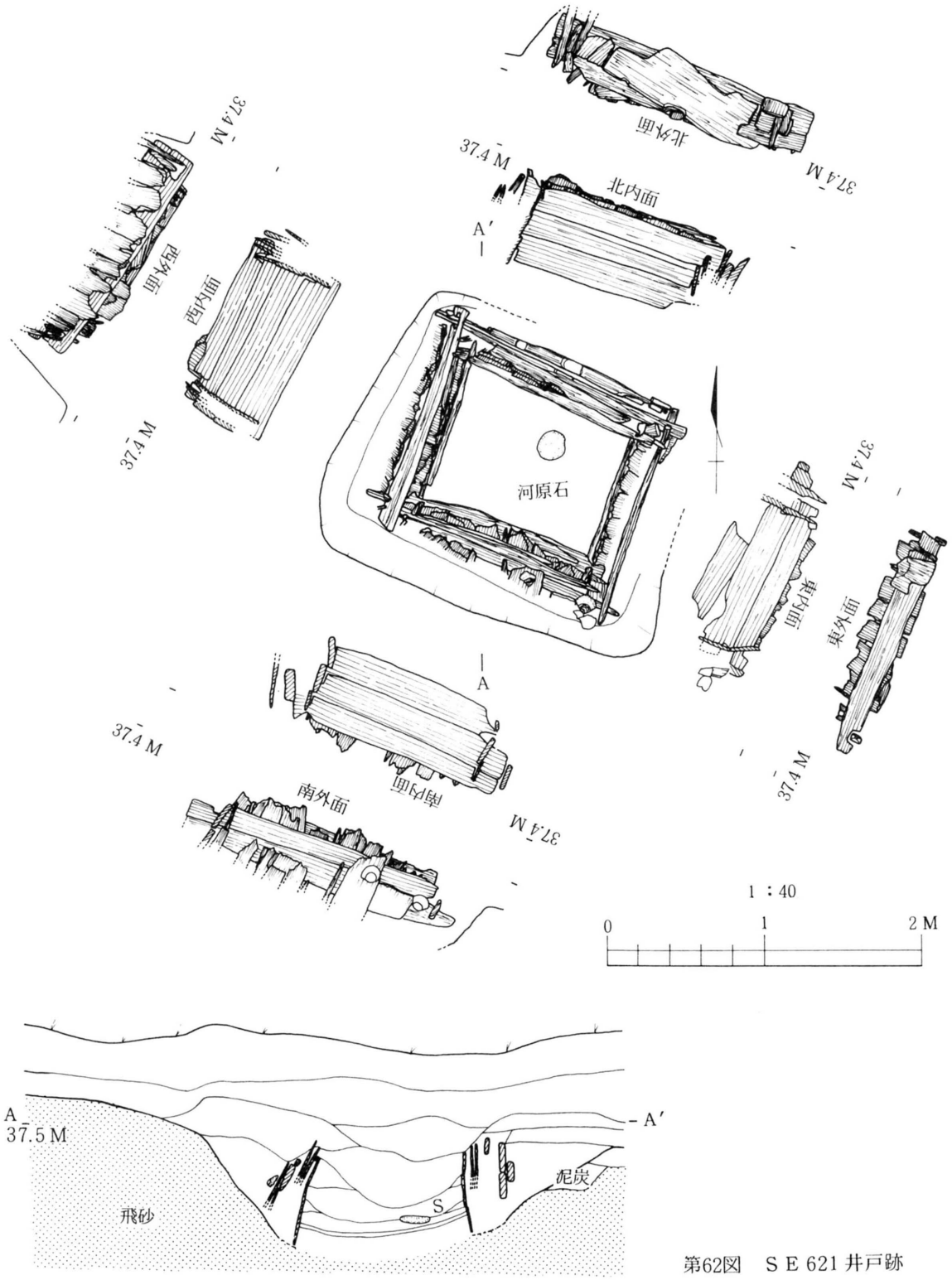
ＳＥ621井戸跡（第62図，図版17，18，19）

古代以前の飛砂，ＳＧ463湿地に堆積した黄褐色砂を掘り込んで構築している。井側板材の南半分は灰白色砂に覆われていた。

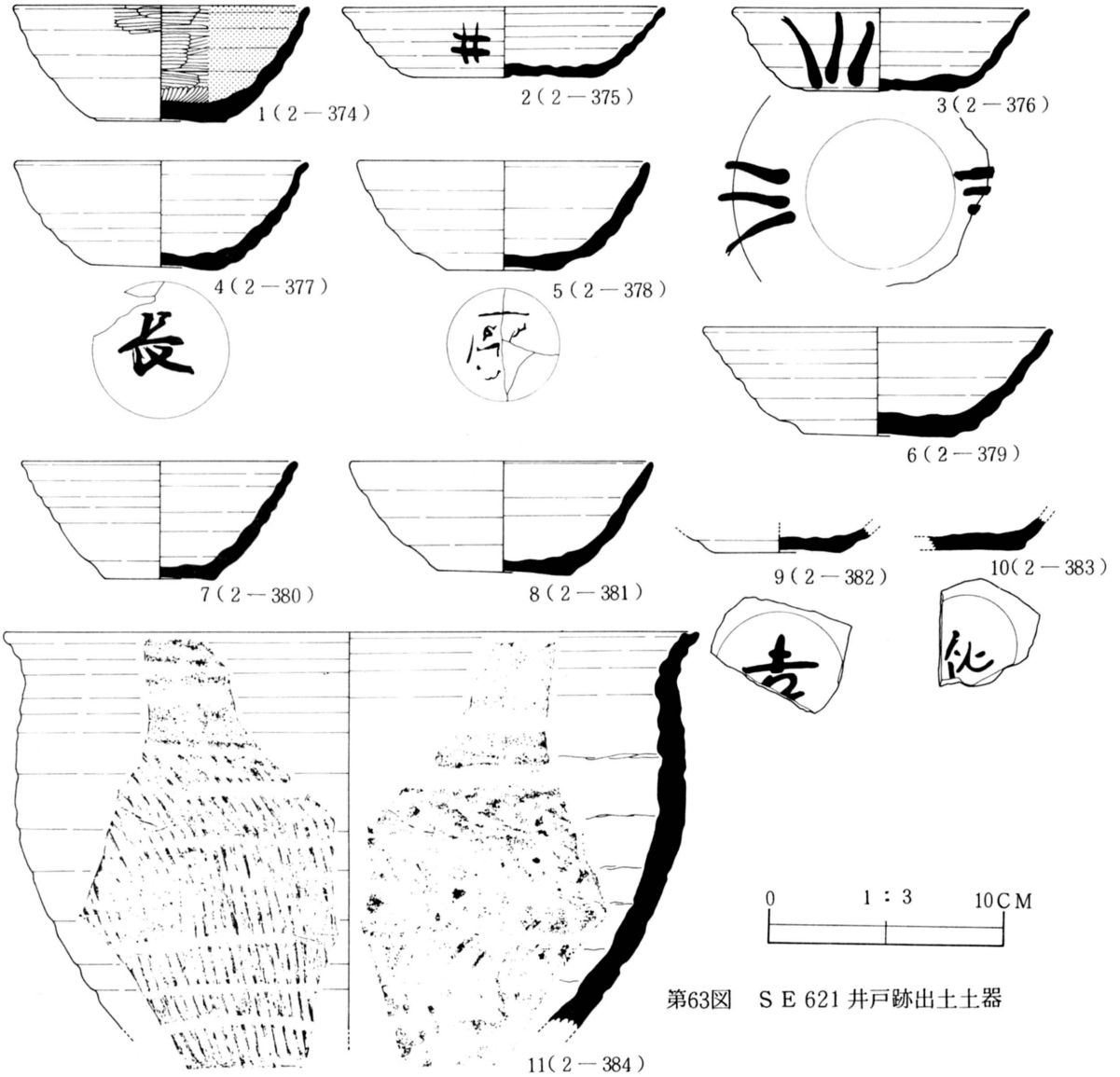
井側は基本的には四重の構造からなっていた。最も内側は３～４段の横板材で井籠組にし，その外に隙間なく縦板を二重，三重に立て並べていた。さらに，２段の横板材で井籠組し，その外には再び南・西辺では縦板材，北辺では横板材をあわせ並べている。内・外の井籠組の横板材の四隅の合わせ目には厚手の板材を杭として打ち込み横板材を固定している。

本来の湧水を溜める井側としての機能は内側の井籠組，縦板材にあったものと考えられ，外の２段の横板材と縦板材はこれを補強する機能をもつものであろう。

各部材の寸法は内側の井籠組の横板が幅20㎝，厚さ0.5㎝～１㎝，長さが，南・北辺が1.3ｍ，東・西辺が1.1ｍである。外側の井籠組の横板は幅15㎝～20㎝，厚さ３㎝～５㎝，長さが南・北辺で1.8ｍ，東・西辺で1.5ｍである。縦板材は長さが不明であるが残存している最も長いもので50㎝，厚さは0.5㎝～１㎝，幅は10㎝～20㎝である。なお，北の外の井籠組とその外の横板材にはくり込みが認められ，転用材と考えられた。埋土には泥炭層にみられる有機質に富んだ堆積物が充塡し，底面よりやや浮いた状態で河原石が出土した。



第62図　ＳＥ 621 井戸跡



第63図　ＳＥ621井戸跡出土土器

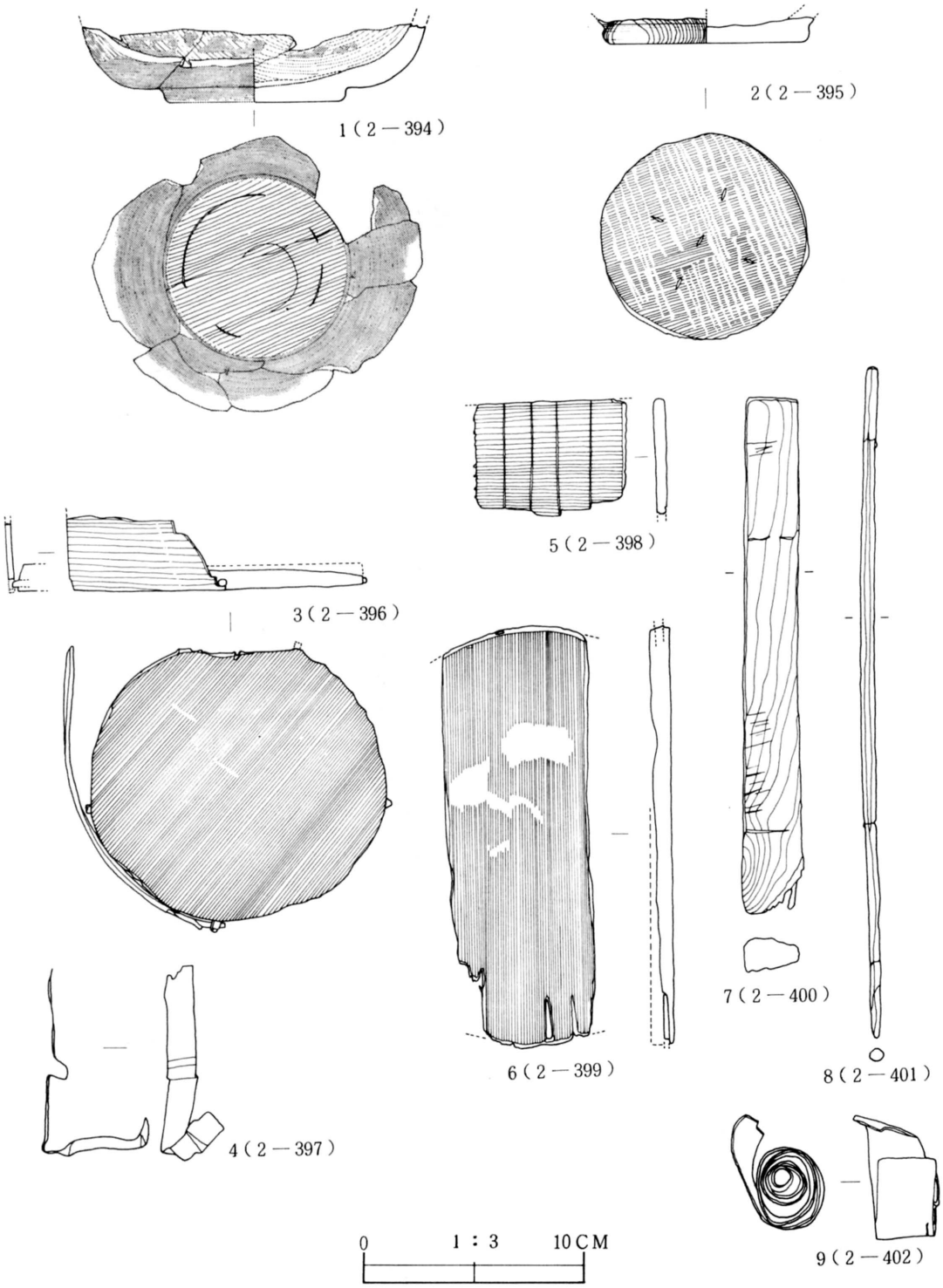
ＳＥ621井戸跡出土遺物（第63図，図版43）

７は井側内埋土からの出土で，他はすべて井側の埋設の掘り方内埋土（裏込め）からの出土である。

土師器：１は回転糸切りで調整のない内面黒色処理の坏で，ミガキは外面口縁下まで行われ，内面のミガキは体部で横位，底部は放射状である。

須恵器：２，３は回転ヘラ切りで調整のない坏である。いずれも体部外面に墨書があり，３は相対する２ケ所に認められる。２は「井」，３は「川」と判読される。

11は器高より口径の大きい鉢と考えられ，外面は条線上の平行叩きを行い，その後，回転を利用して棒状工具で凹線を引いている。内面は同心円状の当て具痕である。器面には巻き上げ（輪積み）



第64図　ＳＥ621井戸跡，ＳＧ463温地泥炭面出土木製品

痕が明瞭に残る。

赤褐色土器：4～10はいずれも回転糸切りで調整のない坏である。4，5，9，10は底部外面に墨書が認められ，4は「長」，5は「厨」，9は「吉」と判読され，10は不明である。

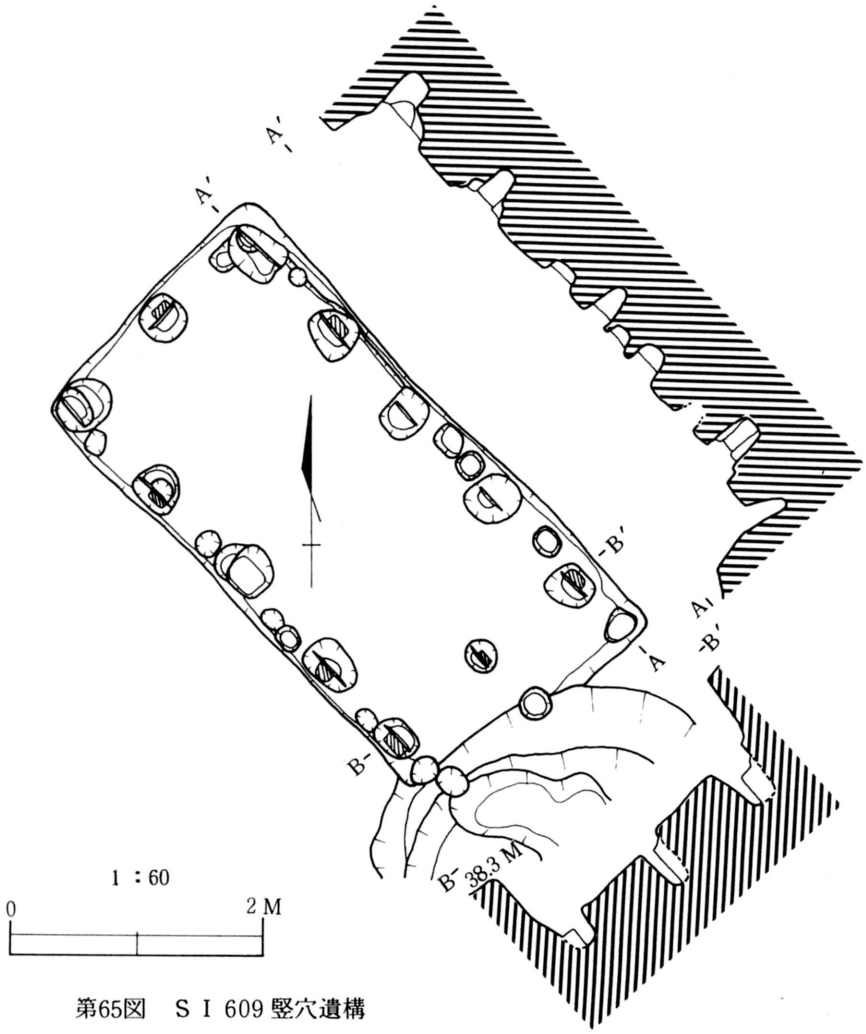
ＳＥ621井戸跡出土木製品（第64図，図版45）

いずれも井側内埋土の出土である。

2は挽物の椀で，底部外面にロクロの爪跡が残る。器面は著しく腐蝕し，漆が塗布されたものか不明である。3～6は曲物，あるいはその一部で，3は柾目板の底板で4ケ所に木釘が残っており，4の樺皮が付いていた。6も柾目板の曲物底板で2ケ所に木釘が残っている。7は棒状，8は串状の木製品である。

ＳＩ609竪穴遺構（第65図，図版20）

約2.4 m×4.8 mの長方形の平面形で，基盤の寺内層（粘土層）を約50㎝掘り込んでいる。長辺



第65図　ＳＩ609竪穴遺構

である東壁は北で45°西に偏している。床面には各壁の直下に柱穴が認められ，直径約40㎝の円形の掘り方の主柱穴が2間（1.1 m＋0.9 m）×4間（1 m＋1 m＋1 m＋0.9 m）に配され，さらに主柱穴間に直径20㎝の添柱が対称位置に配されている。柱痕跡は方形で1辺15㎝～20㎝である。床面には焼土・炭化物がまったく認められず，カマドの付設などもないことから居住性の薄い遺構と考えられた。埋土は後述するＳＩ610竪穴遺構と類似し，ＳＫ611土取り穴埋土を切っていることから，中世以降，あるいは室町時代以降の時期が考えられる。ちなみにＳＩ611竪穴遺構埋土からは古瀬戸片，ＳＫ611土取り穴からは調整のない赤褐色土器が出土している。

ＳＩ610竪穴遺構（第60図）

約2.2 m×3.3 mの長方形の平面形でＳＧ463湿地整地層の赤褐色砂質土を切って，掘り込んでおり，粘土・シルト層までいたる。深さは約40㎝～50㎝で，北壁が東で35°南に振れている。カマド，柱穴は認められない。埋土はＳＩ609竪穴遺構に類似し，一時に粘土を埋めこんでいる。

ＳＩ610竪穴遺構出土遺物（第68図，図版43）

1は埋土から出土した古瀬戸壺の破片で，肩部に4条の沈線がめぐる。

ＳＩ622竪穴遺構（第66図，図版20）

赤褐色砂質土の整地層を除去した段階で検出した。南北約2.5 m×東西約2.5 mの方形でＳＧ463湿地への傾斜面に位置し，床面は西が高く，東とでは約40㎝の差がある。掘り込みは20㎝～40㎝粘土層を下げており，中央には1 m四方程に不整形に窪められている。柱穴，カマドは認められなかった。

ＳＩ622竪穴遺構出土遺物

（第68図，図版44）

須恵器：7は回転糸切りの台付坏で，低い台を貼り付けた後に台周縁をナデつけている。

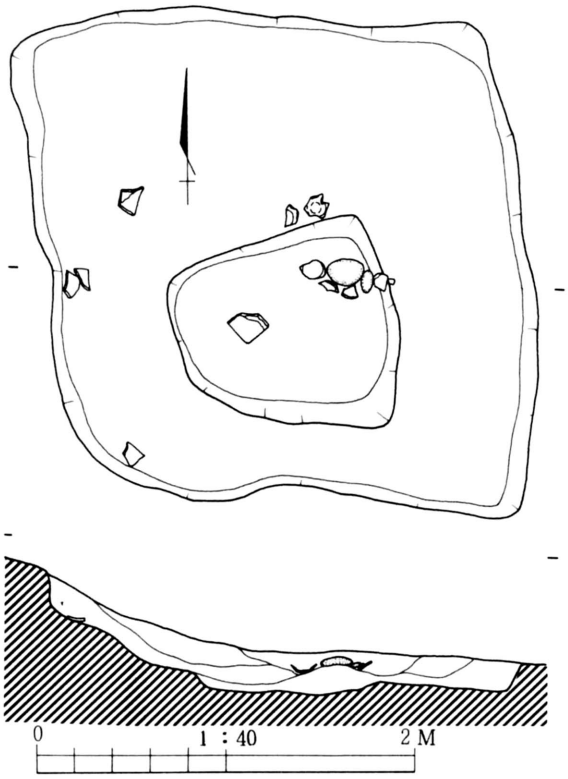
赤褐色土器：8～10は回転糸切りで調整のない坏である。

他に塼，須恵器大甕の破片が出土した。

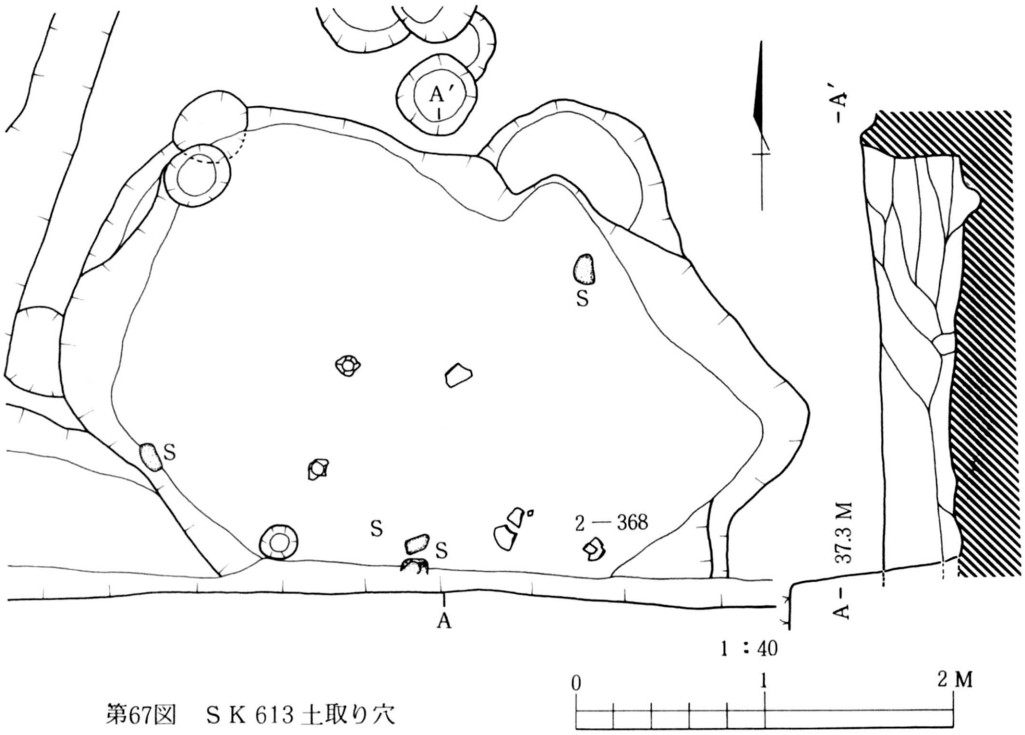
ＳＫ611～613土取り穴

（第60・67図，図版21）

直径約3 m～4 mの不整円形で粘土層を約50㎝，最も深いもので1 m強掘り込んでいる。底面は凹凸が著しいが全体



第66図　ＳＩ622竪穴遺構



第67図　ＳＫ 613 土取り穴

としては鍋底状の形態で，埋土はＳＧ463 湿地整地層の赤褐色砂質土に類似している。

ＳＫ611 土取り穴出土遺物（第68図，図版43）

燈明皿：埋土からの出土で，赤褐色を呈するきわめて小ぶりなつくりである。ロクロ使用で，切り離しは静止した状態でヘラ状工具で行っている。

縄文土器：３は太い沈線による渦巻文である。

ＳＫ613 土取り穴出土遺物（第68図，図版44）

いずれも埋土からの出土である。

須恵器：４は回転ヘラ切りで調整のない坏で底部外面に「掾」あるいは「禄」と判読される墨書が認められる。

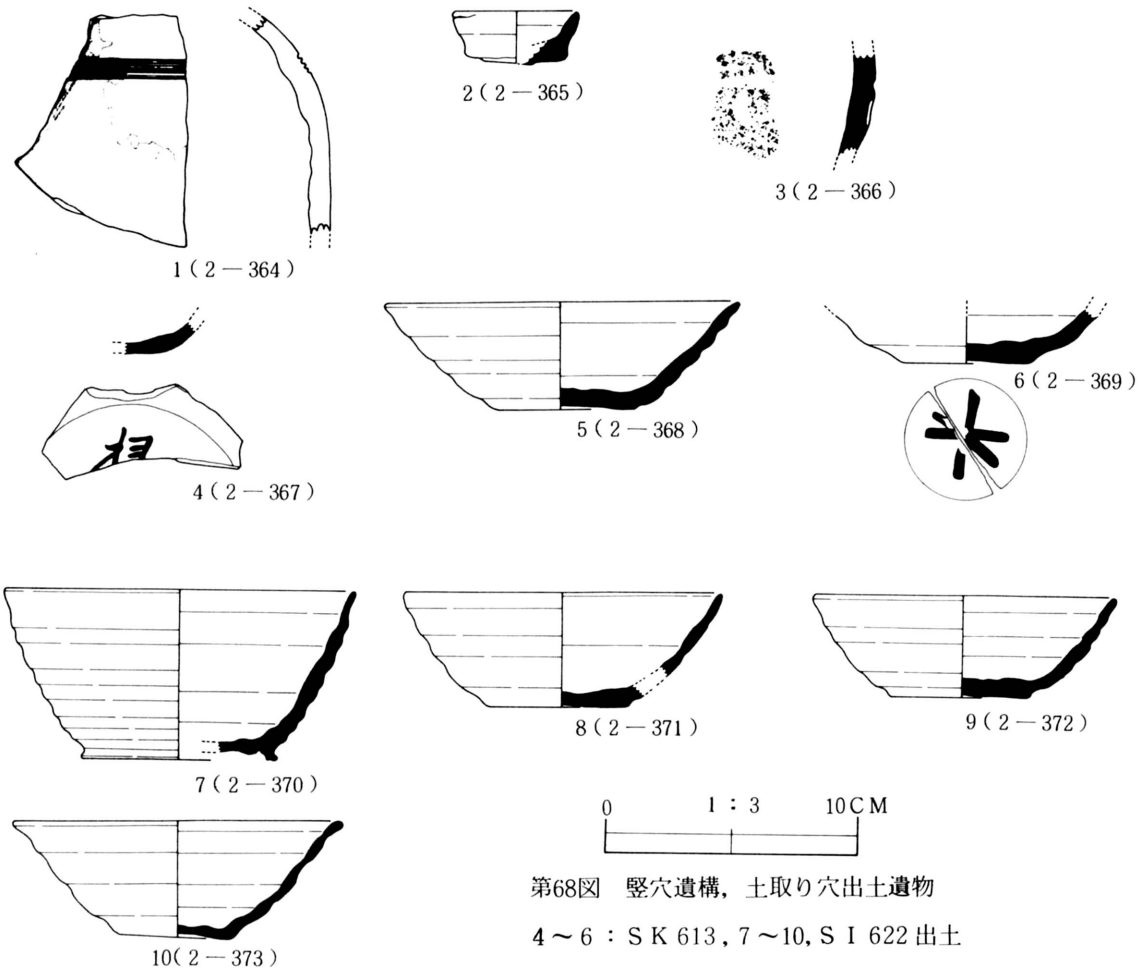
赤褐色土器：５，６は回転糸切りで調整のない坏で，６の底部外面には記号状の墨書が認められる。

ＳＫ 623～625 土取り穴（第60図）

ＳＧ463 湿地の整地層である赤褐色砂質土を掘り下げた段階で不整な円形を呈する平面形が確認された。土層は同質の赤褐色砂質土によって，いっきに埋められた状態であった。深さは30㎝～50㎝で，底面は凹凸が著しいが，全体に鍋底状である。埋土内からは瓦，塼の小片，赤褐色土器片が出土している。

ＳＫ619 土壙（第60図，図版22）

ＳＧ463 湿地に堆積した黄褐色砂面にて検出した。直径約 1.2 m，深さ約60㎝の土壙で，掘り込



第68図　竪穴遺構，土取り穴出土遺物

4～6：SK613，7～10，SI622出土

みは下層の泥炭層にいたっている。埋土からは須恵器，赤褐色土器片が出土した。

SD436溝（第60図，図版23）

第26次調査ですでに検出している溝である。本次の調査ではその西の延長が明確になった。SG463湿地の二時期の整地層を切っており，新しい整地層は中世以降の所産であることから，この溝の年代も中世以降と考えられている。本調査地では古い整地層（赤褐色砂質土）とその上層の黒色砂を切って，ほぼ黒色砂の堆積に沿って北西方向に延びている。幅は30㎝～40㎝，深さは20㎝～30㎝である。

SD614，616～618溝（第60図，図版22）

幅30㎝～40㎝，深さ10㎝～20㎝の浅い溝である。いずれも時期については判然としていないが，SG463湿地に向って掘り込まれ，排水溝と考えられた。SD614溝はSK612土取り穴埋土を切っており，これより新しい。

ＳＡ615ピット群（第60図）

ＳＫ623～625土取り穴の西に位置し，整地層（赤褐色砂質土）面から掘り込まれている。埋土は黒色土，粘土混りの赤褐色土，直径は20㎝～40㎝，深さは20㎝～30㎝である。柱痕跡の明瞭なものもあるが建物として把握することはできなかった。

ＳＡ620ピット群（第60図，図版22）

ＳＧ463湿地に堆積した黄褐色砂面にて検出した。直径10㎝，深さ10㎝たらずの小さいものと，直径30㎝，深さ20㎝ほどのものがある。柱痕跡の認められるものはなく，埋土は黒色砂で，赤褐色土器の細片が混入していた。

ＳＧ463湿地（第60図，図版16・17）

本次の調査で確認した東西幅は約35ｍであるが，さらに北西方向に広がり，発掘区外に延びている。南北は第22・26次調査の結果，60ｍ以上となることが判明している。地表面から深さ1.35ｍの位置から2.64ｍまでの厚さ1.29ｍに泥炭層，有機質粘土が堆積していた。泥炭のＣ－14年代測定の結果は1.35ｍ～1.37ｍで 1780 ± 100年B.P.，2.62ｍ～2.64ｍで 3610 ± 130年B.P.であり，最下層付近の泥炭から縄文中期末，大木10式の土器が出土している。

本次調査地での湿地堆積層を大別すると，上層から表土（耕作土），暗褐色砂質土，灰青色砂（粘土），黒色砂，赤褐色砂質土，灰白色砂，黄褐色砂，泥炭（有機質層），基盤の寺内層（粘土・シルト），北西部では飛砂となる。灰青色砂より上は耕作による攪乱層である。黒色砂は赤褐色土器の細片を含む土層で，遺構としてはＳＤ436溝が確認された。灰白色砂と黄褐色砂はＳＧ463湿地に流入して堆積したものと考えられ，ＳＥ621井戸跡は黄褐色砂を掘り込んで構築し，灰白色砂に覆われていた。いずれも瓦・塼とともに回転糸切りで調整のない赤褐色土器が出土している。

ＳＧ463湿地堆積層出土遺物（第69図，図版44・45）

灰青色砂出土遺物

赤褐色土器：７は回転糸切り，調整のない坏で，底部外面に「厨」の墨書が認められる。

珠洲系陶器：13は甕の底部片で外面には３㎝幅，13本を一単位とする条線状平行叩き，底部は砂底となっている。16は2.5㎝幅，14本を１単位とする繊細な卸し目をもつ片口鉢片である。

黒色砂出土遺物

赤褐色土器：６，10，11は回転糸切りで調整のない坏である。６は小型で浅く，口縁部に煤状の炭化物が付着し，燈明皿と考えられる。10，11は器肉も厚手で大型なものである。

青磁：12は内面に片切彫りの線刻のある碗で，磁色は青色にわずかに緑色を帯びている。

珠洲系陶器：14，15は片口鉢の破片である。14は密であるが粗い太目の卸し目である。15は卸し目が認められないが，口縁が内側に引き出されており珠洲系陶器でも古い形態と考えられる。

赤褐色砂質土出土遺物

須恵器：５は回転ヘラ切りの台付坏である。台周縁は貼り付け後ナデつけている。

第69図　S G 463 湿地埋土各層出土遺物

灰白色砂質土出土遺物

須恵器：1，2は回転ヘラ切り，調整のない坏で，色調は1が底部，2が全体に赤褐色を呈している。

黄褐色砂出土遺物

須恵器：3は回転ヘラ切り，調整のない坏で，部分的に赤褐色を呈する。

赤褐色土器：8，9は回転糸切り，調整のない坏で，底部外面に墨書が認められる。8は「連」か「運」，9は「穴」か「六」と判読できる。

縄文土器・石器：17～20は沈線で区画し，磨り消しを施すもので，17は波状口縁で楕円形の区画を残し磨り消している。18，19は平縁で口縁下が幅広の無文帯となる。23は平行沈線による曲線文である。24は横型の石匙の断片で，剝片を利用し，主要剝利面からの加撃によって丸味のある刃部を作り出している。

泥炭層表面出土遺物

須恵器：4は回転ヘラ切り，調整のない坏で，部分的に赤褐色を呈する。底部外面に墨書が認められるが判読不能である。

木製品（第64図，図版45）

1は低い台のつく漆椀である。内外面には黒漆が塗布されている。台部には同心円状にロクロ利用の削り痕跡が残る。9は一定幅で切り取ったと考えられる樺皮である。

泥炭層下層出土遺物

縄文土器：21，22はヘラでなでつけた器表面に半截竹管状工具による平行沈線で弧・曲線文を施文している。

3）ま と め

第34次調査の結果，明らかになったことを箇条にまとめると以下のようになる。

①調査目的の1つであった壮大な掘立柱建物群に伴う，奈良時代に位置づけられる遺構の検出はなかった。

②ＳＧ463湿地の範囲については東西が約35m，さらに北西方向に延びている。南北は60m以上となる。

③第26次調査で検出した中世の整地は本次の調査地では認められない。一方，平安時代後半の整地（赤褐色砂質土）は本次の調査地のＳＧ463湿地南西部でも確認され，この整地がＳＧ463湿地の南縁に全体的に，広範囲に行っているものであることが判明した。

④高清水丘陵を覆う古代以前の飛砂は本次の調査地の西区域を東限とすることが判明した。調査地の西区域で基盤の寺内層（粘土・シルト層）が西に傾斜し，飛砂はこの傾斜面頂点近くで漸次，薄い堆積となっている。

以上，4点であるが検出遺構の年代について簡単にふれてみると，埋土に古瀬戸を含むＳＩ610

竪穴遺構，これに埋土の類似するＳＩ609竪穴遺構，珠洲系陶器を含む整地層を掘り込んでいるＳＤ436溝などは中世以降の遺構と考えられる。

一方，井側の掘り方埋土から回転糸切りで調整のない赤褐色土器が出土しているＳＥ621井戸跡は平安時代の後半に構築されたものと考えられた。埋土から同様な赤褐色土器が出土するＳＫ611～613，623～625土取り穴ＳＩ622竪穴遺構は，その掘り込まれた年代は明確でないが，埋められず長い期間にわたって開口していたとは考えられず，整地された平安時代後半とそう隔たりはないものと考えられる。

調査成果の普及と関連研究活動

(1)現地説明会の開催

第33次調査について

講師　小　松　正　夫　　昭和56年９月19日

(2)諸団体開催研究会議への参加

○古代学協会仙台支部主催　　公開学術講演会

発表　小　松　正　夫　　―秋田城跡を発掘して―　　昭和56年６月６日

○秋田市東部公民館主催　　「秋田の史跡を学ぶ会」

講師　小　松　正　夫　　―秋田城の役割と意義―　　昭和56年６月10日

○秋田大学史学会

発表　日　野　　久　　―秋田城跡第33次調査について―　　昭和56年11月８日

○古代城柵官衙遺跡検討会文書資料部会

発表　日　野　　久　　―秋田城跡第25次検出井戸跡について―

参加所員　西鳥羽　礼　子　　昭和56年11月28・29日

第33次調査、航空写真

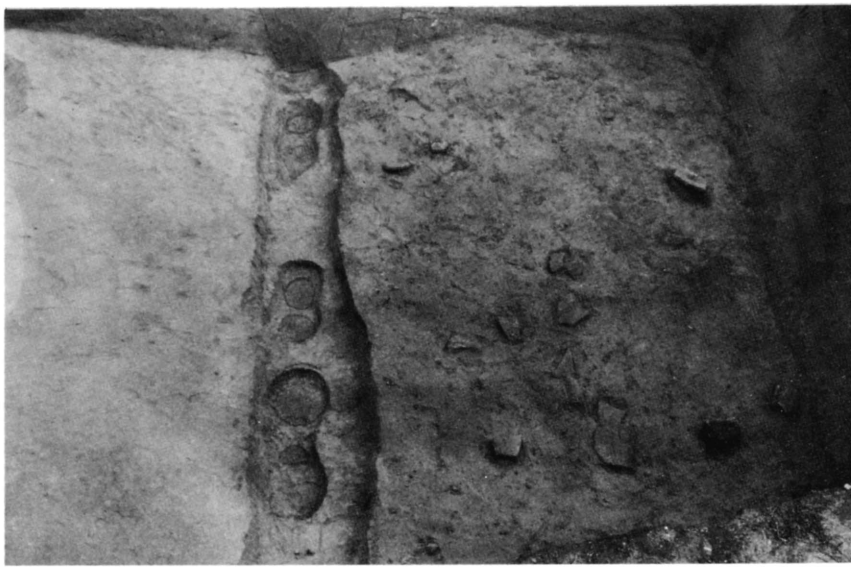
図版 1
（北から）

図版 2　第32次調査　上　第１トレンチ全景（東から）

下　ＳＦ552，ＳＢ553Ａ・Ｂ，ＳＤ554・555（南から）

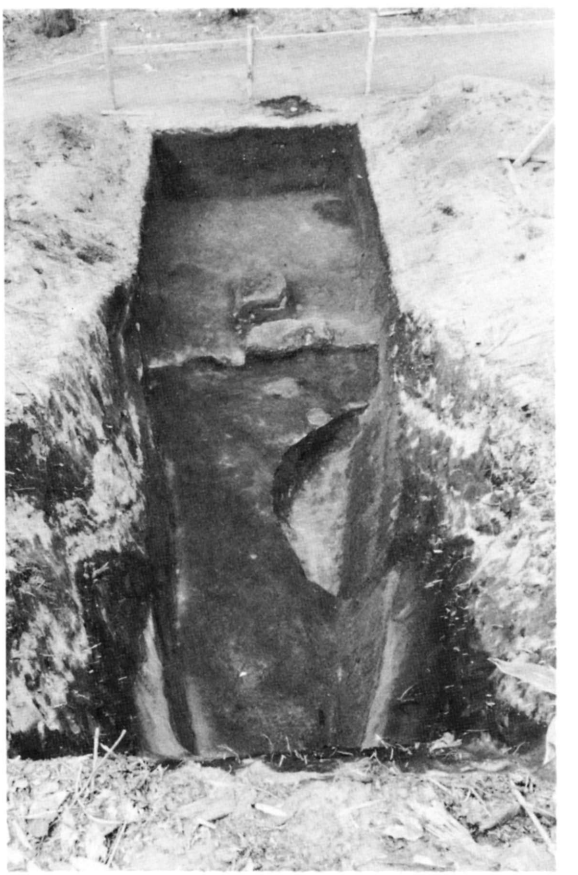
ＳＢ553Ａ建物跡
堀り方断面
（東から）

ＳＸ556溝跡
断面
（西から）



ＳＡ557柱列
（南から）

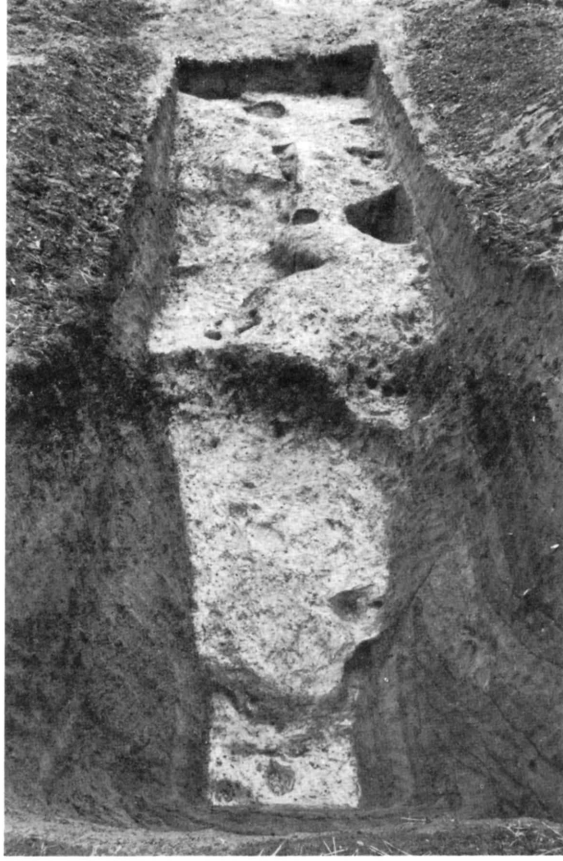
図版 3



図版 4　上　築地崩壊土瓦層（西から）

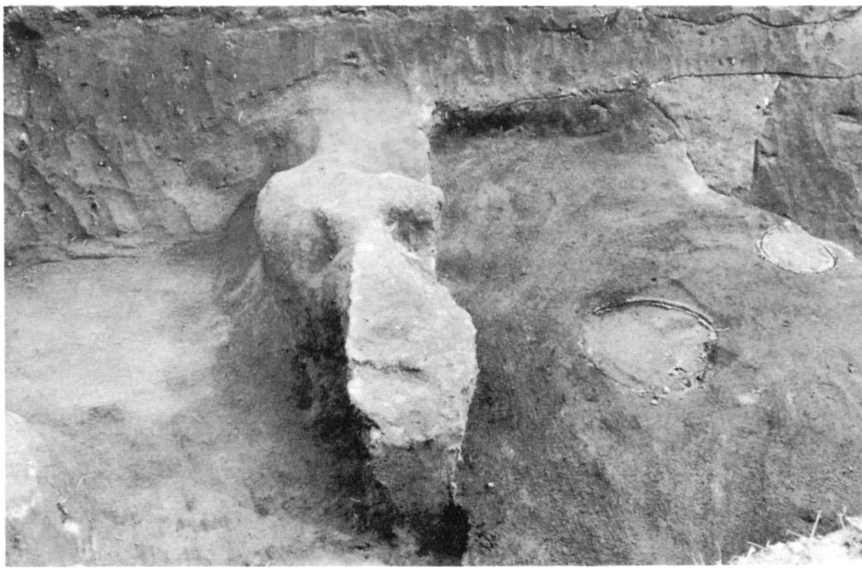
下左　ＳＸ556 溝跡（東から）

下右　第２トレンチ全景（南から）



左　第３トレンチ全景
（南から）

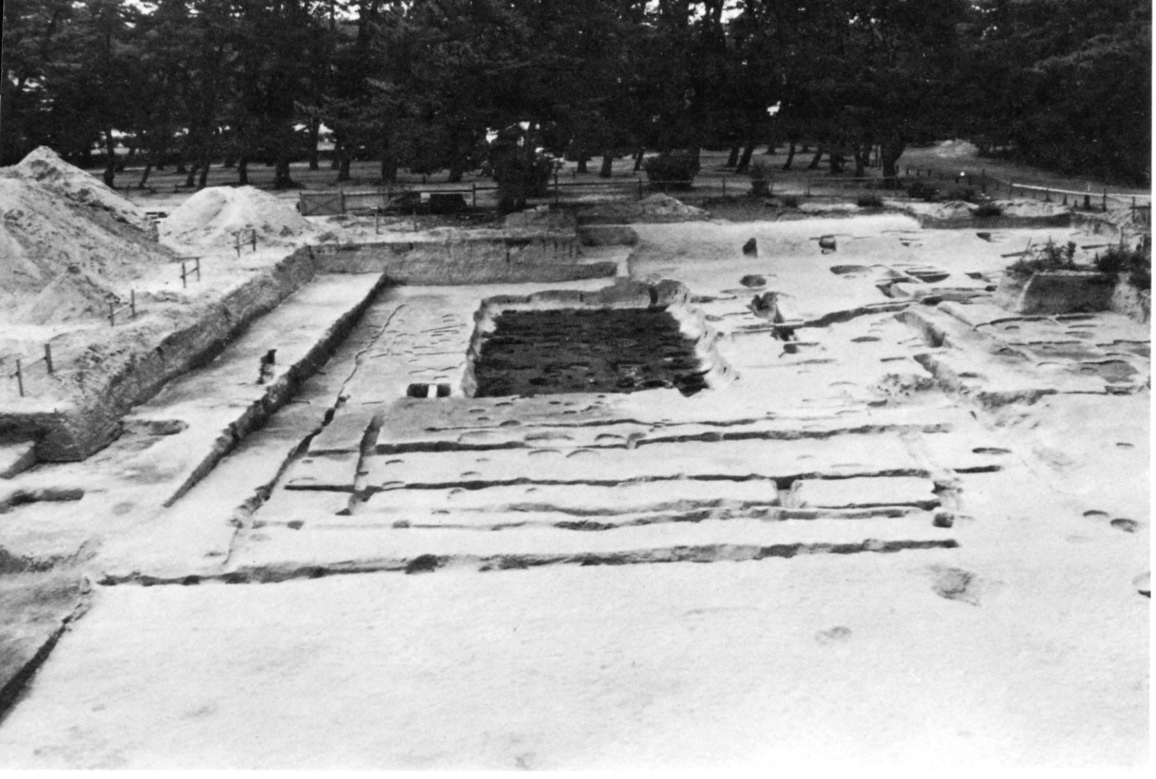
右　第４トレンチ全景
（南から）



ＳＸ558粘土積土

ＳＸ561 カマド状遺構

図版 5



図版 6　上　第33次調査全景（南から）

下　第33次調査全景（西から）

図版 7　上　上層遺構群（南から）

下　ＳＢ587 Ａ・Ｂ 建物跡（南から）

図版 8　上　ＳＢ588・589建物跡，ＳＡ590柱列（西から）

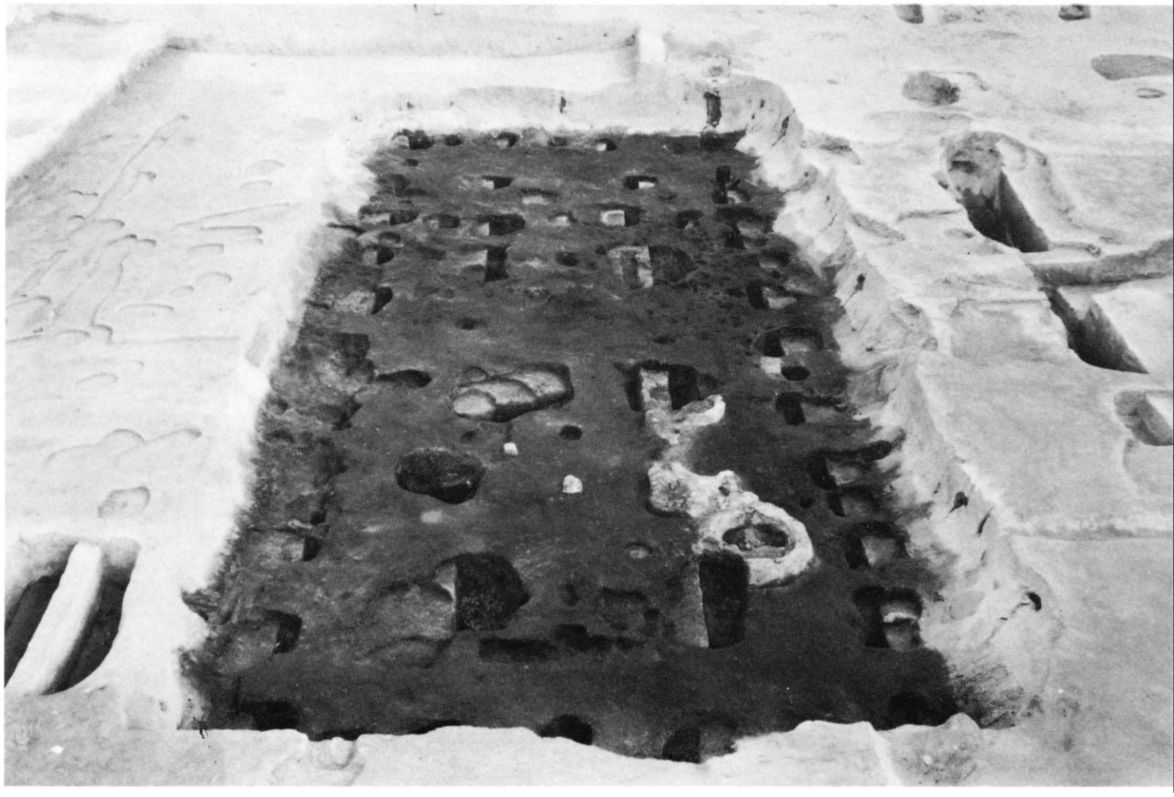
下　ＳＢ605建物跡，ＳＫ608土壙　　（西から）

図版 9　上　ＳＢ604Ａ・Ｂ建物跡（北から）

下　ＳＢ605建物跡，ＳＡ598土壙，ＳＡ600・601柱列（西から）

図版10　上　ＳＡ565～568，570，571柱列跡（西から）

下　ＳＸ582竪穴状遺構（南から）

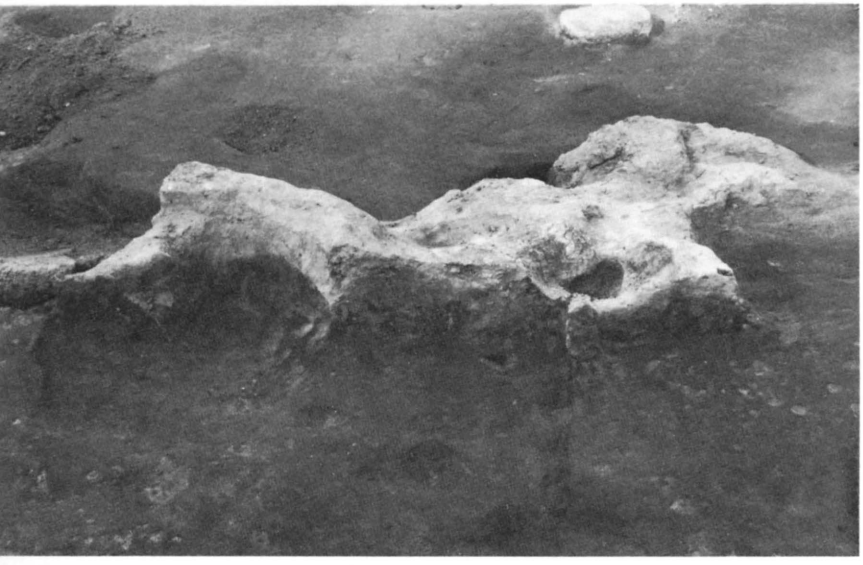


図版11　上　SI　593 A・B住居跡（鍛冶工房跡），埋土土層断面（南から）

下　SI　593 A・B住居跡（鍛冶工房跡）（完掘後）（南から）

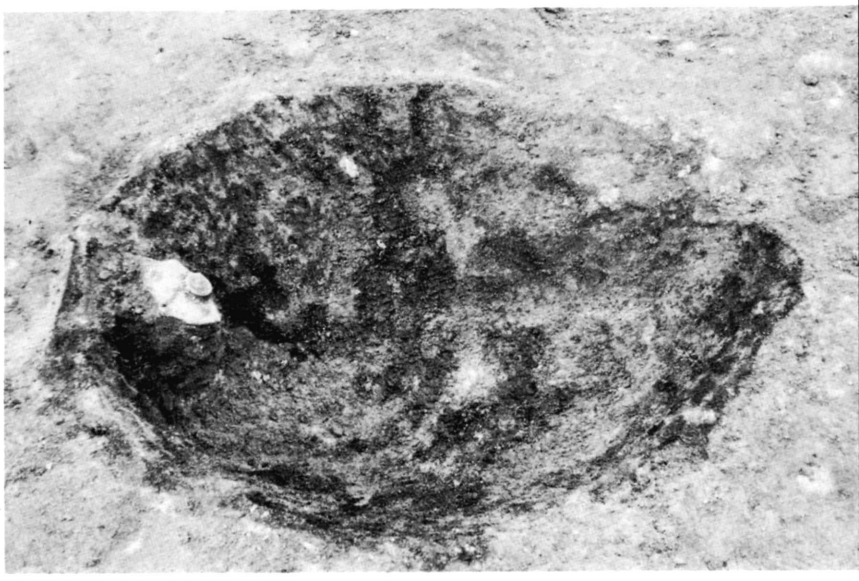
左　ＳＸ594炉跡（鍛冶遺構）

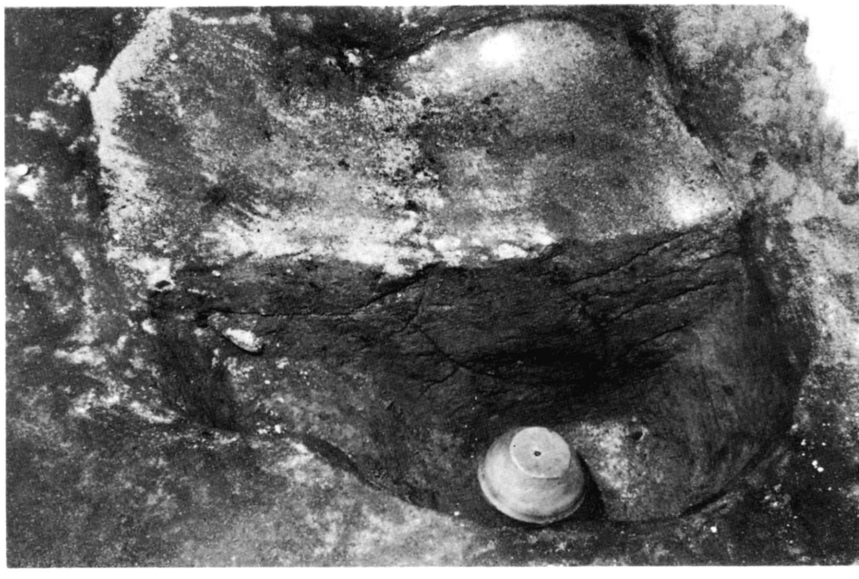
右　ＳＸ594炉跡西側断面（南から）



ＳＸ594炉跡断面（東から）

ＳＸ594炉跡断面（南から）





上　ＳＸ595土壙

中　ＳＸ596土壙

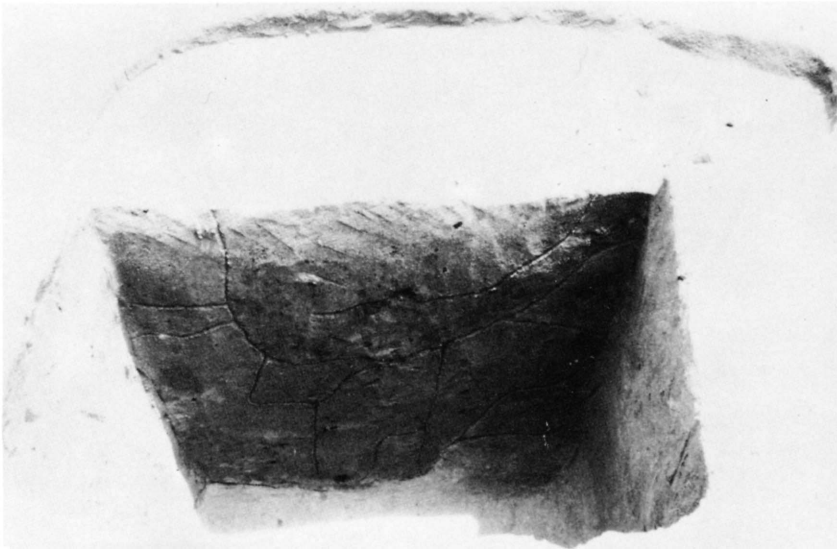
下　ＳＩ593Ｂ住居跡
　　南壁掘り方

上　ＳＩ593Ａ・Ｂ住居跡
　　主柱北東隅（東から）

中　ＳＩ581住居跡カマド
　　（西から）

下　ＳＸ597土壙跡
　　（南から）

図版14



上　ＳＩ579住居跡
　　（南から）

中　ＳＫ585土壙跡
　　（北から）

下　ＳＢ588建物跡
　　梁行北柱

図版15

図版16　第34次調査　上　全景航空写真（東から）

下　全景（南から）

図版17　上　全景（北から）

下　ＳＥ621 井戸跡（東から）

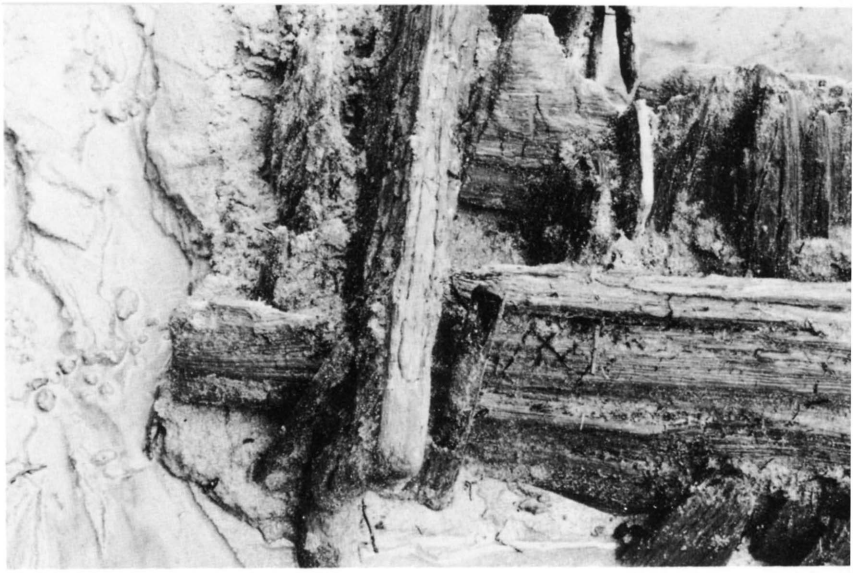
上　ＳＥ621井戸跡
土層断面
（東から）

中　ＳＥ621井戸跡
井籠組板材
（南から）

下　ＳＥ621井戸跡
井籠組板材
（東から）

ＳＥ621井戸跡
井籠組板材
（北から）

ＳＥ621井戸跡
北西隅
材組み合せ
（西から）



ＳＥ621井戸跡
南西隅
材組み合せ
（南から）

図版20　上　ＳＩ609竪穴遺構（北西から）

下　ＳＩ622竪穴遺構　（東から）

右　ＳＫ611・612
613土壙
（東から）

図版21

下　ＳＧ463
黄褐色砂
堆積状況
（東から）

上　黄褐色砂面
検出遺構
ＳＤ616～618
ＳＫ619，ＳＡ620
（南から）

中　灰白色砂
遺物出土状況

下　スクモ層出土
漆器椀

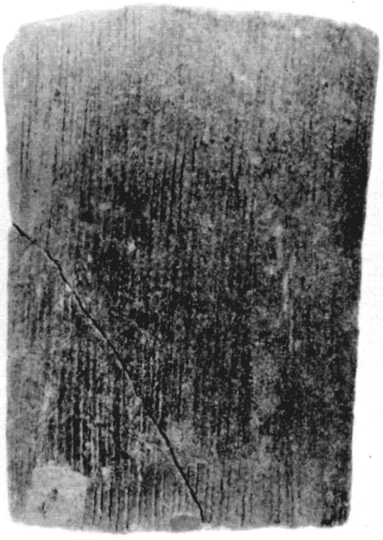
図版22

ＳＤ436溝跡
（東南から）

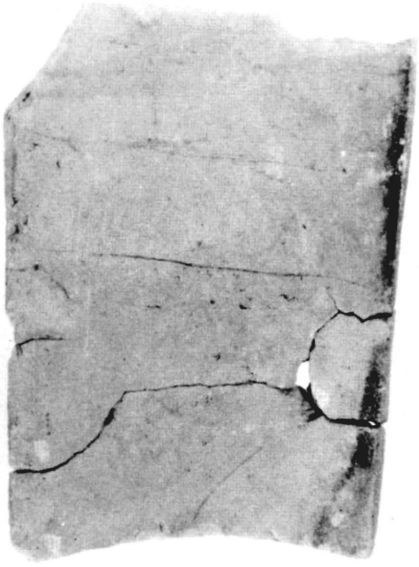
ＳＤ436溝跡
断面
（東南から）

秋田城跡航空写真

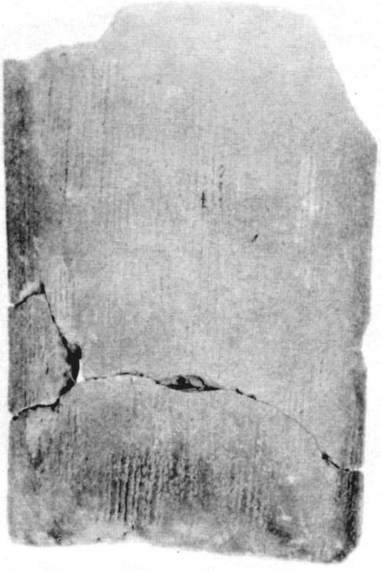
1



1



2



2

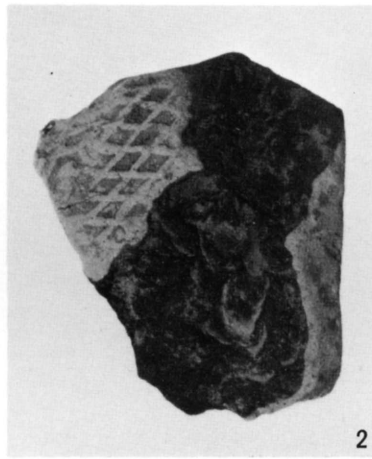
3

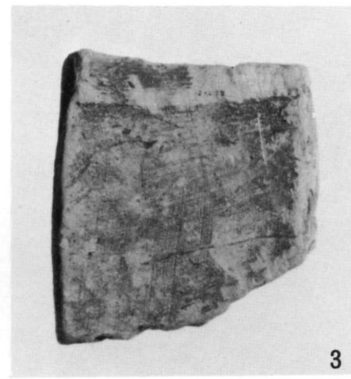
3

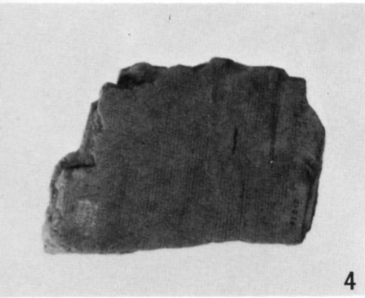
第32次調査出土瓦

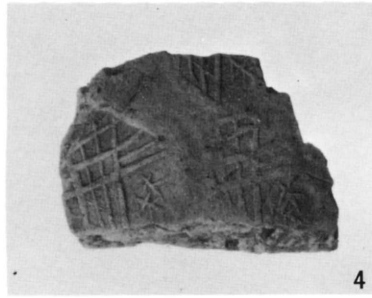
ＳＦ552築地崩壊土出土

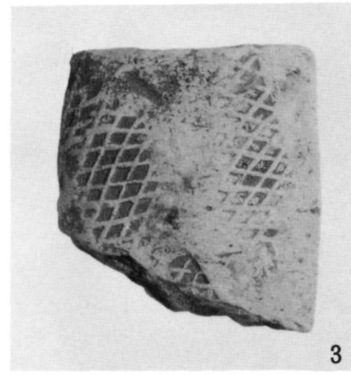
図版24

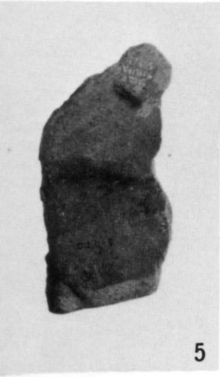








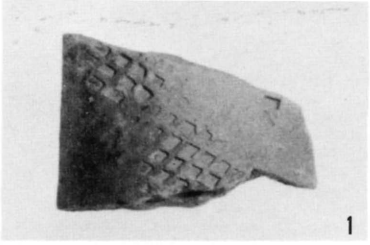


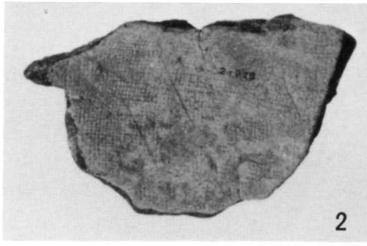


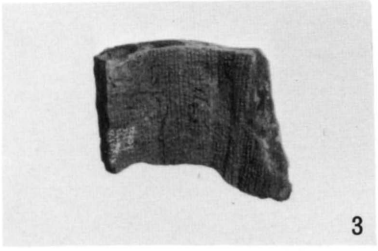
第32次調査出土格子目瓦

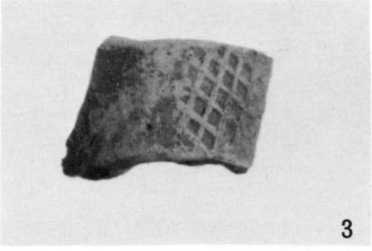
ＳＦ552築地崩壊土出土

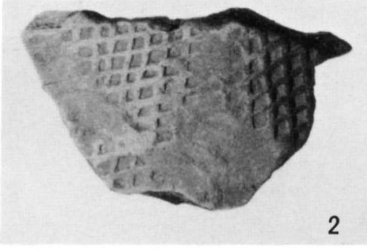
図版25

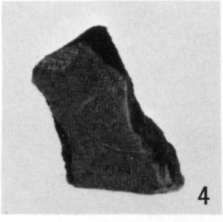


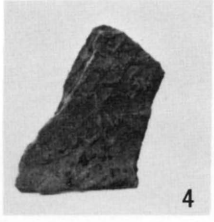


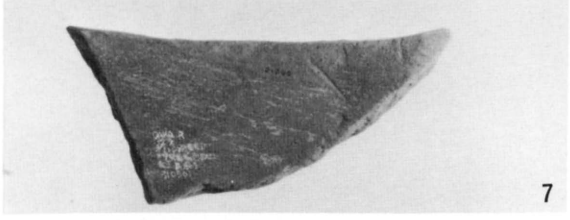


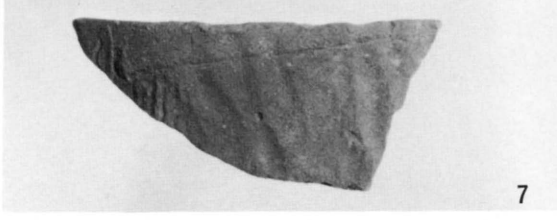


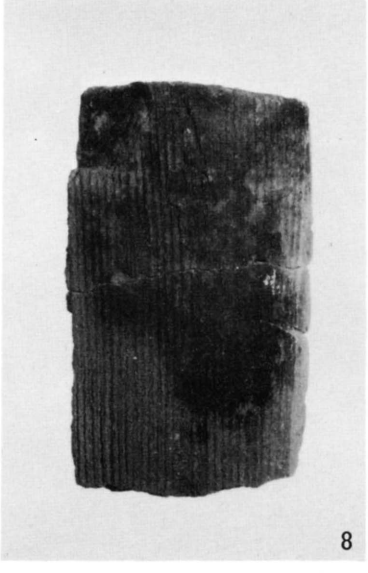


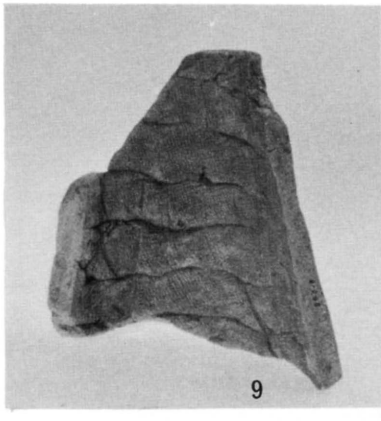


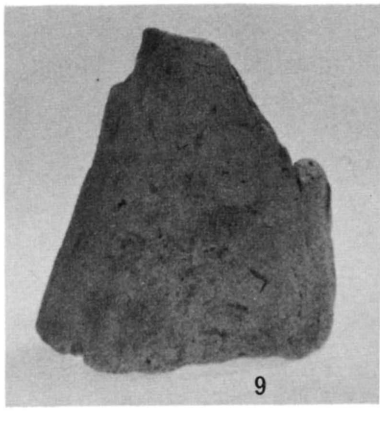












第32次調査出土遺物

1～3，ＳＦ552築地崩壊土出土格子目瓦

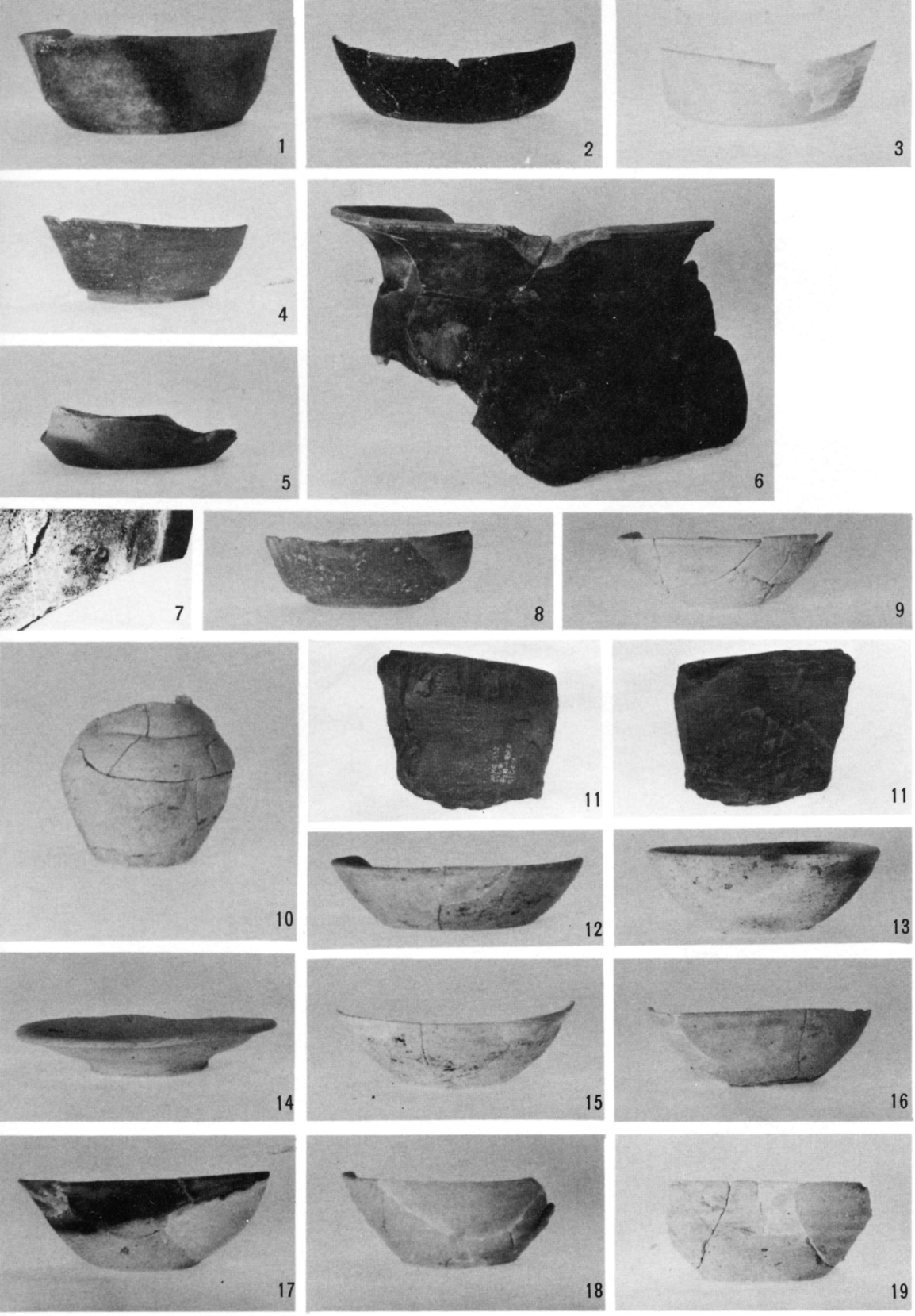
4，ＳＤ554溝内埋土出土

5，第1トレンチ東側赤褐色砂出土

6，　〃　　〃　黒褐色土出土

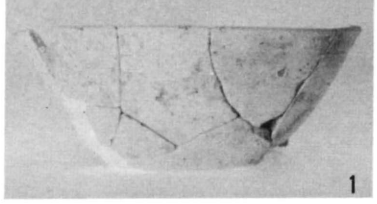
7～9，第1トレンチ東側出土瓦

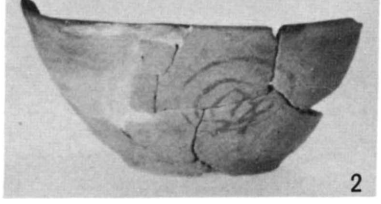
図版26

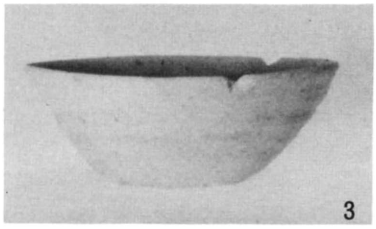


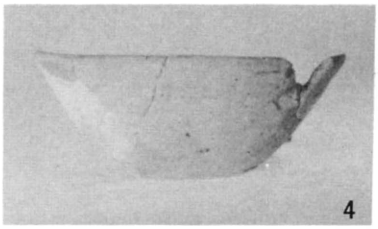
図版27　第32次調査出土遺物

1～6，第2トレンチ，ＳＩ559出土
7～11，　〃　　各層出土
12～16，第3トレンチ，ＳＸ561・562出土
17～19，　〃　　各層出土

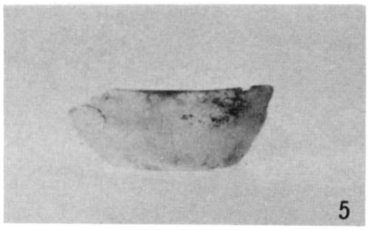


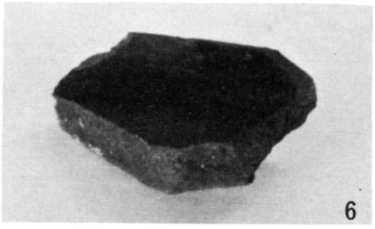


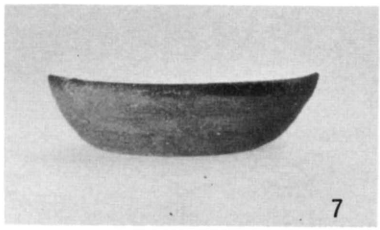


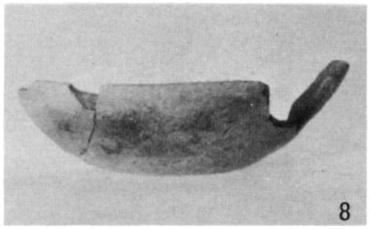


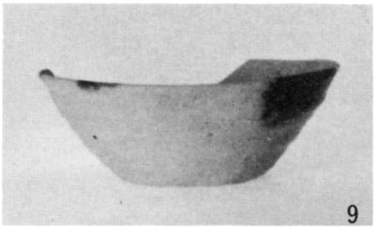
第32次調査出土遺物
1・2，第3トレンチ，各層出土
3・4，第4トレンチ，ＳＩ564出土

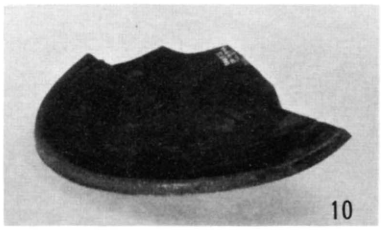


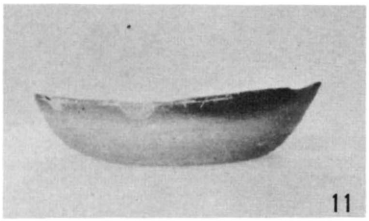


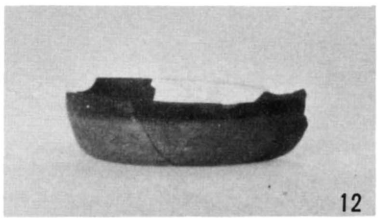


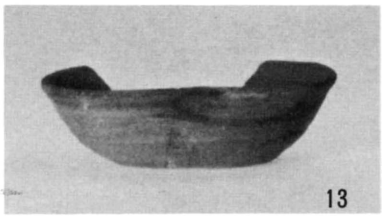




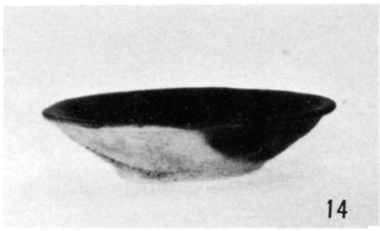


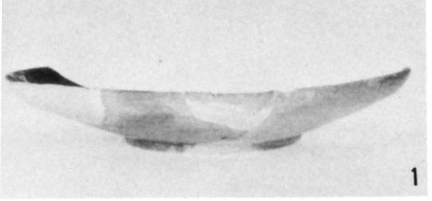


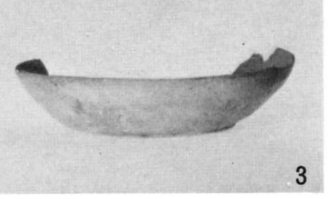


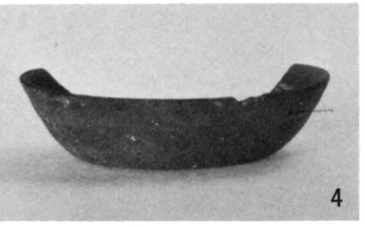


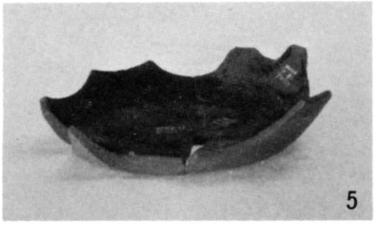
図版28　第33次調査出土遺物
5～6，ＳＢ586
7，　ＳＢ587
8～10，ＳＢ588
11～13，ＳＩ579
14，　ＳＩ580 出土

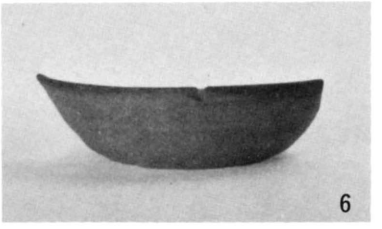


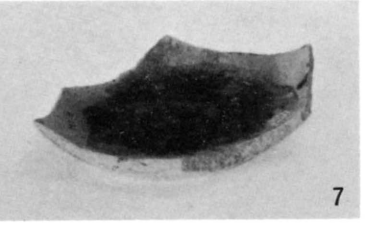


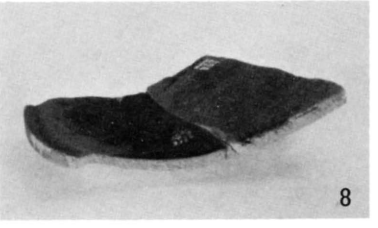


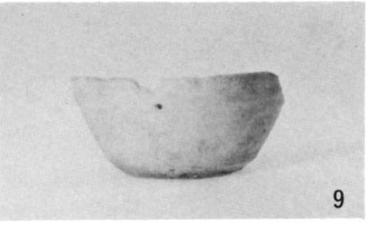


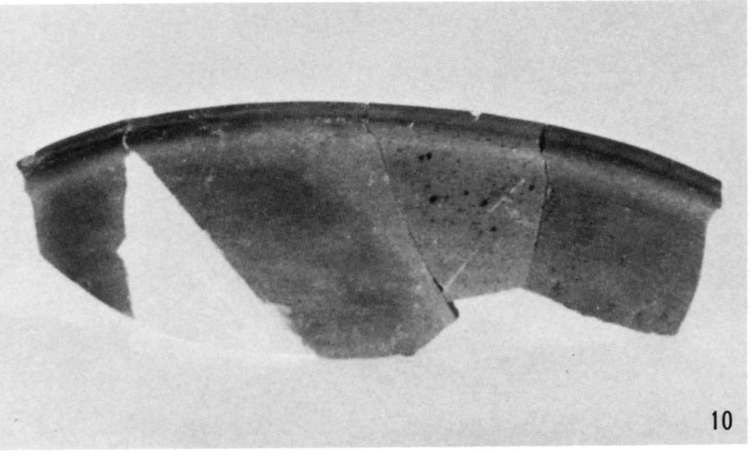


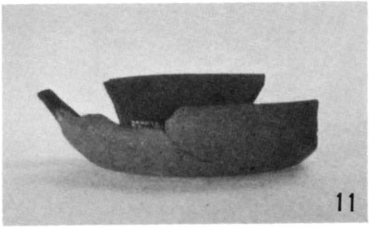


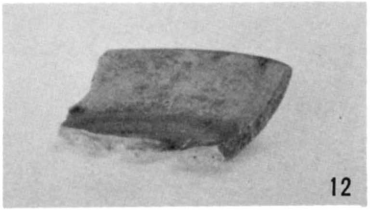


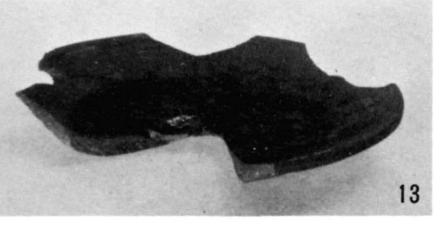


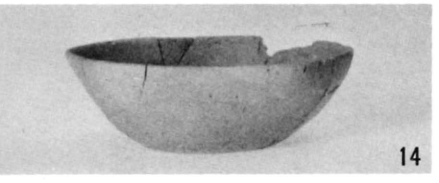


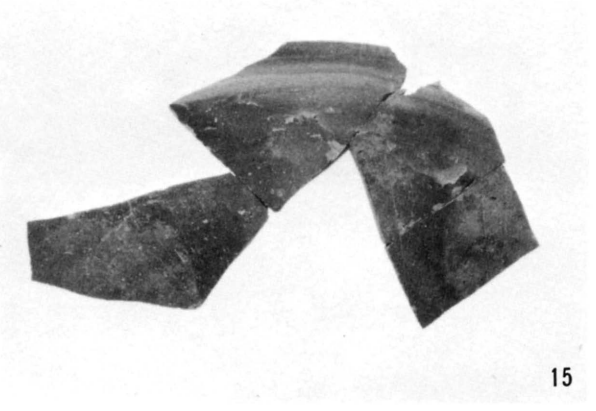




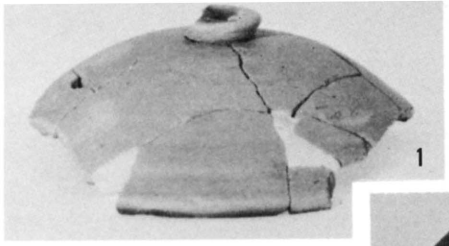


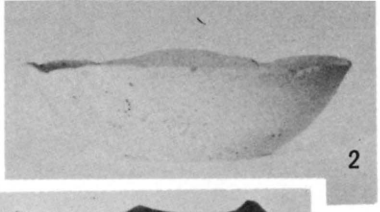


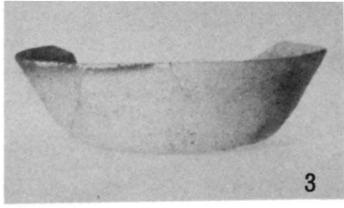


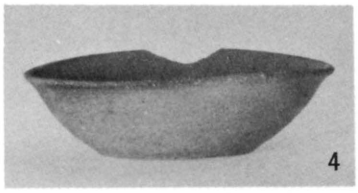


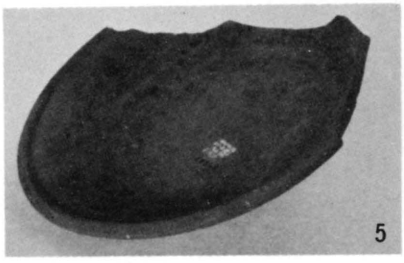
図版29　第33次調査出土遺物
1～9　S I 593
10～15　S I 593 A　出土

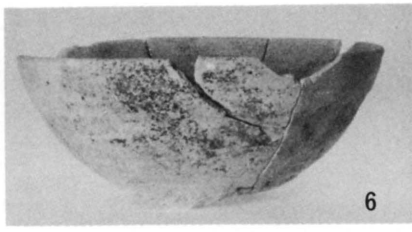


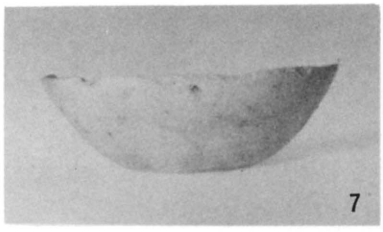


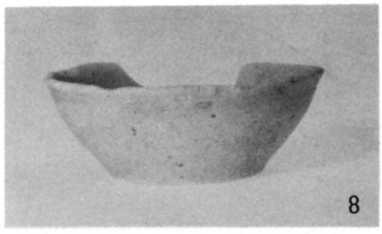


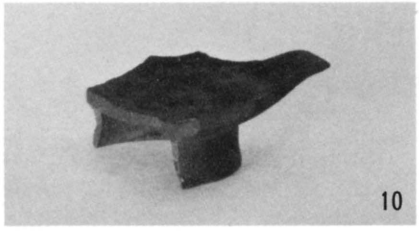


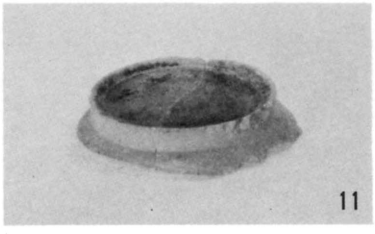


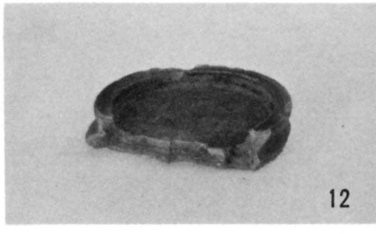


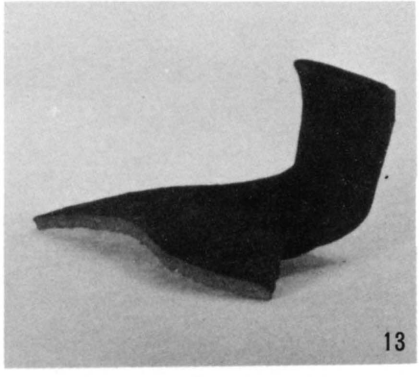


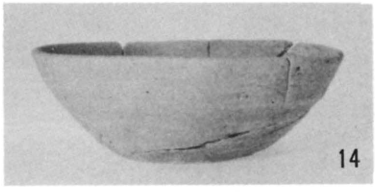


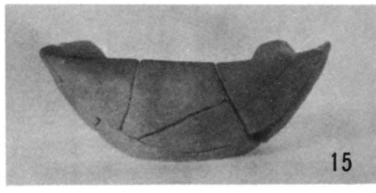


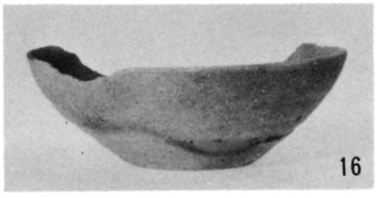


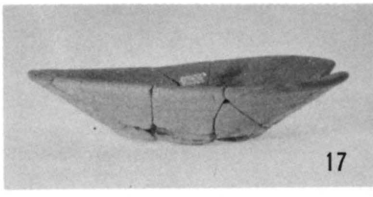


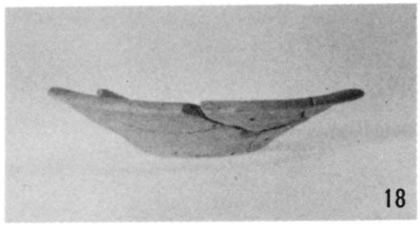


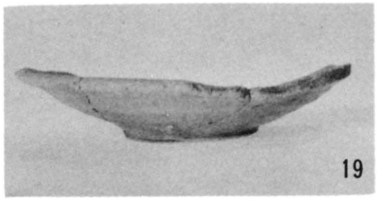


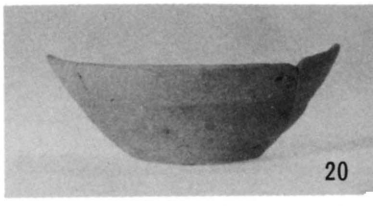




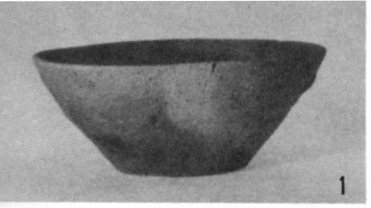


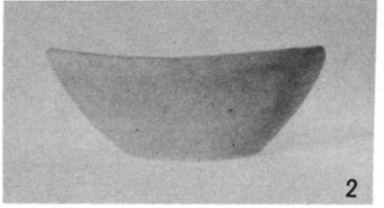


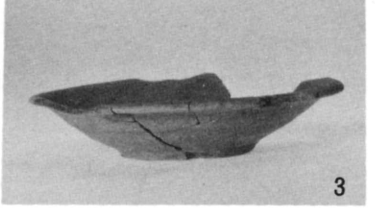


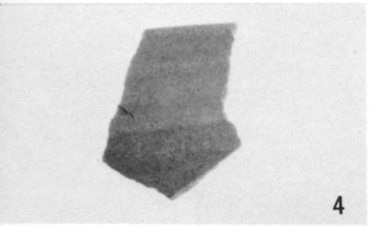


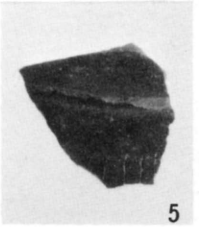
図版30　第33次調査出土遺物
1～9　S I 593B
10～20　S X582　出土

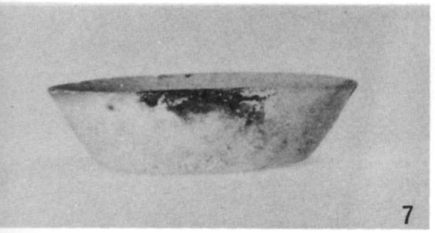


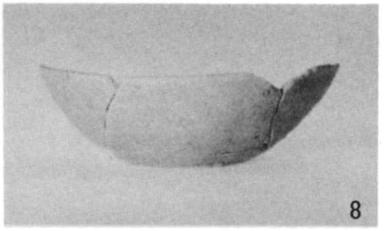


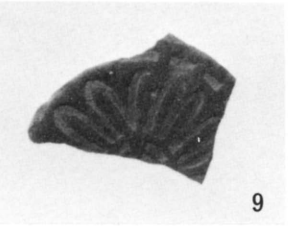


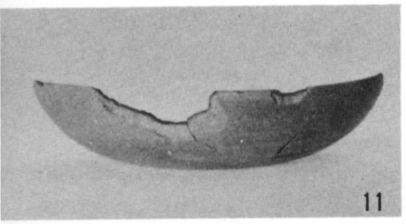


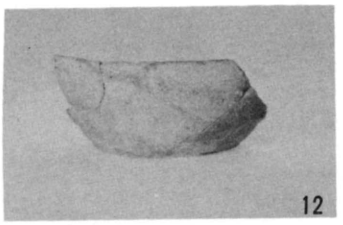


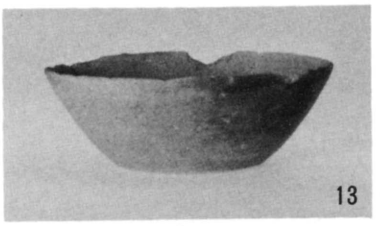


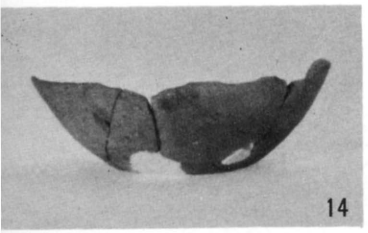


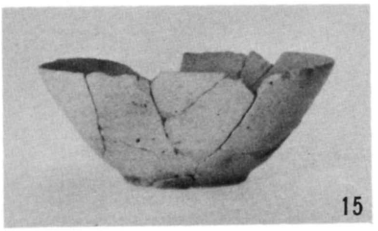


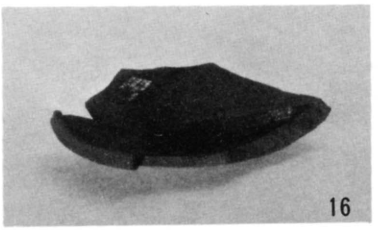


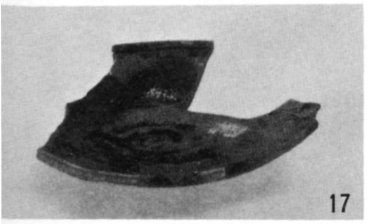


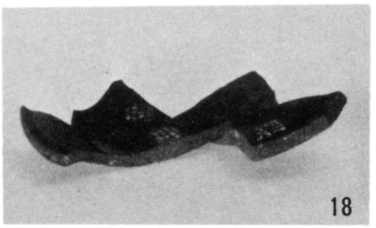








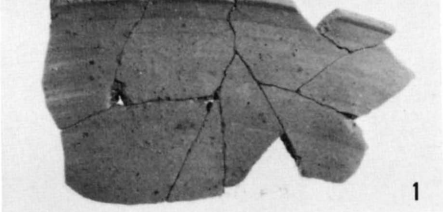


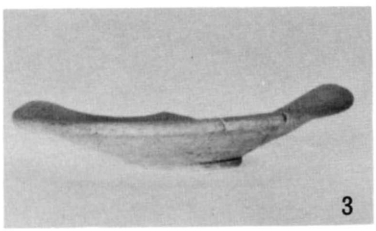


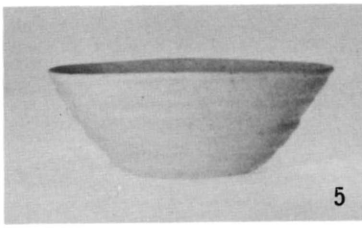
図版31　第33次調査出土遺物

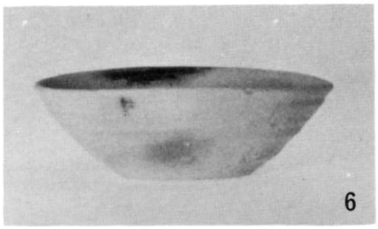
1～6	S X582
7	S A564
8	S A567
9	R A571
10	S D576
11～19	S K584 出土

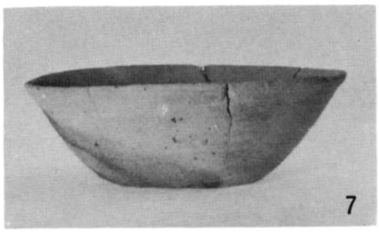
1～2　SK584
出土

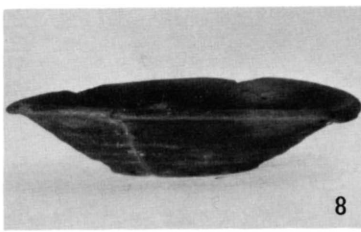


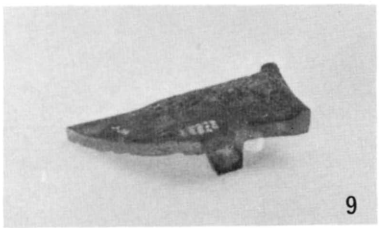


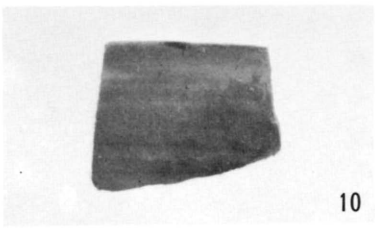


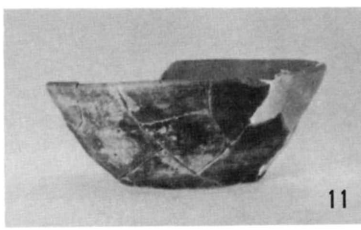


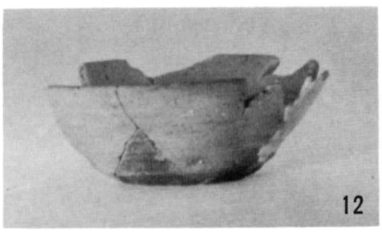


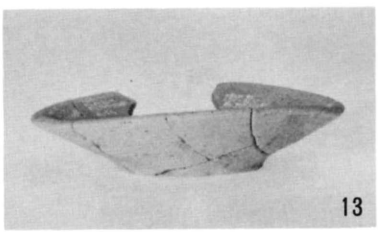


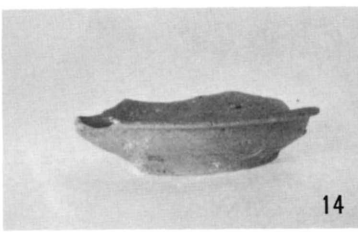


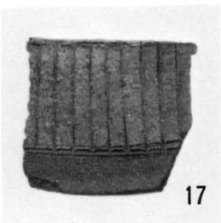


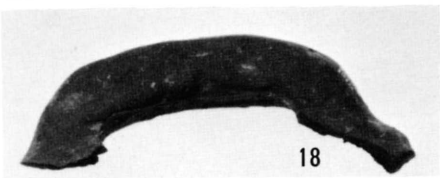




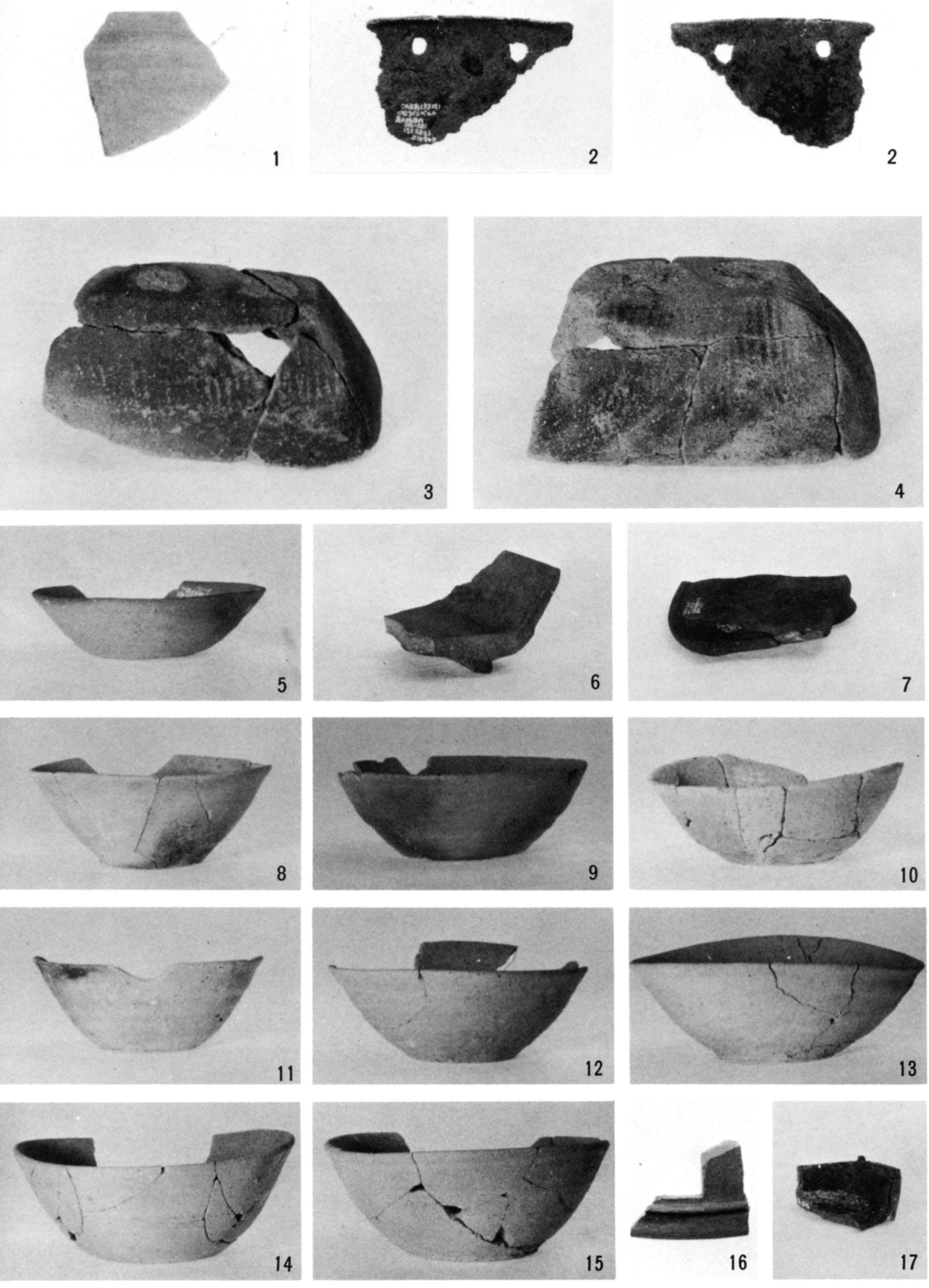




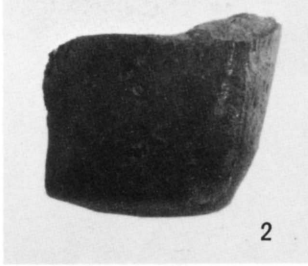


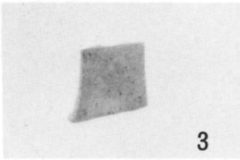


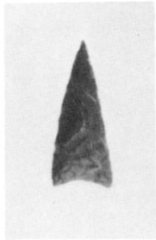
図版32　第33次調査出土遺物
3　　褐色砂質土層
4　　赤褐色土層
5～10　黄色砂・黄褐色砂層
11～18　炭化物層　　出土

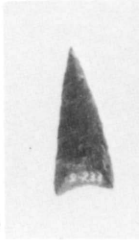


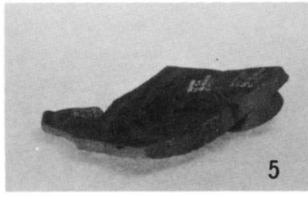
図版33　第33次調査出土遺物
1～4　炭化物層
5～17　赤褐色砂層出土

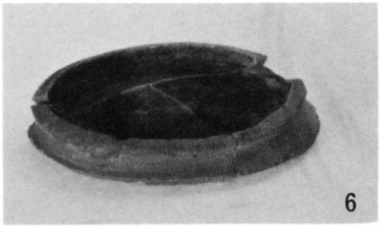


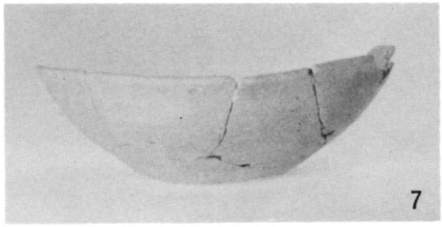


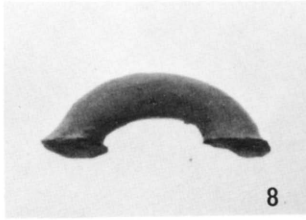


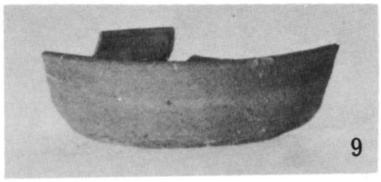


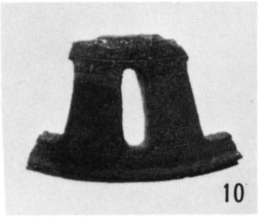


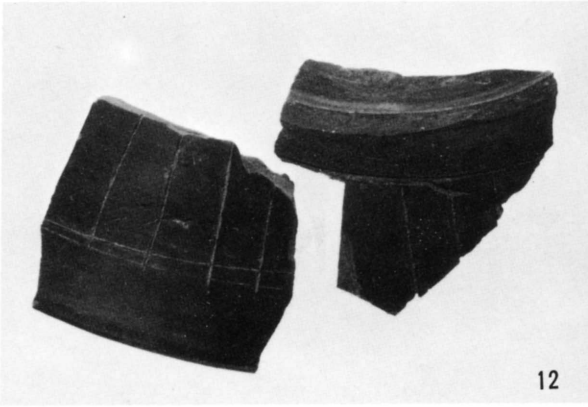












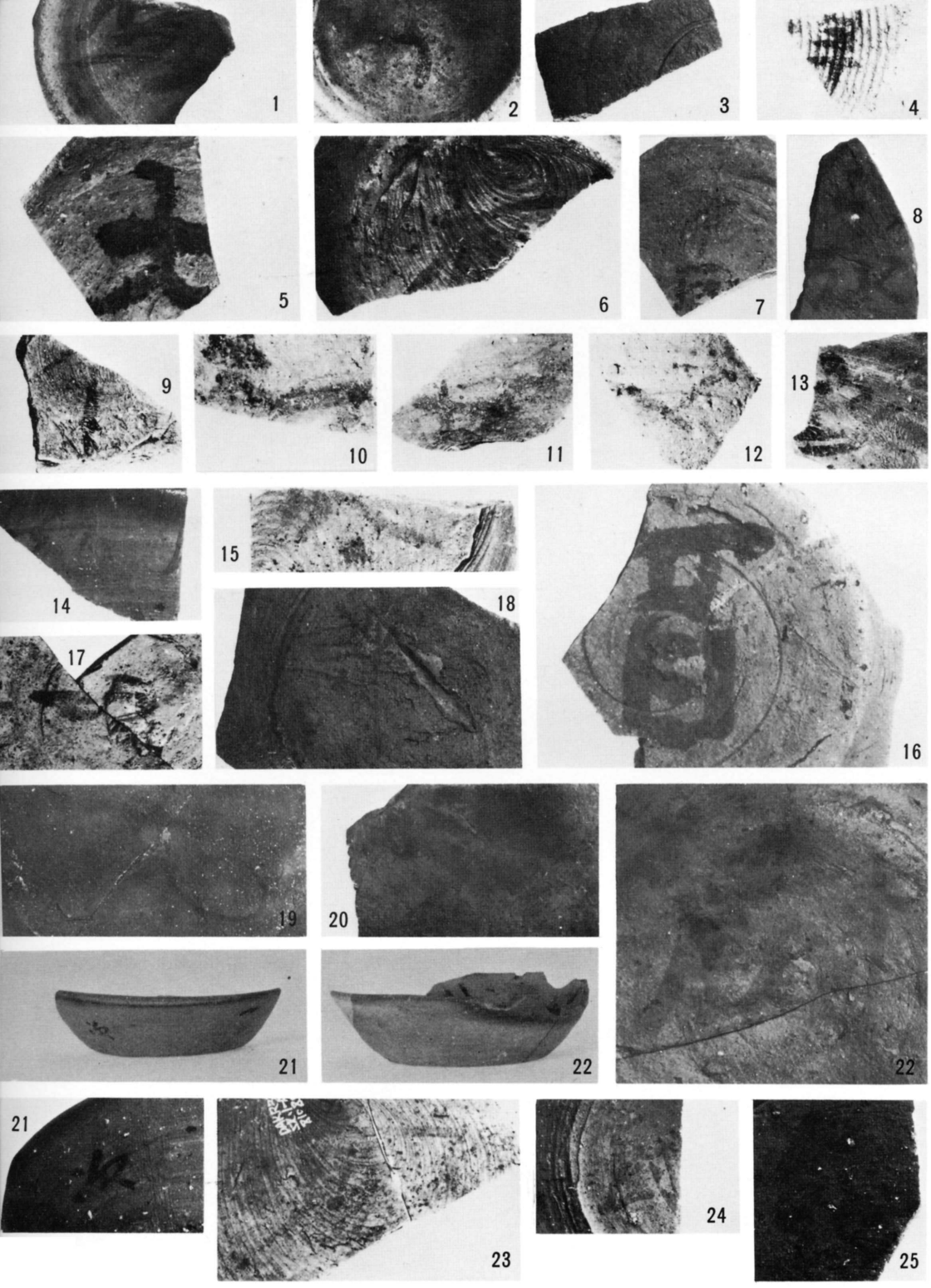
図版34　第33次調査出土遺物

1　　褐色砂質土

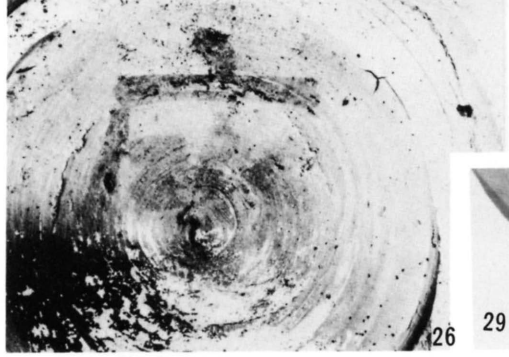
2～4　赤褐色砂層

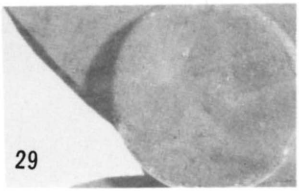
5～8　暗褐色砂層

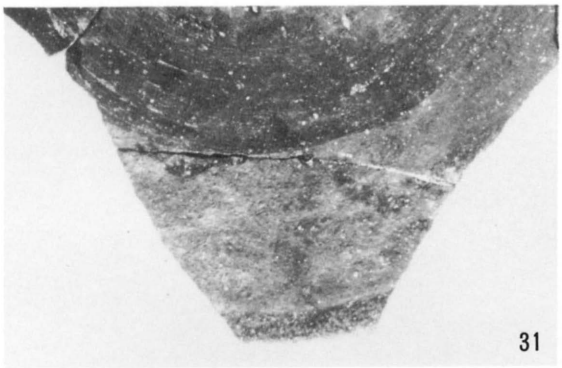
9～12　褐色砂層（最下層）出土

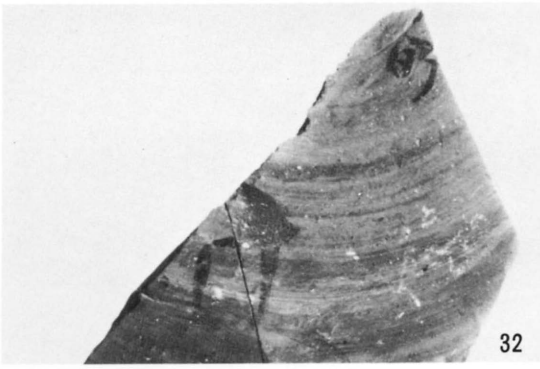


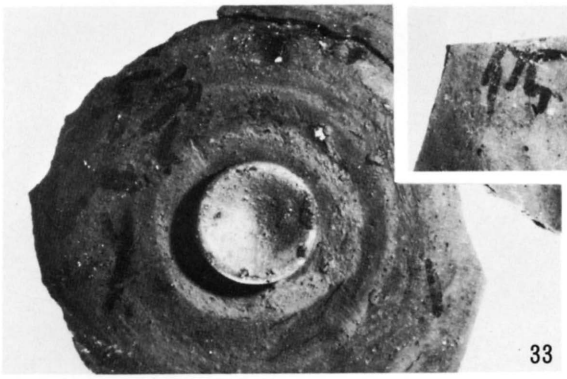
図版35　第33次調査出土墨書土器

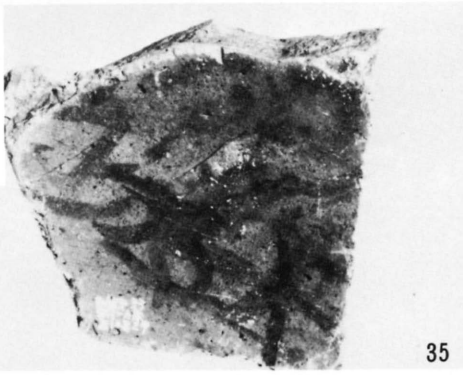


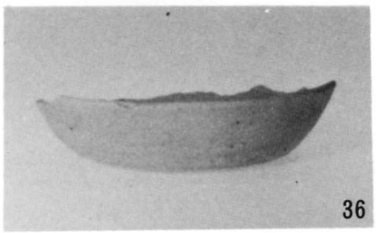


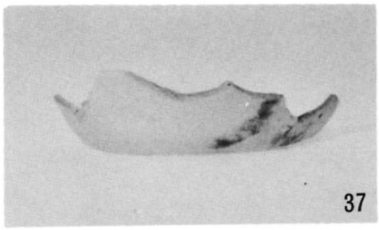


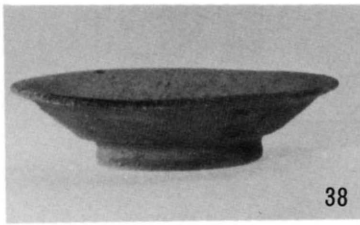


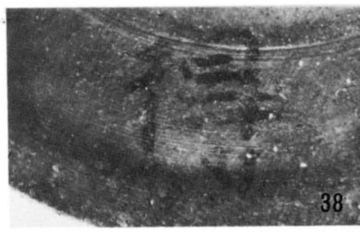




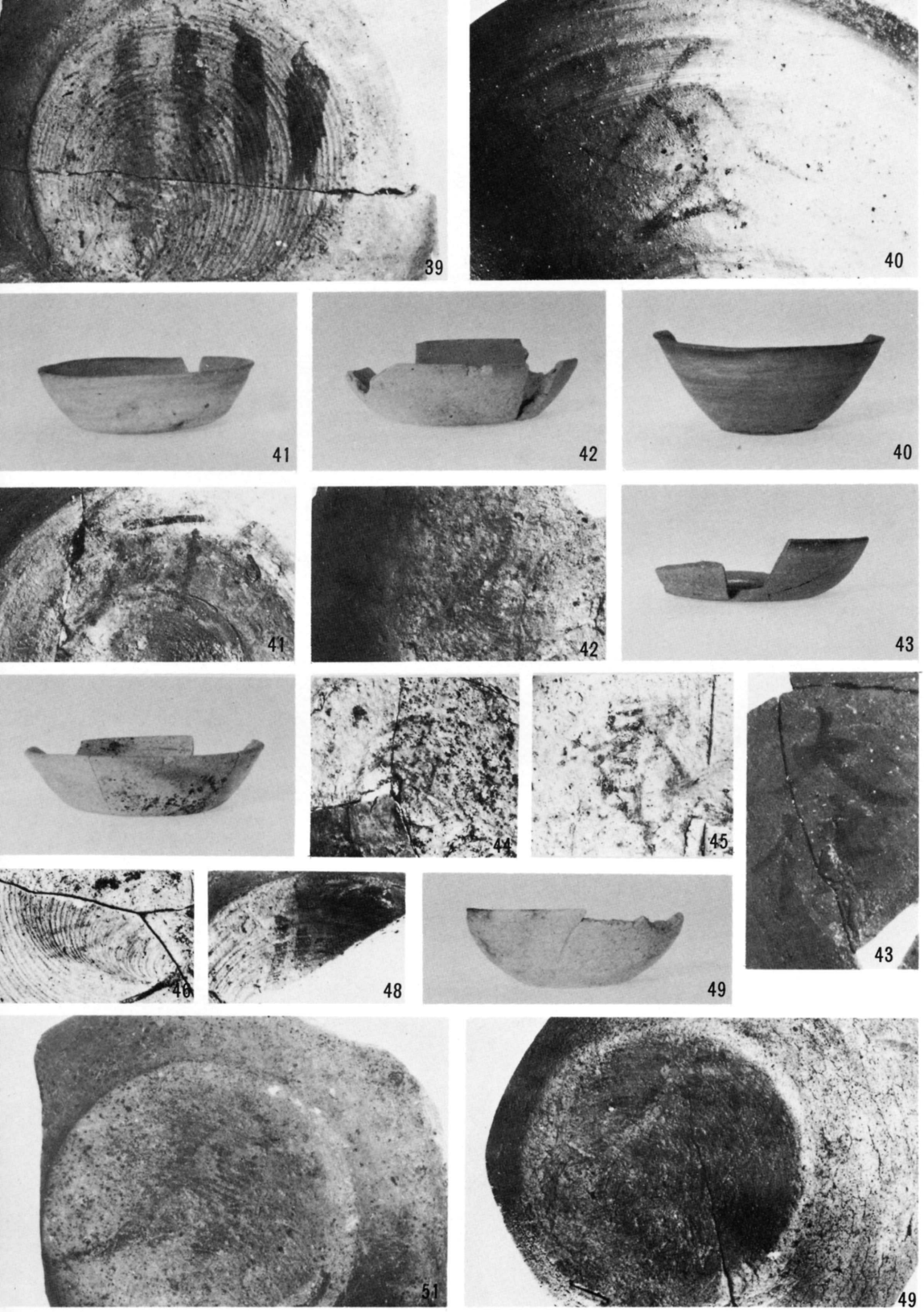




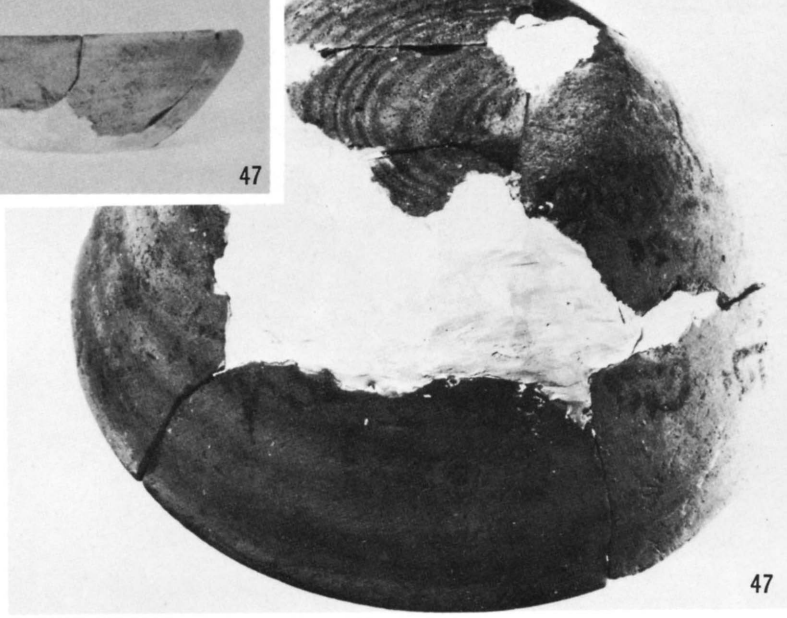


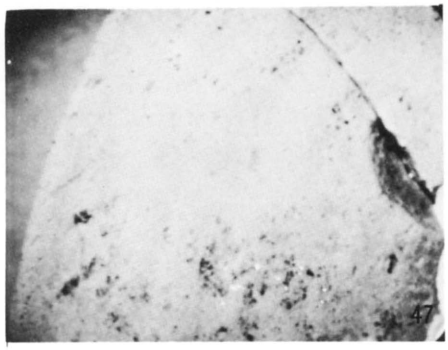


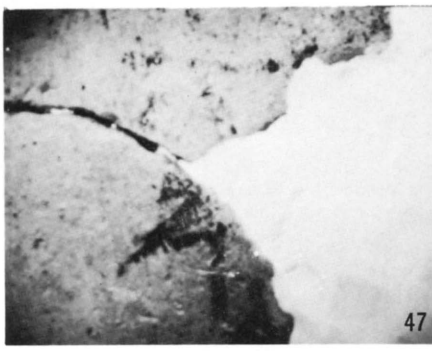
図版36　第33次調査出土墨書土器

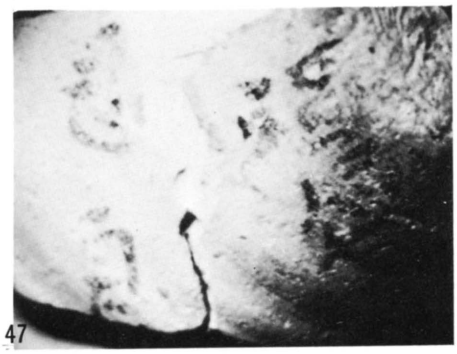


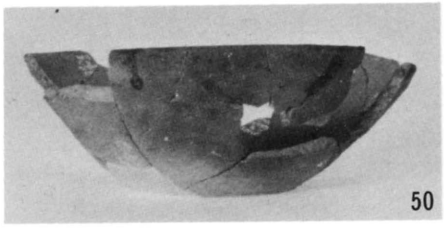
図版37　第33次調査出土墨書土器

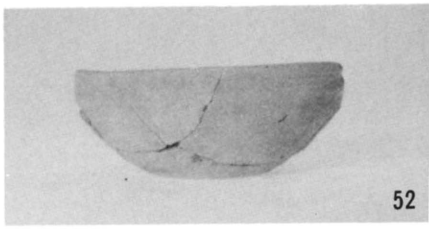






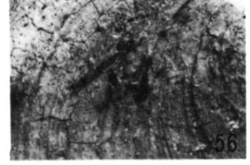


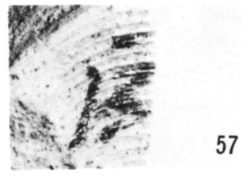


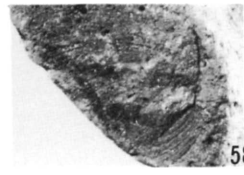


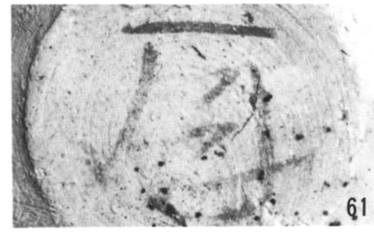
図版38　第33次
調査出土墨書土器

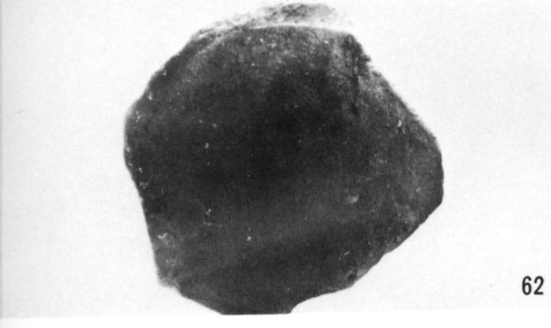
（47，52は赤外線
テレビカメラ使用）

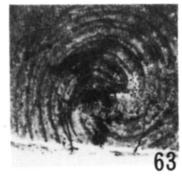


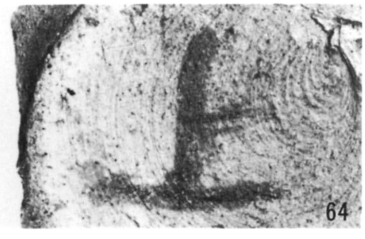


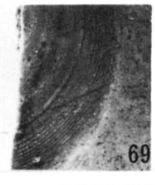


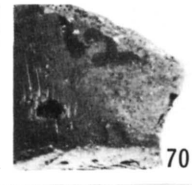


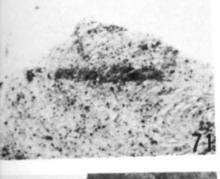


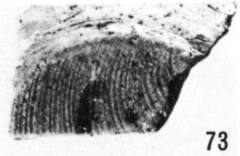


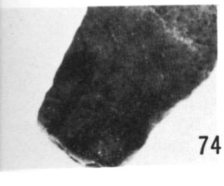


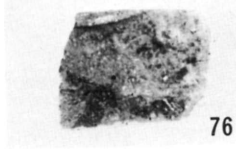


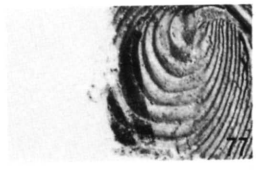




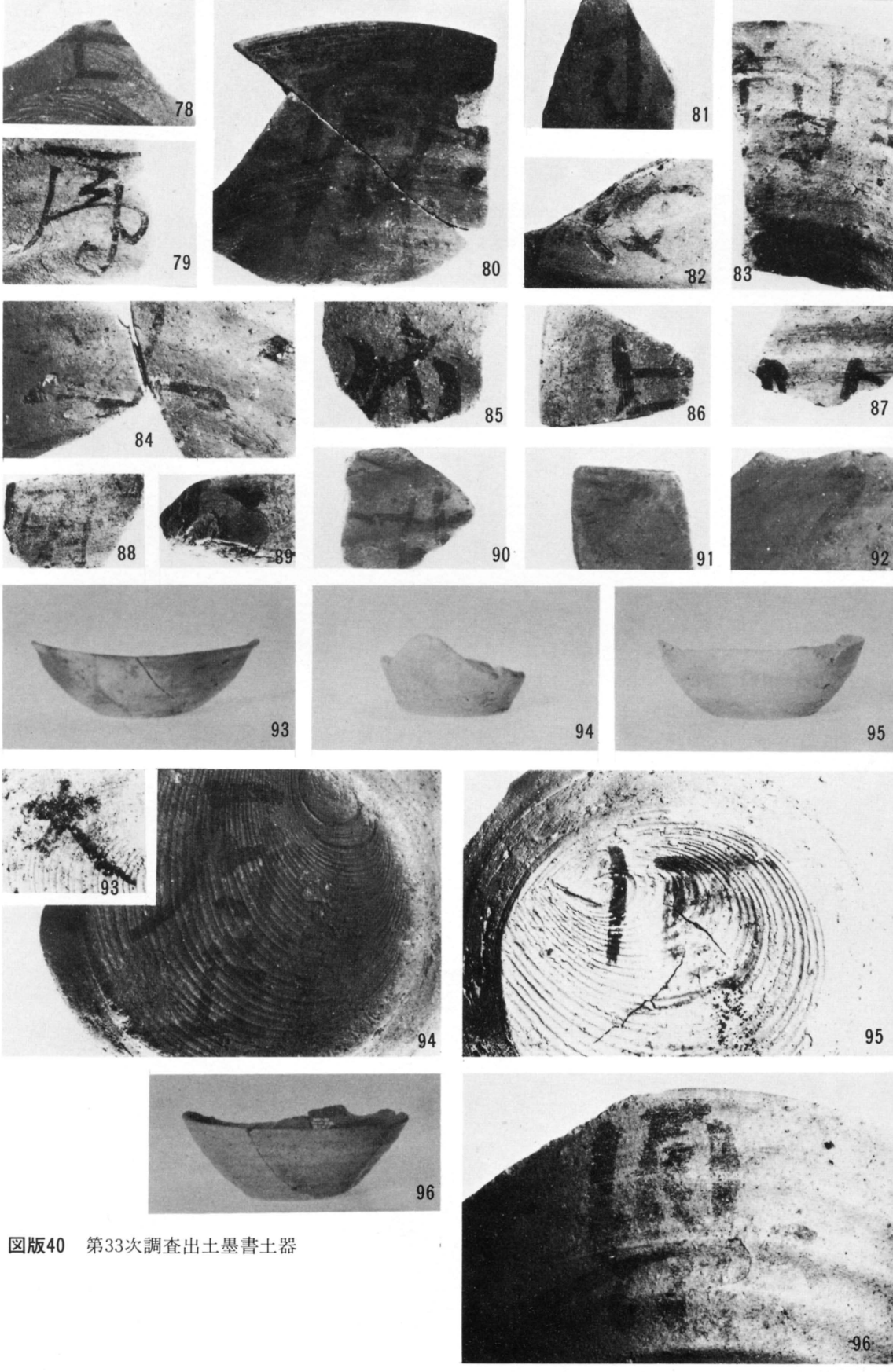




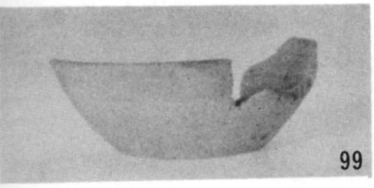


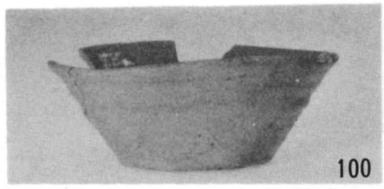


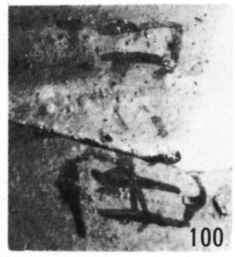
図版39　第33次調査出土
墨書土器

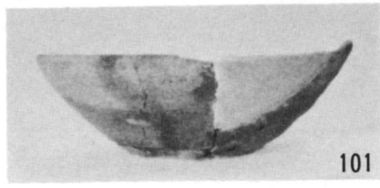


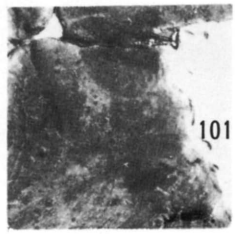
図版40　第33次調査出土墨書土器

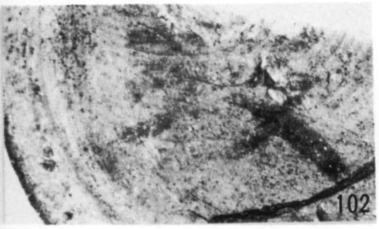


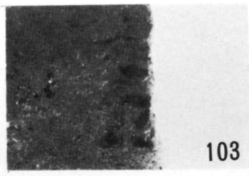


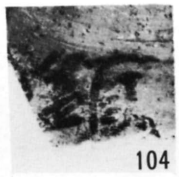




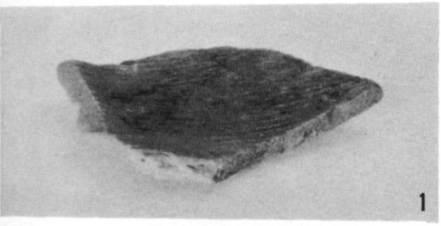


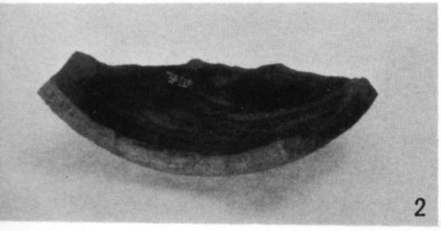


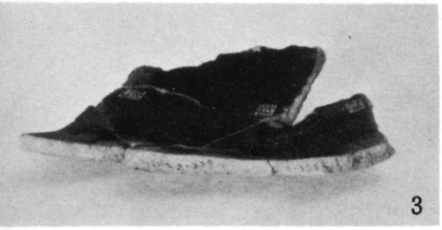


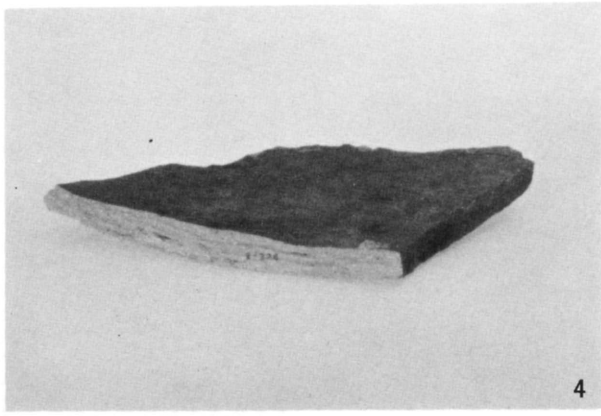


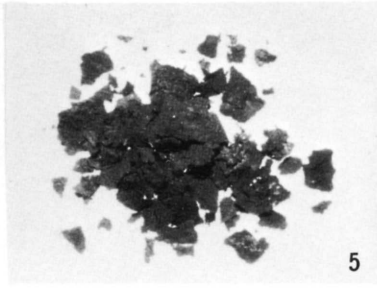
第33次調査出土
墨書土器







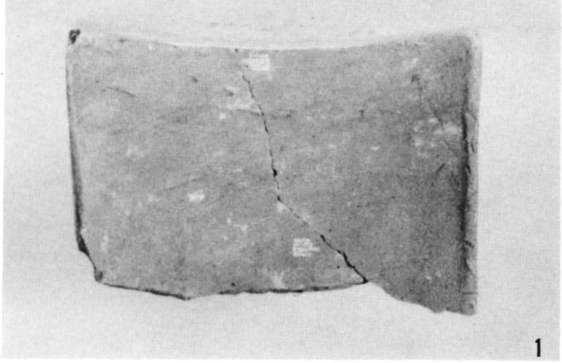


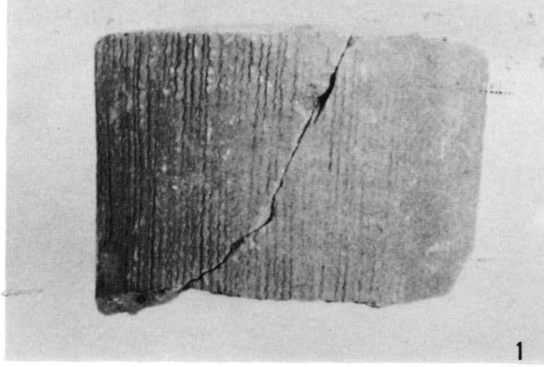


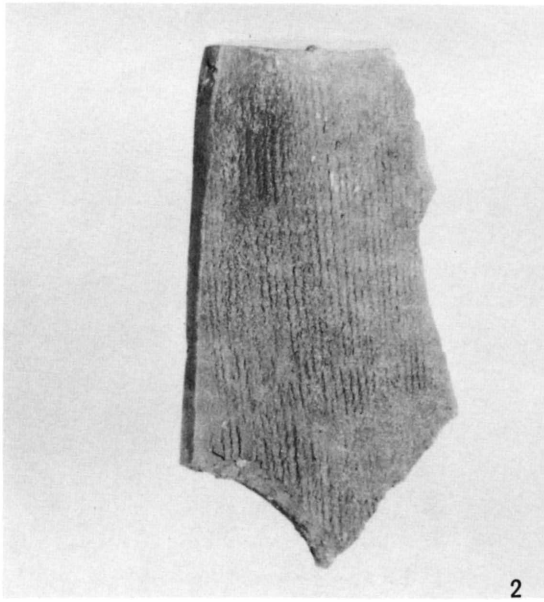
図版41　第33次調査出土遺物

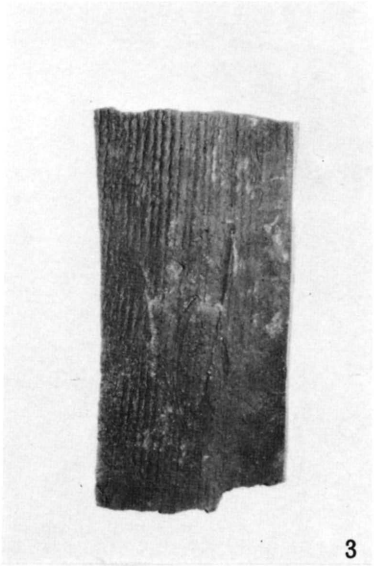
1～4　第33次調査出土
転用硯

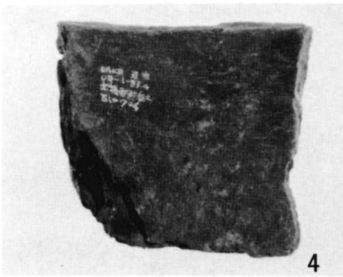
5，ＳＸ594鍛冶遺構
出土鉄片(粉)

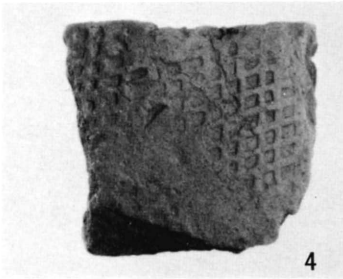




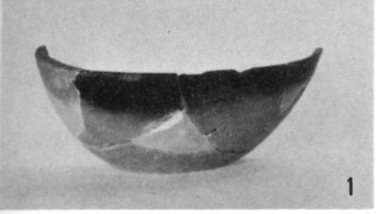


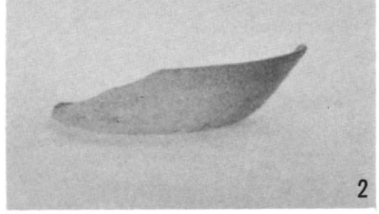


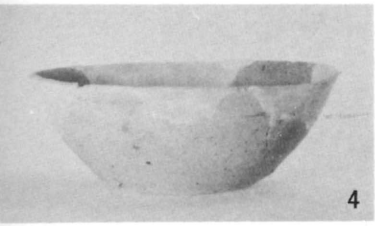


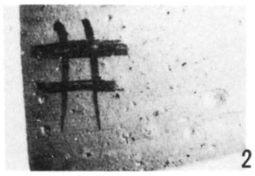


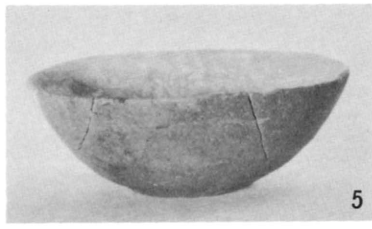
図版42　第33次出土瓦

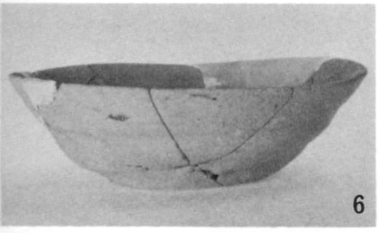


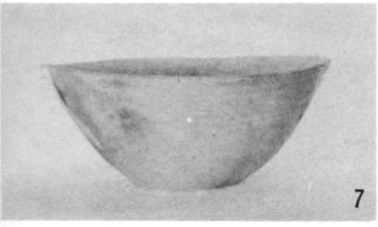


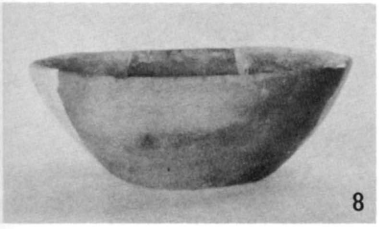


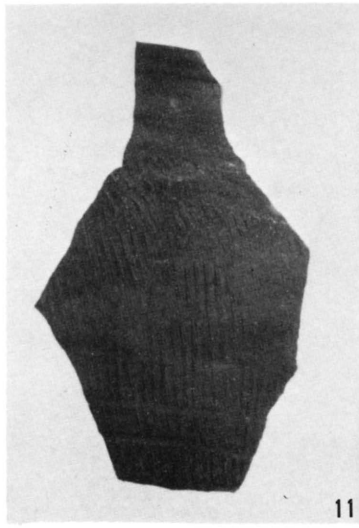










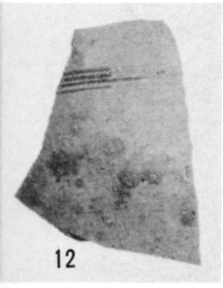


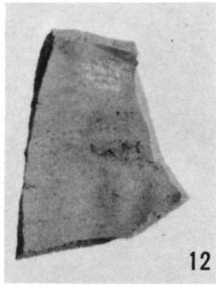
第34次調査出土遺物

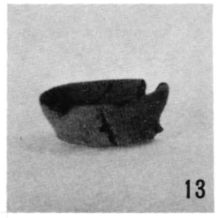
1～11　ＳＥ621出土

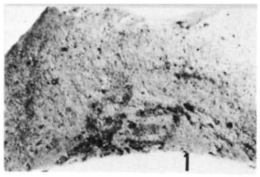
12　ＳＩ 610出土

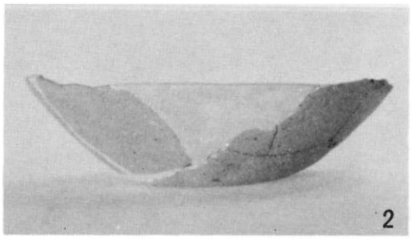
13，14　ＳＫ611出土

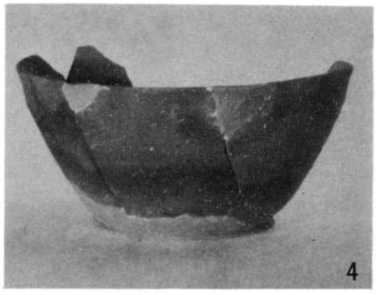


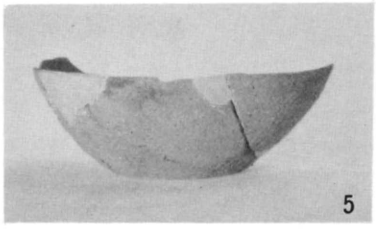


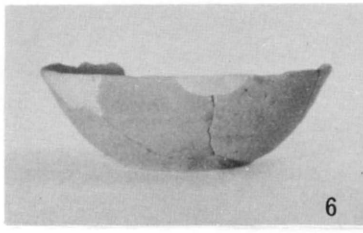








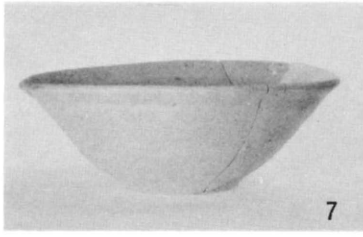


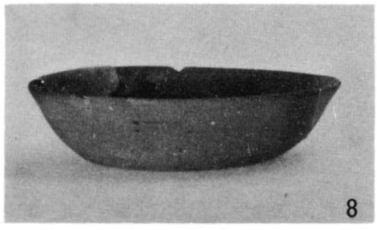


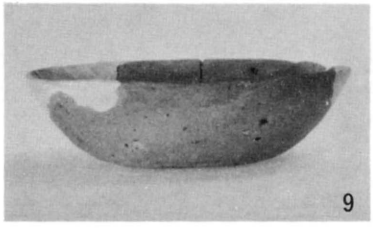
1～3　ＳＫ613出土

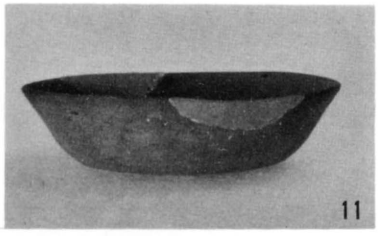
4～7　ＳＩ622出土

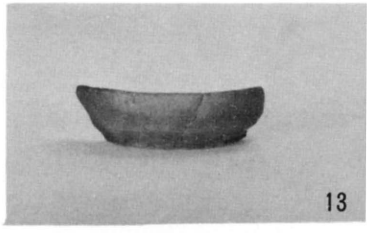
8～19　ＳＧ463湿地埋土各層出土

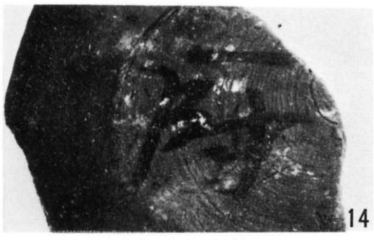


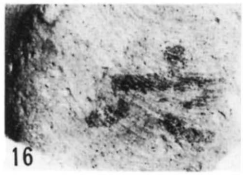


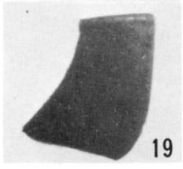


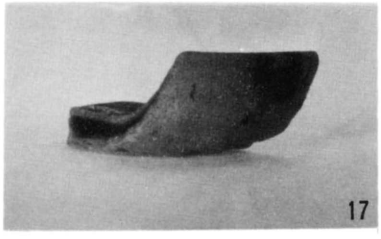


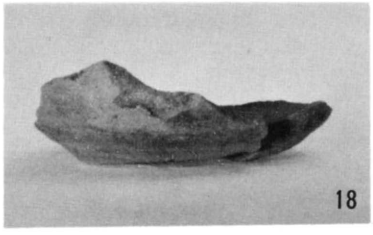


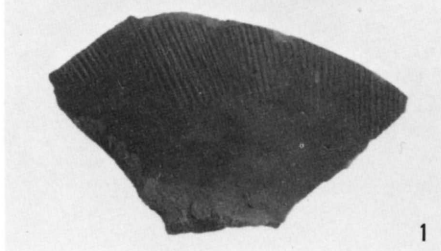


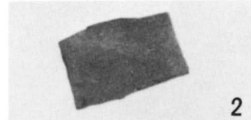


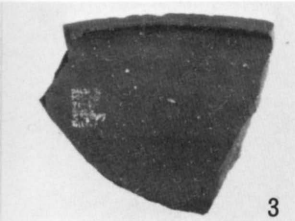


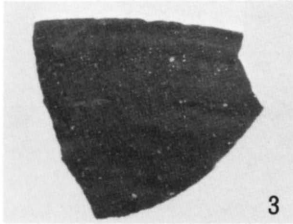


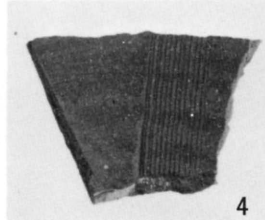


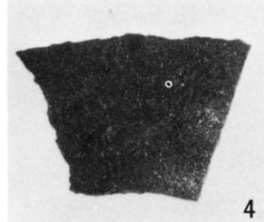


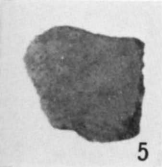


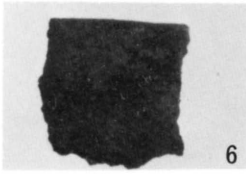


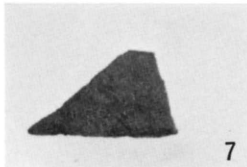


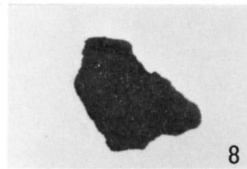


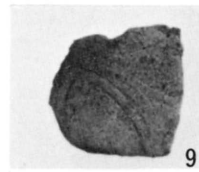


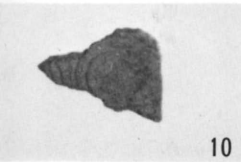


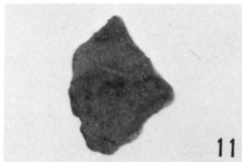


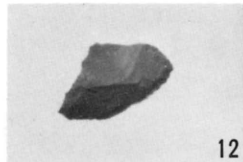




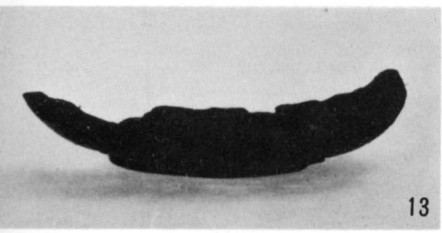


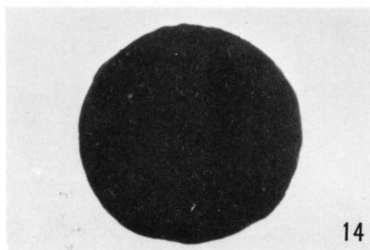


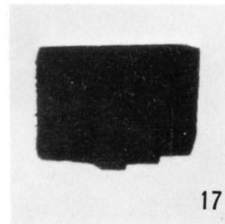


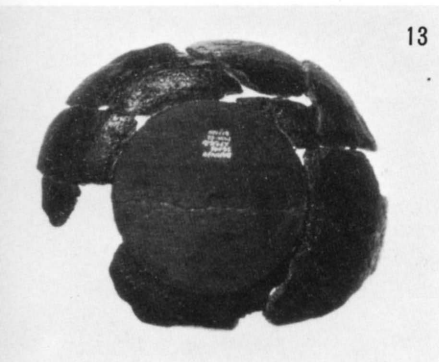


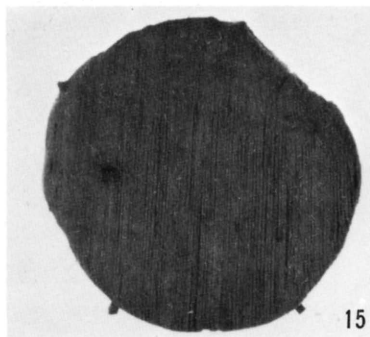
1～12
ＳＧ463湿地埋土各層出戸
13～20　木製品
13，21泥炭面，14～20ＳＥ621出土

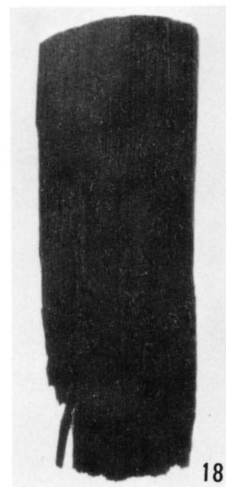


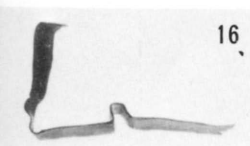


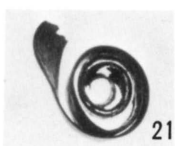


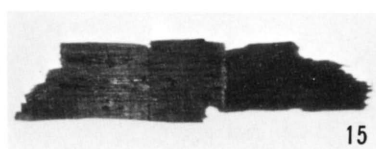












図版45

秋田城跡発掘調査事務所要項

I　組　織　規　定

秋田市教育委員会事務局組織規則　抜粋（昭和37年５月８日　教育規則第３号
改　正　　昭和52年11月21日第11号）

第１条

４．第３条第４項に掲げる事務を分掌させるため，社会教育課に所属する機関として，秋田城跡発掘調査事務所を置く。

第３条

４．秋田城跡発掘調査事務所における事務分掌は，おおむね次のとおりにする。

一，史跡秋田城跡の発掘に関すること。

二，史跡秋田城跡の出土品の調査および研究に関すること。

II　発掘調査体制

1）調　査　体　制

秋田市教育委員会　教育長職務代行者次長　池　田　　正

社会教育課長　　佐　藤　嘉　子

秋田城跡発掘調査事務所

氏　　名	職　名	所　　属
佐々木　栄　孝	所　　長	秋田市教育委員会社会教育課参事（兼）
小　松　正　夫	主　　事	〃　　社会教育課（兼）
石郷岡　誠　一	〃	〃　　〃　　（〃）
日　野　　久	〃	〃　　〃　　（〃）
西　谷　　隆	嘱　　託	〃　　〃
西鳥羽　礼　子	調査補佐員	

2）調査指導機関

宮城県多賀城跡調査研究所

発行　昭和57年３月　　秋 田 市 教 育 委 員 会　　秋田マイクロ写真印刷（株）